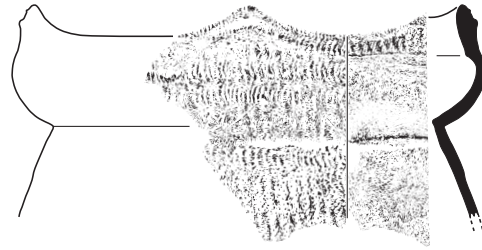


友岡遺跡

－ 長岡京跡右京第325次調査 －



2016

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



第 I 群 F 類

序 文

長岡京市は、市名が示すとおり平野部の大部分が「長岡京跡」であり、その宮都を解明するため財団法人として昭和 57 年に当センターが設立され、来年度に設立 35 周年を迎えます。この間、多くの文化財調査を実施してまいりました。発掘調査は「長岡京跡」のみならず、旧石器時代から近代までを対象として行われ、その結果、膨大な資料が蓄積されています。

本報告の対象となる場所は、「長岡京跡」「鞍岡廃寺」「友岡遺跡」など重複遺跡として認知されていました。平成元年の老人福祉施設建設工事に伴う発掘調査では、大量の縄文土器が出土しました。

併せて、調査地周辺の京都縦貫道建設に伴う発掘調査地では縄文時代の遺跡である伊賀寺遺跡が広がることが明らかになったところです。

当センターが実施した発掘調査から 20 数年を経ましたが、このたび長岡京市埋蔵文化財調査報告書第 57 集として刊行する運びとなりました。刊行にあたりましては、当センター専門委員の泉拓良先生のご指導のもと、多くの方々にご援助を賜ったことを深く感謝いたします。そして、本書が長岡京市における縄文時代解明の一助になることを祈念しております。

最後になりましたが、当センターの運営にご指導とご協力いただきました関係各機関、関係者、市民の皆様には厚くお礼申し上げます。今後とも埋蔵文化財の普及啓発に取り組んでまいりますので、なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

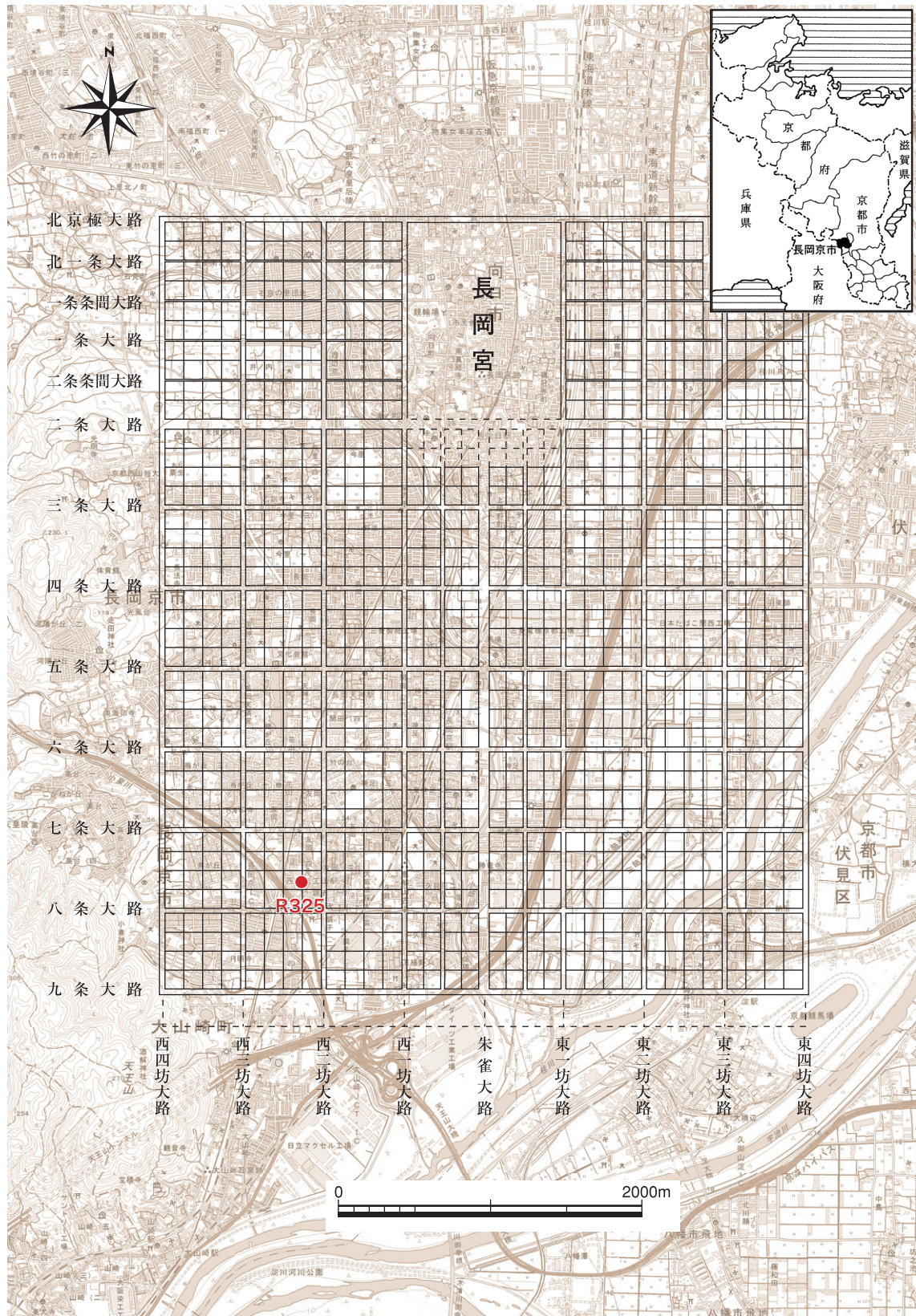
平成 28 年 10 月

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長 芦田 富 男

凡 例

1. 本書は、老人福祉施設建設に伴う事前の発掘調査として実施した、長岡京跡右京第 325 次調査（7AN NKG-3 地区）に関する報告書である。
2. 調査は、(財)長岡病院から委託を受けた(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施し、現地調査は同センター調査係主査の原 秀樹が担当した。(法人名と役職名は当時)
3. 現地調査は、平成元（1989）年 3 月 7 日～5 月 29 日まで行った。調査面積は 450㎡である。整理作業は、主に平成 14 年と 16 年、平成 27 年～28 年を中心に行った。
4. 本報告書の作成には、本センター専門委員の泉 拓良氏（京都大学大学院教授）のご指導を賜るとともに、次の諸氏からご援助を賜った。
小泉 翔太（京都大学大学院生）
妹尾 裕介（金沢大学埋蔵文化財調査センター）
上峯 篤史（京都大学人文科学研究所）
石器の写真撮影は、渡邊貴亮（関西大学大学院生）が撮影し、栗野翔太（奈良大学学生）と上峯が補助した。
5. 長岡京の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977 年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
6. 長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第 38 巻第 4 号の復原に従った。
7. 本書で使用する地形区分は、特に断らないかぎり「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991 年）によった。
8. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』（六）（2016 年）に従って略記した。
9. 本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第 VI 系によっている。
10. 図版の土器写真は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。
11. 本書の執筆分担は、各文末に示した。
12. 本書の編集は、技術補佐員・整理員の協力のもとに原が行った。



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本文目次

序文	i
凡例	ii
第1章	長岡京市の縄文遺跡	1
第2章	友岡遺跡の調査	5
1	調査概要	5
2	土器	9
3	石器	48
(1)	石器石材の種類と原産地	48
(2)	石器群の特徴	48
第3章	船元式の変遷と展開 — 友岡遺跡出土資料を軸として —	55
1	研究略史と研究課題	55
(1)	研究略史	55
(2)	研究課題	57
2	考察	57
(1)	友岡遺跡出土資料の検討	57
(2)	讚良川遺跡出土資料の検討	59
(3)	粟津遺跡第三貝塚出土資料の検討	60
3	まとめ	62

図版目次

巻頭図版 第I群F類

- 図版1 調査地から天王山を望む（北東から）
- 図版2 （1）調査地全景（南から）
（2）落ち込みSX02堆積状況（南から）
- 図版3 （1）落ち込みSX02 4区出土状況（西から）
（2）落ち込みSX02 4区鷹島式土器出土状況（西から）
- 図版4 （1）落ち込みSX02 3区出土状況（西から）
（2）落ち込みSX02 3区掘り下げ風景（西から）
- 図版5 （1）第I群A1類（表）
（2）第I群A1類（裏）
- 図版6 第I群A2類
- 図版7 第I群B類・C類
- 図版8 （1）第I群B類（表）
（2）第I群B類（裏）
- 図版9 第I群C類
- 図版10 第I群D類
- 図版11 第I群E類（1）
- 図版12 第I群E類（2）
- 図版13 第I群E2類
- 図版14 （1）第I群底部（鷹島式～船元Ⅱ式）
（2）第I群底部（船元Ⅲ式）
- 図版15 第I群底部（中期）
- 図版16 第Ⅱ群後期土器（表）
- 図版17 第Ⅱ群後期土器（裏）
- 図版18 第Ⅱ群後期土器（1）
- 図版19 （1）石鏃・異形石器
（2）石匙-1
- 図版20 （1）石匙-2
（2）剥片・石核
- 図版21 削器

图版 22 (1) 凹石·敲石

(2) 磨石·台石

图版 23 (1) 磨石-1

(2) 磨石-2

图版 24 (1) 磨石-3

(2) 磨製石斧

挿 図 目 次

第 1 図	長岡京跡と調査地の位置 (1/40000)	iii
第 2 図	発掘調査地位置図 (1/5000)	5
第 3 図	調査区の地区割り	6
第 4 図	地区別破片数グラフ	6
第 5 図	調査区検出遺構図 (1/200)	7
第 6 図	調査区土層図 (1/100)	8
第 7 図	調査区土層図 (1/100)	8
第 8 図	第 I 群 A1 類 (1/4・1/2)	12
第 9 図	第 I 群 A2 類 (1) (1/2)	13
第 10 図	第 I 群 A2 類 (2) (1/2)	14
第 11 図	第 I 群 A2 類 (3) (1/2)	15
第 12 図	第 I 群 B 類 (1/2)	17
第 13 図	第 I 群 B 類・C 類 (1) (1/4)	19
第 14 図	第 I 群 C 類 (2) (1/2)	20
第 15 図	第 I 群 C 類 (3) (1/2)	21
第 16 図	第 I 群 D 類 (1) (1/2)	22
第 17 図	第 I 群 D 類 (2) (1/2)	23
第 18 図	第 I 群 E1 類 (1) (1/2)	24
第 19 図	第 I 群 E1 類 (2) (1/2)	25
第 20 図	第 I 群 E1 類 (3) (1/2)	26
第 21 図	第 I 群 E2 類 (1) (1/2)	28
第 22 図	第 I 群 E2 類 (2) (1/4・1/2)	29
第 23 図	第 I 群 F 類 (1/2)	30
第 24 図	中期前葉土器底部 (1) (1/2)	31
第 25 図	中期前葉土器底部 (2) (1/2)	32
第 26 図	中期前葉土器底部 (3) (1/2)	33
第 27 図	第 II 群 後期初頭～前葉土器 (1/2)	34
第 28 図	第 II 群 後期前葉土器 (1/2)	35
第 29 図	後期土器底部 (1/2)	36
第 30 図	サヌカイトの原産地	48
第 31 図	石器-1 (1/1.5)	50

第 32 図	石器-2 (1/1.5・1/2)	51
第 33 図	石器-3 (1/2)	52
第 34 図	石器-4 (1/1.5)	53
第 35 図	友岡遺跡出土土器の類型分布	58
第 36 図	友岡遺跡出土土器の E 類 (1/4)	59
第 37 図	讃良川遺跡出土資料 (1/8)	60
第 38 図	粟津遺跡第 3 貝塚出土資料 (1/8)	61
第 39 図	三角形状文の成立過程	62

付 表 目 次

付表-1	乙訓地域における主要縄文遺跡の内容一覧表	4
付表-2	土器観察表	38
付表-3	石器観察表	54

第1章 長岡京市の縄文遺跡

長岡京市を含む桂川右岸の乙訓地域には、本書で報告する友岡遺跡をはじめ、重要な縄文時代の遺跡が数多く確認されている。京都盆地の縄文遺跡^(注1)という、比叡山西南麓の北白川遺跡群がよく知られている。しかし、桂川右岸の乙訓地域の縄文遺跡群もこれに匹敵する豊富な内容をもっており、京都盆地のみならず、近畿地方の縄文時代を考える上でも非常に重要な位置を占める。

特に近年、長岡京市内では小泉川流域を中心に、あらたな発掘調査によって多くの成果が得られている。したがって本章では、これらの成果を中心に、乙訓地域の縄文時代について時代を追って概観する。このとき、北白川遺跡群をはじめ近畿地方の同時期の遺跡の動向を踏まえることで、この地域の特色を浮き彫りにするとともに、今後の課題⁽²⁾について整理する。

草創期

草創期の遺物としては、有茎尖頭器が伊賀寺遺跡（R70次）、下海印寺遺跡（採集）などで得られている程度で、明確な遺構面や土器を伴う例はない。下海印寺遺跡（採集）や南栗ヶ塚遺跡（R121次）において、後期旧石器末～縄文草創期とみられる細石刃などが採集されており、今後の調査に期待される。

早期

京都盆地内では、早期前半に位置づけられる遺物は僅少で、京都市中京区の西ノ京南上合町遺跡で出土した大川式の土器が挙げられる程度である。なお、早期中葉に特徴的とされる異形局部磨製石器については、碓遺跡（R15次）や上里遺跡（採集）で見つかっている。

乙訓地域で早期のまとまった量の遺物が確認出来るのは、早期中葉の黄鳥式期から高山寺式期のころである。下海印寺遺跡では小片を含めて100点以上の土器が出土した。R899次の資料は報文中で熊谷博志氏によって早期中葉・高山寺式でも中頃までに収まると評価され、R962次の資料についても岩崎誠氏が同様の位置付けを与えている。ただし、いずれの資料も二次堆積土からの出土であるため、当該期集落の本拠は別にあると目される。

早期後葉から前期初頭にかけては、乙訓地域では遺物の出土は見られない。当該期は近畿地方中央部において遺跡の減少する時期であり、京都盆地に目を広げても、京都市一乗寺向畑町遺跡で当該期の良好な資料が得られているのみである。

前期

乙訓地域で明確な居住の痕跡が確認出来るのは、縄文前期後半からである。南栗ヶ塚遺跡（R955次）の調査では、縄文前期の住居と、土器・石器類や動物依存体などの豊富な遺物を検出した。

検出した竪穴住居は、出土土器から前期後半・北白川下層Ⅱb～Ⅱc式期に位置づけられる。ただし、南栗ヶ塚遺跡の包含層からは北白川下層Ⅲ式～大歳山式の土器も多量に出土している。この点について、稲畑航平氏は報文中で、Ⅱc式期とⅢ式期の間に居住形態および居住戦略の変化があった可能性を指摘している。つまり、遺物が多量にありながら居住痕跡が見いだせないⅢ式期には、平地式住居など痕跡の残存しにくい居住形態が採用されていたと考えられている。検

出遺構と出土遺物の不整合はしばしば見られる現象であるが、その理解に際しては多様な解釈をもって当たる必要性を喚起する点で、重要な指摘と言える。なお、北白川下層式の標式遺跡でもある北白川小倉町遺跡では、II a 式期からII c 式期にかけて盛期をむかえ、III 式期にかけて出土数が現象し、後続する大歳山式は出土しない。このように、京都盆地内でも北白川下層II c 式期からIII 式期にかけて遺跡の動向に変化を見いだせる。

中期

中期には、東日本で大集落が営まれるのと対照的に、近畿地方ではまとまった量の遺物や遺構の確認できる遺跡は限られている。そうしたなかで、友岡遺跡（R325 次）では、明確な遺構こそないものの中期前半期にあたる遺物が多く出土しており、重要である。一方、北白川遺跡群ではこれに後続する船元III・IV 式～里木II 式期に遺物の出土量が微増する傾向がある。

中期末葉・北白川 C 式期に至ると、近畿地方一円で遺跡数と遺構・遺物の検出量が急激に増加する。乙訓地域でも伊賀寺遺跡（R927・941・943・975・988 次）において9 棟もの竪穴住居が検出され、当該期の遺物が多量に出土している。また、鶏冠井遺跡（L172 次）など、それまで縄文遺跡の希薄であった向日丘陵東域の沖積低地にも遺物の出土が見られるようになる。北白川 C 式期以降は、若干の変動はありながらも、近畿地方一帯で安定して縄文集落が確認される。したがって、この時期の遺跡動向の変化が、近畿地方の縄文時代を通じた一つの大きな画期をなすことは明らかであろう。

後期

中期末葉に最初の盛期を迎える伊賀寺遺跡では、その後の後期初頭・中津式期から前葉・四ッ池式期にかけては活動痕跡が希薄である。R927 次の土坑 SK51 からは後期初頭・中津式とみられる鉢がほぼ完形で出土した。隣接する下海印寺遺跡では、範囲確認調査時に後期初頭の土抗、四ッ池式期の集石遺構が確認され、尾流地区（R973 次）では中津式期の袋状土坑が見ついている。北白川遺跡群でも、この時期は遺跡・遺物が希薄になることがうかがえる。一方、大阪府池田寺遺跡や奈良県布留遺跡などのように、大阪平野や奈良盆地では中期末葉から後期初頭まで継続する遺跡が多く見受けられる。おなじ近畿地方のなかで、地域によってこのような動向の差異が生じる要因は不明であるが、中津式の成立ともかかわり、重要な検討課題である。

後期前葉・芥川式期から北白川上層式期にかけて、井ノ内遺跡（R235 次）で竪穴住居、土坑が、下海印寺遺跡（R899・962 次）で柱穴群、土器埋設遺構、配石遺構のほか、伊賀寺遺跡（R927・988 次）、石田遺跡（L327 次）で土坑群が見ついている。注目されるのは、配石遺構や埋設土器など埋葬に関連するような遺構が確認されている点である。配石遺構・埋設土器は、ともに墓としての機能を有するものと認識され、こうした遺構から、後期前葉の集落構造の一端をうかがうことが出来よう。

後期中葉はふたたび遺跡・遺物が希薄になり、後葉・元住吉山II 式期から宮滝式期に至って伊賀寺遺跡が二度目の盛期を迎える。伊賀寺遺跡（R941・943 次）では後期後葉に比定される竪穴住居が9 棟検出され、火葬墓2 基と骨片を含む土壙7 基とその他土坑群が確認された。骨片の

出土する遺構が集中しており、墓域と想定される。また、この墓域に重複するように玉類の原石や未製品が散在していた。これらの中には完成品が見られないことから、報文において中川和哉氏は、製作時のゴミがこの場に捨てられたものとの理解を示されている。このほか、石田遺跡（L530次）でも後期後葉・宮滝式期の住居状遺構が1基検出されている。

晩期

晩期に至ると、特に長岡京市域では遺構・遺物の出土が少なくなる。一方、向日丘陵東域の沖積低地に所在する森本遺跡（P321次）、石田遺跡（L14次）、鶏冠井遺跡（L82・112・209・473次）では、晩期初頭から末葉に至るまで、遺構・遺物が豊富に確認されている。しかし、遺構については土器棺のみの検出がほとんどで、居住や生業にかかわる遺構は明確でない。そうしたなか、上里遺跡第12・13・15・16・18・19次調査では、滋賀里Ⅱ式～篠原式期の竪穴住居10棟、土器棺墓26基、土坑墓4基、配石遺構1基などと流路状遺構、突帯文土器期の土器棺墓3基、土坑6基、といった豊富な遺構と遺物を検出し、晩期集落の様相の一端が明らかとなった。特に、流路状遺構からは多くの炭化種子や動物骨などが出土し、食生活や自然環境の復元が試みられている。

縄文晩期に低地の利用が活発になることや、雲宮遺跡や鶏冠井遺跡など、晩期末葉の長原式を出土する遺跡から、弥生前期の土器も出土することが確認できる。これらの点を評価すれば、この地域において、縄文から弥生への移行は比較的スムーズに進行したことがうかがわれよう。

以上、長岡京市を中心とした乙訓地域の縄文時代について、時期を追って概観してきた。認識の過誤や遺漏もあるかと思われるが、この地域の重要な遺跡のひとつである友岡遺跡の報告に際して、研究課題の確認の足がかりとなれば幸いである。

（小泉 翔太）

注1) 千葉 豊『京都盆地の縄文世界・北白川遺跡群』新泉社 2012年

2) 本章の執筆に当たっては、以下の文献を参照した。特に遺跡の消長については岩崎氏の論考に詳しく、そちらもあわせて参照されたい。

小野山節ほか『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館図録第4冊 1991年

長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史 資料編一』長岡京市役所 1991年

（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会編『向日市の遺跡』2008年

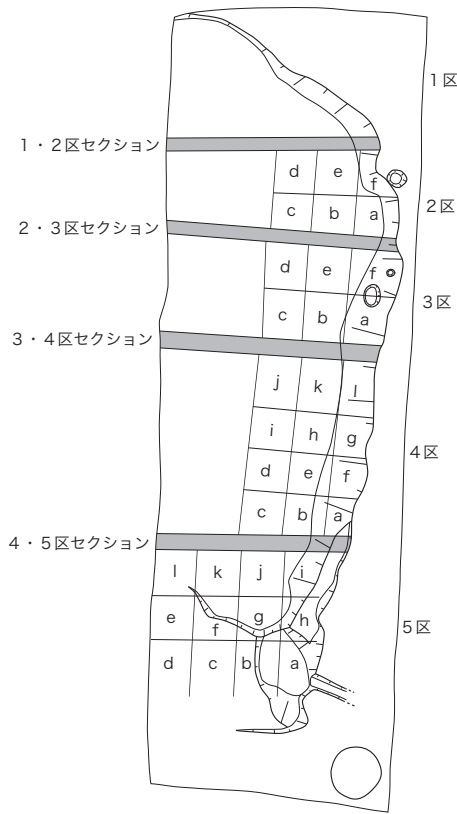
岩崎 誠「乙訓における縄文遺跡の消長」『第17回京都府埋蔵文化財研究集会 資料集』2010年

中川和哉「小泉川流域の縄文時代遺跡の消長」『第17回京都府埋蔵文化財研究集会 資料集』2010年

3) 泉 拓良「京都大学植物園遺跡」『仏教芸術』115号 1977年

付表-1 乙訓地域における主要縄文遺跡の内容一覧表

遺跡名	長岡京 次 数	遺 構	遺 物
下海印寺	R899 R962 R973	【後期初頭・中津】土坑 【後期前葉・四ッ池】集石遺構 【後期前葉】柱穴群、配石遺構、埋設土器	【草創期】有茎尖頭器、細石刃 【早期】高山寺 【中期】船元、里木II 【後期】中津、四ッ池、北白川上層1・2 石鏃、石錐、石匙、削器 磨石・敲石、石皿、石錘、石斧 石棒
伊賀寺	R70 R927 R941 R943 R975 R988	【中期末・北白川C】竪穴住居9、土坑 【後期初頭・中津】土坑 【後期前葉・上層1～2】土坑 【後期後葉・凹線文】竪穴住居9、火葬墓2、 土坑墓7、土坑 【晩期前葉】土坑	【草創期】有茎尖頭器 【中期】北白川C 【後期】中津、福田K2、四ッ池、北白川上層 1～3、元住吉山I・II、宮滝 【晩期】滋賀里III a 石鏃、石錐、石匙、尖頭器 磨石・敲石、石皿、石錘、磨斧、打斧 石冠、石棒、玉
友岡	R325	—	【中期】鷹島～船元IV 【後期】中津、四ッ池、北白川上層1・2 石鏃、石匙、削器 磨石・敲石、石皿、石錘
南栗ヶ塚	R121 R955	【前期後半・下層II b～c】竪穴住居	【旧石器～草創期】細石刃 【前期】羽島下層II、北白川下層Ib～大蔵山 石鏃、石錐、石匙 磨石・敲石、石皿、石錘、磨斧 軽石、粘土塊、焼獣骨
碓	R14 R15 R284	—	【早期】局部磨製異形石器 【中期】船元IV 【後期】中津、北白川上層1・2 石鏃
井ノ内	R235	【後期前葉・芥川】竪穴住居 【後期前葉】土坑 【晩期末葉・長原】土器棺	【中期】北白川C 【後期】中津、芥川、北白川上層1・2 【晩期】長原
上里	R22 R25 R830 R772 R850 R878 R903 R956	【中期末葉・北白川C】土坑2 【後期】土坑3 【晩期前半】竪穴住居10、土器棺26、土廣墓4、 流路状遺構2、配石遺構、集石遺構2、土坑 【晩期後葉】土器棺3、土坑6	【早期】局部磨製異形石器 【中期】北白川C 【後期】中津、北白川上層 【晩期】滋賀里II～篠原、滋賀里IV～長原 石鏃、石錐、削器 磨石・敲石、石皿、石錘、磨斧 石棒、石刀、勾玉、丸玉
森本	P141 P143 P263 P321 P388	【後期前葉・上層1・2】土坑 【後末晩初】ピット群 【晩期・滋賀里II～III a】流路	【後期】北白川上層1～3、滋賀里I 【晩期】滋賀里II～III a、篠原、長原 石鏃、石錐、削器 磨石・敲石、石皿、磨斧 石棒、石刀
石田	L327 L525 L530	【後期前葉・上層2】土坑 【後期後葉・宮滝】住居状遺構 【晩期初頭】土坑 【後期初頭～晩期末】流路	【後期】中津、福田K2、北白川上層1・2、 宮滝 【晩期】滋賀里I～III a、篠原、長原
鶏冠井	L172	【中期末・北白川C】土器溜まり 【後期・中津～上層】流路、土器溜まり 【晩期中葉・篠原】土器棺 【晩期後葉・滋賀里IV】土器棺 【晩期後葉・船橋～長原】土坑	【中期】北白川C 【後期】中津、北白川上層1・2、宮滝 【晩期】滋賀里II～長原 石棒、石刀



第3図 調査区の地区割り

地区	破片数	点数	百分率
1区	432	432	1.5%
1・2区セクション	60	60	0.2%
2区	1,600		
2区a	182		
2区b	72		
2区c	52		
2区d	35		
2区e	20		
2区f	31	1,992	7.1%
2・3区セクション	584	584	2.1%
3区	3,182		
3区a	439		
3区b	414		
3区c	81		
3区d	12		
3区e	197		
3区f	433	4,758	16.9%
3・4区セクション	2,167	2,167	7.7%
4区	6,363		
4区a	28		
4区b	810		
4区c	659		
4区d	588		
4区e	1,343		
4区f	400		
4区g	299		
4区h	1,193	14,840	52.7%
4区i	439		
4区j	850		
4区西	2		
4区k	1,298		
4区l	568		
4・5区セクション	1,124	1,124	4.0%
5区	698		
5区f	99		
5区g	168		
5区i	80		
5区j	10		
5区k	218		
5区l	66		
その他	845	845	3.0%
		28,141	100%

第4図 地区別破片数グラフ

以下、小礫を含む灰褐色粘質土の地山となる。遺構は、地山面から検出しており、井戸 SE01 と落ち込み SX02 がある（第5図）。

井戸 SE01 は、河原石を積み上げた石組井戸。井戸内に投棄された遺物は、平安時代～戦国時代の土師器、瓦器、陶器類など多様である。築造時期については、完掘しておらず不明。

落ち込み SX02 は、調査区の北西隅から弓なりに曲がり南壁に向かって直線的に延びる。緩やかに西へ傾斜しており、底面は平かである。多量の縄文土器と石器は、ほぼ落ち込みの一つ所に集中しており、出土した層位はA断面とB断面の肩口付近に堆積する3層と4層及びC断面の4層が最も多く、次に多いのが2層である（第7図）。地区別の遺物量は、全体の半数以上が4区から出土しており、両端の1区と5区ではかなり減少する。各区の破片数は、先に区全体で取り上げたため、英字の小文字が付く小区画は少なくなっている（第4図）。部分的な検出のため人為的な掘形か、自然地形か判断がつかないが、地形条件は段丘のへりに相当する。本地点から靫岡廃寺をはじめとする古代～中世の遺構が確認されなかったのは、近世以後に耕地化された時点で段丘面が削平されたためと考えられる。（原 秀樹）

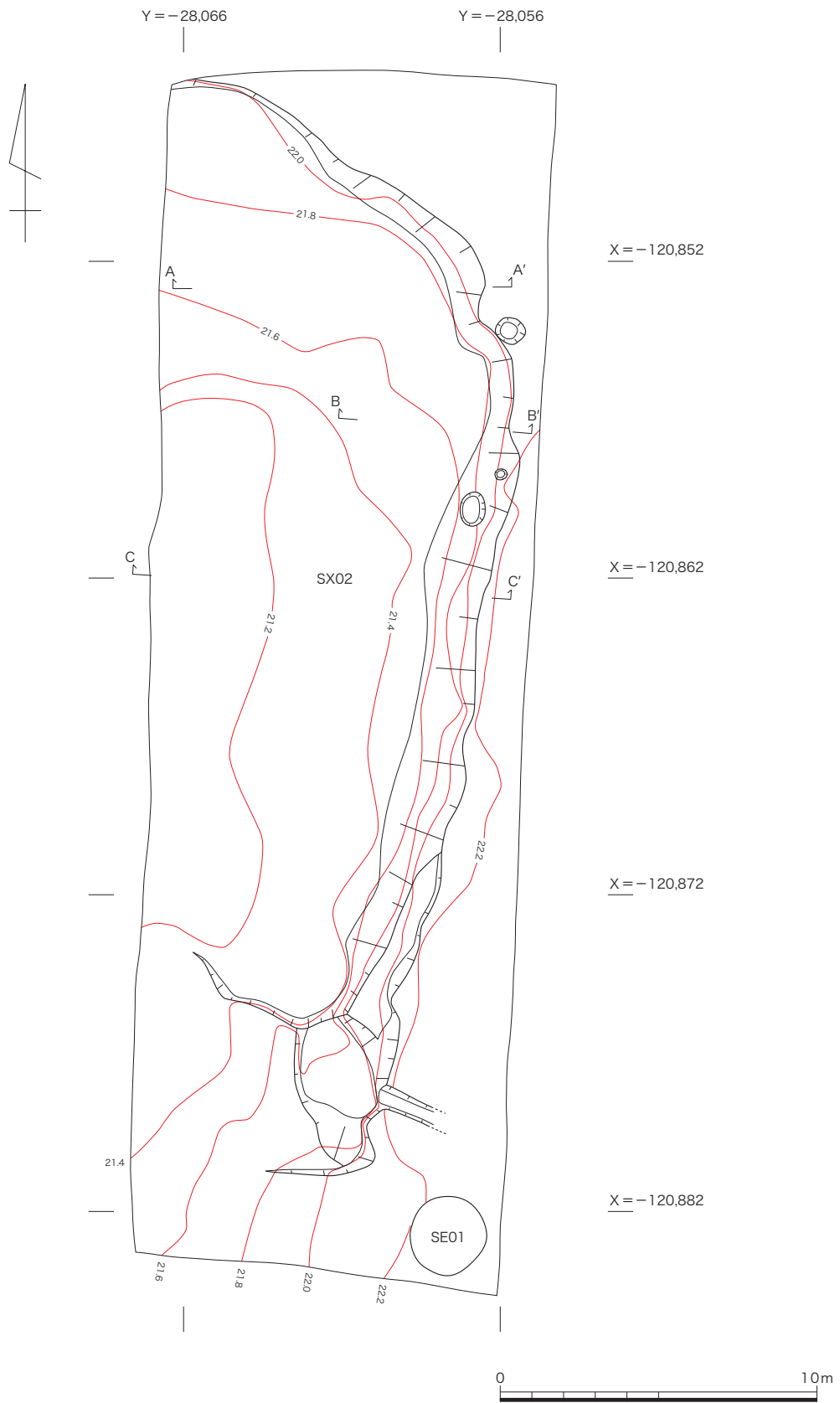
注1) 小田桐 淳「長岡京跡右京第129次調査概要」『長岡京市センター報告書』第2集 1985年

2) 木村泰彦「右京第616次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年

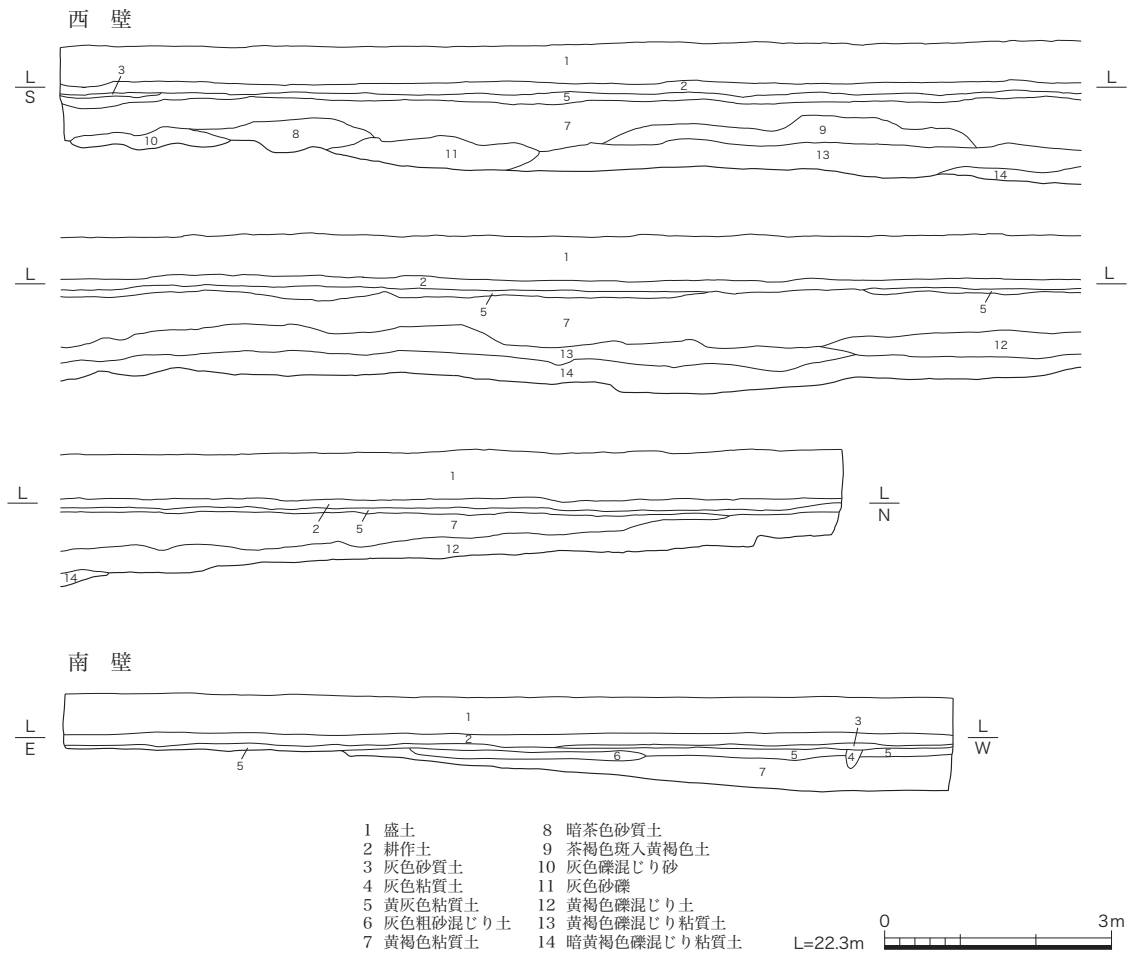
3) 中島皆夫「右京第1074次調査略報」『長岡京市センター年報』平成25年度 2015年

4) 木村泰彦「右京第1019次調査報告」『長岡京市センター報告書』第56集 2013年

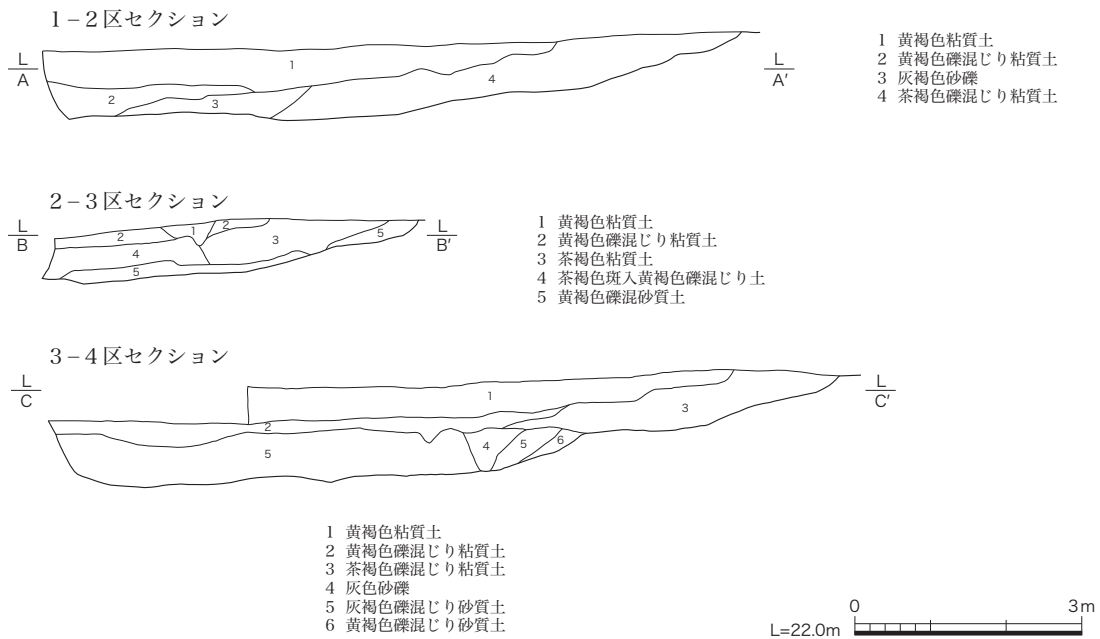
5) 木村啓章・黒坪一樹・増田孝彦「長岡京跡右京第941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」『京都府センター報告集』第137冊 2010年



第5図 調査区検出遺構図 (1/200)



第6図 調査区土層図 (1/100)



第7図 落ち込み SX02 土層図 (1/100)

2 土器

友岡遺跡から出土した縄文土器は、中期初頭から後期前葉までの時期幅をもつ。出土した土器の特徴からみると、帰属時期には偏りがあり、Ⅰ群（中期初頭～前葉）、Ⅱ群（後期初頭～前葉）の大きく二つの時期に分けて考えることが可能である。このうち、中心となる時期は出土量の傾向からみるとⅠ群である。さらに縄文土器型式でみると、間壁忠彦・間壁葎子によって、1971年の『里木貝塚』において編年（以下、これを里木編年と呼称する）された船元Ⅰ式からⅢ式が主体である。こうした傾向から、おそらく当該遺跡の盛行時期は、中期前半を考えることができよう。

本章では、出土した縄文土器群について、Ⅰ群、Ⅱ群に分けて、各時期の内容を報告する。さらに、出土した縄文土器の大半を占めるⅠ群は、当遺跡を特徴づけており、かつ型式学的に連続性が認められる土器群である。とくに、友岡遺跡は調査概報が出された段階（原 1990）から、里木編年の船元Ⅱ式から船元Ⅲ式にかけてまとまった資料をもつ遺跡として認識されている（泉 2008）。中期前葉から中葉への変遷を知ることのできる良好な資料であり、その内容を細分する意義がある。

そこで、つぎに示す分類方法にしたがって、Ⅰ群をA類からE類に細分して、形態的な特徴と施文方法の相違を示すことにより、友岡遺跡における中期初頭から前葉の土器の内容について詳述していく。他方、後期前半のまとめりであるⅡ群は、出土した量もかぎられているため、こまかな分類はせずに、すでに設定されている縄文土器型式にしたがって、その内容を報告していく。

Ⅰ群の分類

A類（第8図1～第11図24）

前期末の器形を引継ぎ、胴部から口縁部にいたる屈曲部（口胴部界）が強くくびれた、いわゆるキャリパー形を呈する。内面にも、口胴部界に対応する位置に強い稜線を形成している。主体的な文様は、半截竹管状工具による爪形文である。

A1類（第8図1～4）

楕円状を呈する、いわゆる盃状突起をもつものが特徴的である。繊維痕のない節が細長く密接した縄文を地文としてほどこし、長大な圧痕となる。文様は、口縁部に沿って幅広な結節凸帯をもち、凸帯上に爪形文をほどこす。このほか円形状の凸帯に爪形文をつけた意匠をもつものもある。里木編年の船元Ⅰ式B類、鷹島式（巽・中村 1969）と特徴を同じくする。

A2類（第9図5～第11図24）

凸帯をとまわず、直接爪形文をほどこすことが特徴である。繊維痕が顕著に目立つ、縦長の節をもつ縄文を地文としている。口縁部の形状は、波状を呈する口縁のほか、平縁を呈する口縁も多い。文様には、爪形文を曲線状にほどこすものがある。里木編年の船元Ⅰ式A類と特徴を同じくする。

B類 (第12図25～第13図39)

くびれがよくなり、ゆるやかなキャリパー状を呈する器形をなす。口縁形態は内彎するが、ゆるく立ち上がり気味の器形もある。地文は、A2類と同様な特徴をもつ縄文を基調とするが、堅い繊維をもつ原体による縄文がつけられており、節よりも縦長の繊維痕が目立つ点で異なる。文様は、円形状工具や、棒状工具、半截竹管状工具によって刺突列をほどこすことを特徴とする。

B1類 (第12図25～29)

口縁に凸帯をもち、凸帯上に円形刺突列をほどこすことが特徴である。また口縁下半に、爪形文を弧状に配して意匠を描くものがある。里木編年の船元Ⅱ式A類と特徴を同じくする。

B2類 (第12図31・32、第13図36・37)

口縁直下に円形刺突列をほどこすことが特徴である。凸帯はもたない。円形刺突列は二段構成をとるものが多い。また口縁下半にも、円形刺突列を弧状に配して意匠を描くものがある。里木編年の船元Ⅱ式B類と特徴を同じくする。

B3類 (第12図30・33・34)

半截竹管状工具で刺突することで、文様をほどこすことが特徴である。ほどこされる文様は、形状に多様性をもつが、二段構成を基調とする点が共通する。里木編年の船元Ⅰ式C類に含まれるものと特徴を同じくする。

B4類 (第12図35)

胴部から口縁にむかって、ゆるく外反する器形をもち、内彎を基調とする船元式の器形と大きく異なる。棒状工具による刺突列を多段にほどこしている。里木編年の船元Ⅲ式E類に含まれるものと特徴を同じくする。

B5類 (第13図38・39)

口縁上に指頭状の押圧を付したもの。外反する口縁と内彎する口縁の二つの口縁形態がある。押圧の工具に違いはあるが、特徴的には、里木編年の船元Ⅰ式D類にみられる二枚貝の背面押圧痕文に近い。

C類 (第13図40～第15図55)

縄文のみを施すものを一括した。ゆるやかなキャリパー状を呈する器形となり、口縁形態は内彎形態を基調とするが、外反気味になるものや、立ち上がり気味となるものがある。地文は、繊維痕が目立つ縦長の節をもつ縄文が主体となる。里木編年の船元Ⅰ式F類、G類と特徴を同じくするが、なかには船元Ⅳ式の特徴である縄巻縄文をもつものがある。

D類 (第16図56～第17図73)

内彎する口縁をもち、ゆるやかなキャリパー状を呈する器形となる。文様の意匠に、凸帯上に刺突をもたない素凸帯や、素凸帯に沿う竹管状工具による沈線で、微隆起帯（微隆起線文）となっているものを主体としているものである。地文となる縄文は、繊維痕が目立つ縦長の節をもつ縄文ほか、円形に近い節の大きな縄文がみられる。また条線や沈線と組み合せて文様を構成する。里木編年の船元Ⅲ式A類と特徴を同じくする。

E類 (第18図74～第22図111)

くびれの弱まった、ゆるやかなキャリパー状を呈する器形をなす。文様は、沈線によって意匠を描く。里木編年の船元Ⅲ式B類に含まれるものと特徴を同じくする。地文は、円形に近い節の大きな縄文が主体となるが、縄巻縄文も見受けられる。

E1類 (第18図74～第20図95)

弧状、区画状沈線を組み合わせて、意匠的な文様を描くもの。弧状沈線は連弧状の文様(連弧文)をなす。区画状沈線は、対向するように配された連弧文を区画するためにほどこされるほか、口縁部に平行帯を意識して、ほどこされているものもある。

E2類 (第21図96～第22図111)

三角形状、区画状沈線を組み合わせて、意匠的な文様を描くもの。三角形状沈線を連続的に配して、幾何学的な文様をつくりだすものが主体である。

F類 (第23図112～119)

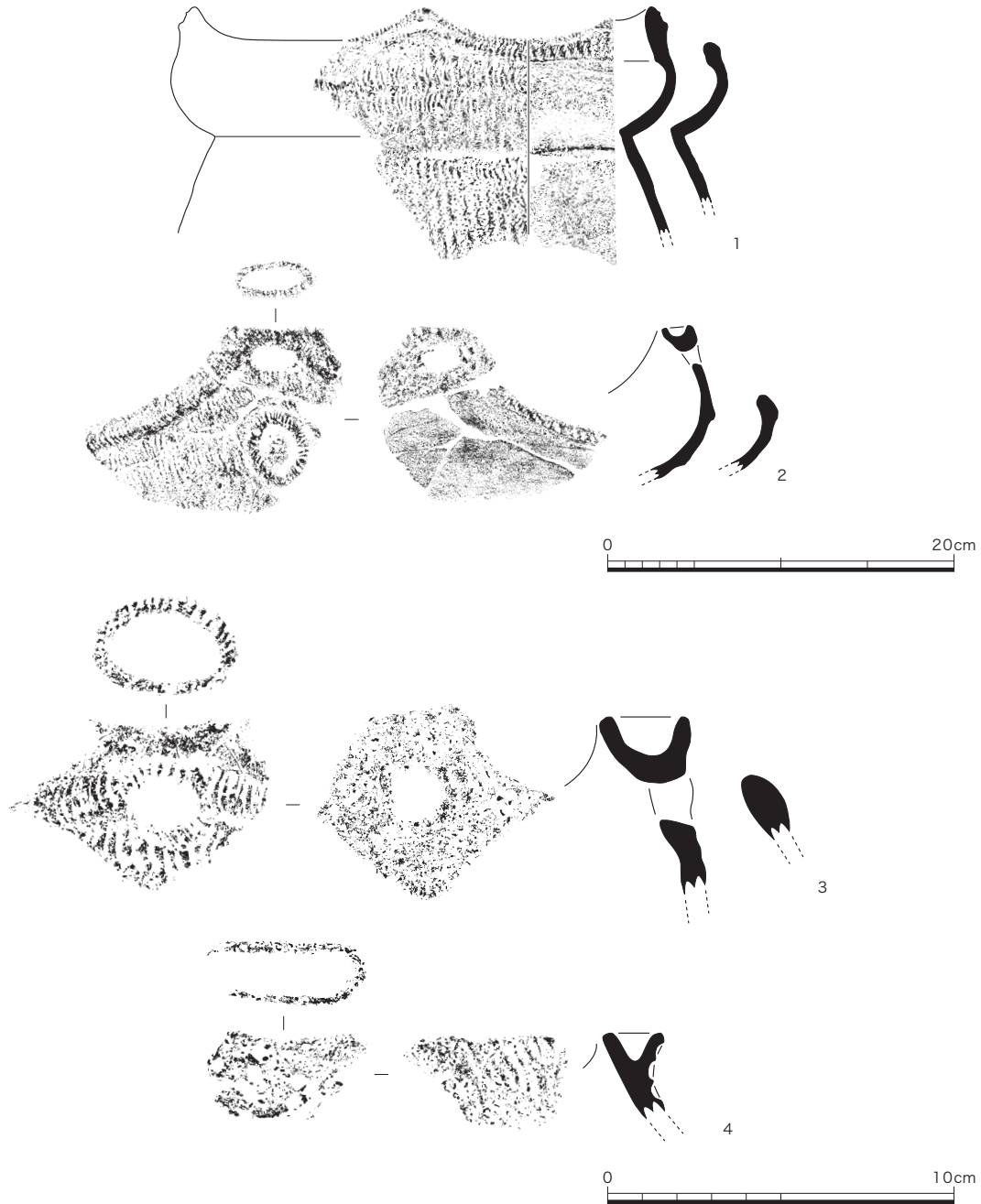
船元式にはない文様構成をもち、他地域に分布の中心をもつ文様系統、いわゆる異系統の土器を一括した。

このように、里木編年を対照として、第Ⅰ群土器をA類からF類の六つに大別した。さらに、それぞれの類型ごとに、A類をA1類とA2類の二細別、B類をB1類からB5類の五細別、E類をE1類とE2類の二細別した。

里木編年を分類の基準にしているため、ここで本章分類と里木編年の、およその対応関係を示しておく。A1類が鷹島式、A2類が船元Ⅰ式、B類が船元Ⅰ式～Ⅱ式、C類が船元Ⅰ式～Ⅲ式、D類が船元Ⅱ式、E類が船元Ⅲ～Ⅳ式である。この六大別十一細別の分類をもとに、出土土器の内容を報告していく。

第8図1～4は、第Ⅰ群A1類である。1は口縁部から胴部上半がのこる破片で、強く外屈する胴部から内彎する口縁部にいたる器形をなす。内面には、それに対応する明瞭な稜がみられる。波状を呈する口縁をもち、口縁端部の上面に刻みをつける。口縁に沿うように、凸帯が貼り付けられ、凸帯上に半截竹管状工具による連続爪形文がつけられる。その下にも二段の連続爪形文をほどこし、胴部にも二段の連続爪形文をほどこす。また、口縁内面に明瞭な段をもち、縄文をほどこす。口径は26.2cm。

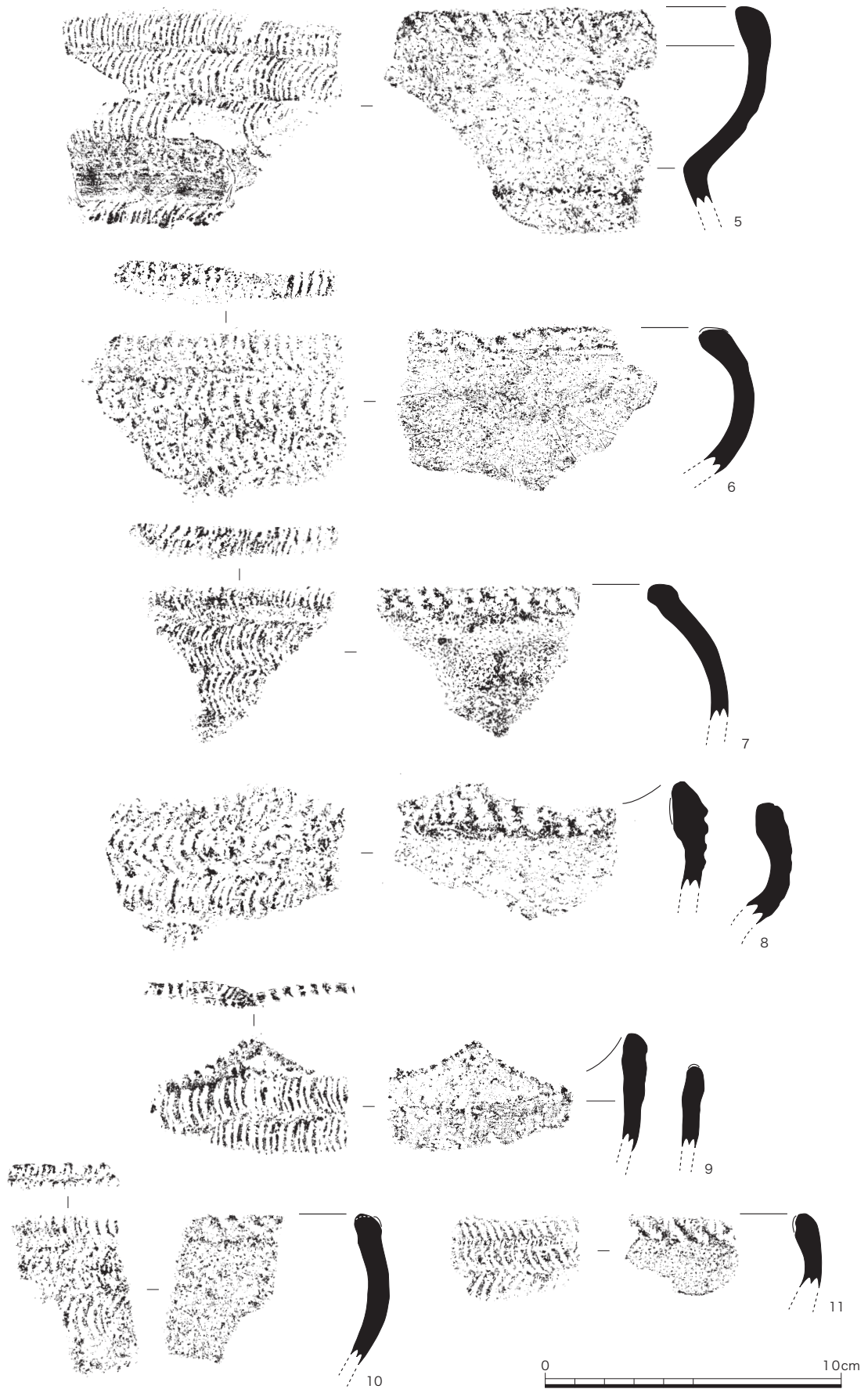
2～4は突起をもつ口縁部片で、突起は、いずれも頂部に楕円状の孔をもつ、いわゆる盃状突起である。2は突起部直下に穿孔をもち、その下に円形状に凸帯を貼り付けている。また、口縁に沿う形で凸帯を貼り付ける。それぞれの凸帯上には爪形文をほどこす。口縁内面には不明瞭ながら、段をもち縄文をほどこす。3は小破片のため、詳細は不明であるが、2と同様な構成をとる可能性は高い。ただし、口縁内面に縄文はほどこすものの、段は形成しない。こうした特徴から、2と比べて、型式学的に新相を示しているといえる。4は1～3のような爪形文はみられず、内外面に縄文をもつことを特徴とする。A1類は鷹島式の特徴をもっているが、4は船元Ⅰ式までくだる可能性がある。



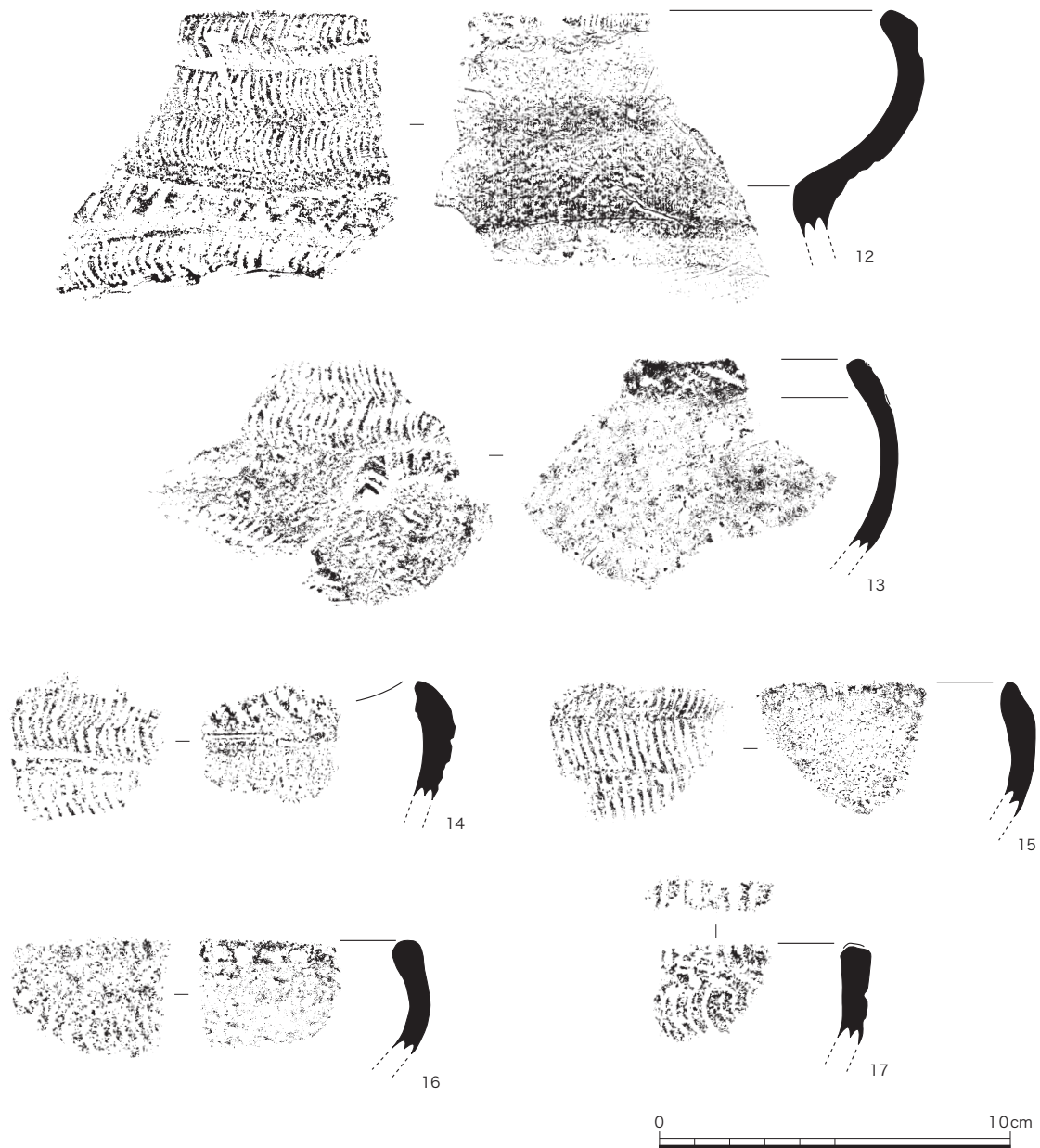
第8図 第I群 A1類 (1/4・1/2)

第9図5～第11図24は、第I群 A2類である。第9図5～第10図17は口縁部片で、内彎する口縁形態をなし、口縁内面に段を形成しないことを基調とする。土器外面には凸帯はみられず、直接爪形文をほどこしている。一方で、8のように口縁の内面に段をのこすものも見受けられ、土器外面の爪形文の施文方法と口縁内面の段形成の変化は漸移的である。すべて船元I式の範疇に入る。

5～7、10～17は平縁を呈する口縁をもつ。口縁部の外面には、多段に構成された爪形文をほどこすが、一段目が下段とは施文幅が異なり、口縁部文様帯のなかで、口縁直下文様帯の独立を意識させている。口縁端部に刻みをつけ、口縁内面にはRLの撚りをもつ縄文をもつことを



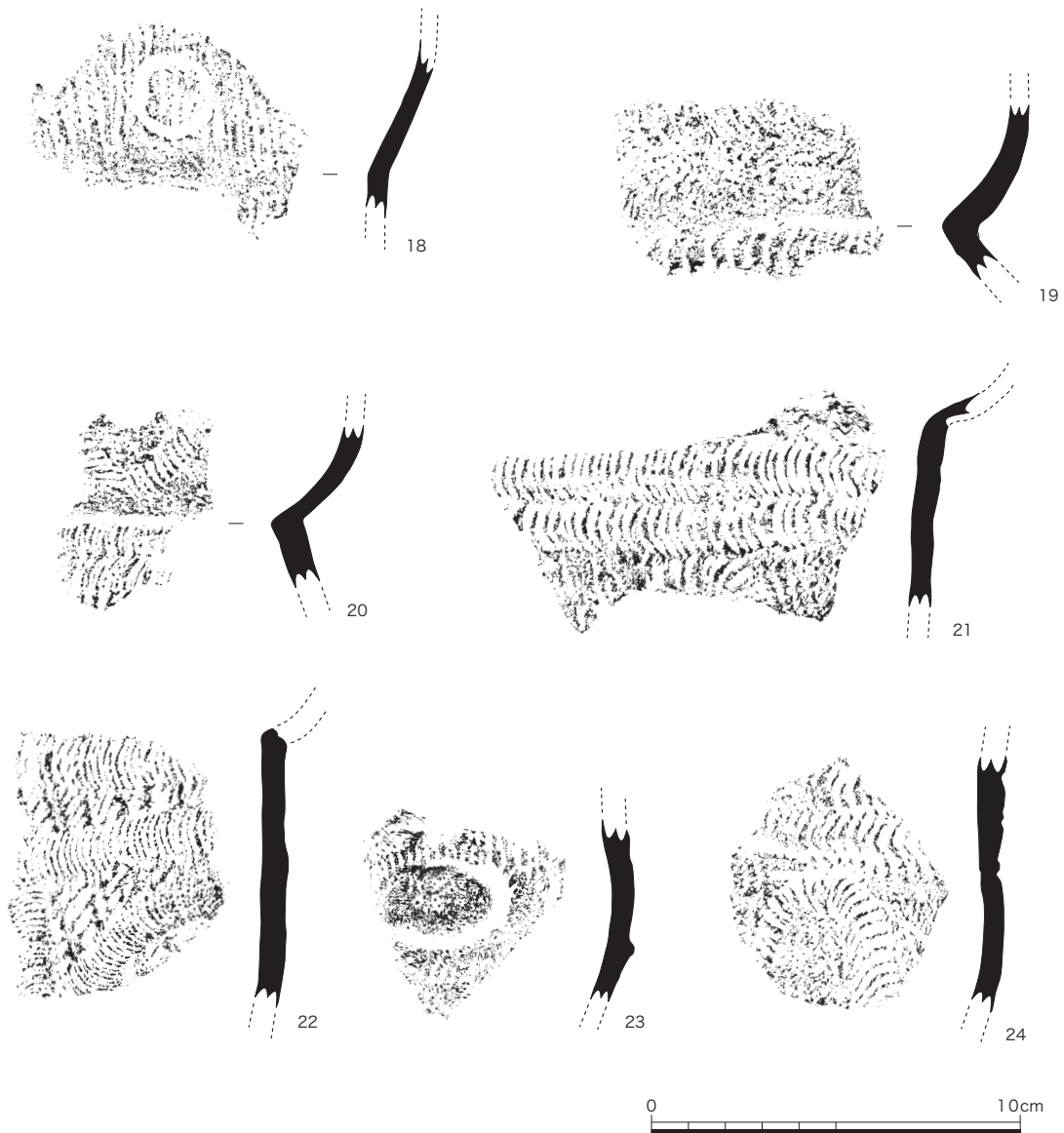
第9図 第I群 A2類 (1) (1/2)



第10図 第I群A2類(2)(1/2)

基調とするが、12と17は口縁内面に縄文をもたず、13～15は口縁端部の上面に刻みをもたない。

5は口縁部から胴部までのこる破片で、胴部から口縁部にいたる口胴部界でつよく屈曲し、内面には、それに対応する明瞭な稜がみられる。また口胴部界の直上を無文とし、口縁部文様帯と胴部文様帯の区分を意識させており、口縁部文様帯と胴部文様帯は完全に分離した文様構成となっている。6は内彎のつよい口縁形態をなす。口縁直下の爪形文は工具全体の半分がつけられている。7は口縁外面にほどこされる多段構成の爪形文について、一段目と二段目のあいだの空気が広く、口縁直下の文様帯を際立たせている。また7も6と同様に、口縁直下の爪形文が、施文工具の半分のみでつけられている。



第11図 第I群A2類(3)(1/2)

8・9は波状口縁をなす口縁部片である。口縁外面の爪形文は、口縁に沿わずに水平にほどこされ、口縁直下の文様帯はなく、口縁端部上面の刻みのみとなっている。10は7と特徴が似ており、同一個体の可能性もある。11は口縁端部の上面に刻みをほどこし、口縁直下の文様帯に刻みがほどこされている。12は、口縁部から胴部までの破片で、胴部から口縁にいたる口胴部界の屈曲がつよく、内面にはそれに対応する明瞭な稜がみられる。口縁直下の爪形文は強くほどこされ、その下の二段の爪形文とのあいだが沈線化している。また、口胴部界の直上に、連続しない長形状の刻みをほどこすことで、5と同じように、口縁部文様帯と胴部文様帯を区分している。13は口縁直下の爪形文が二段構成となっている。その下に、爪形文による円形状の文様を描く。

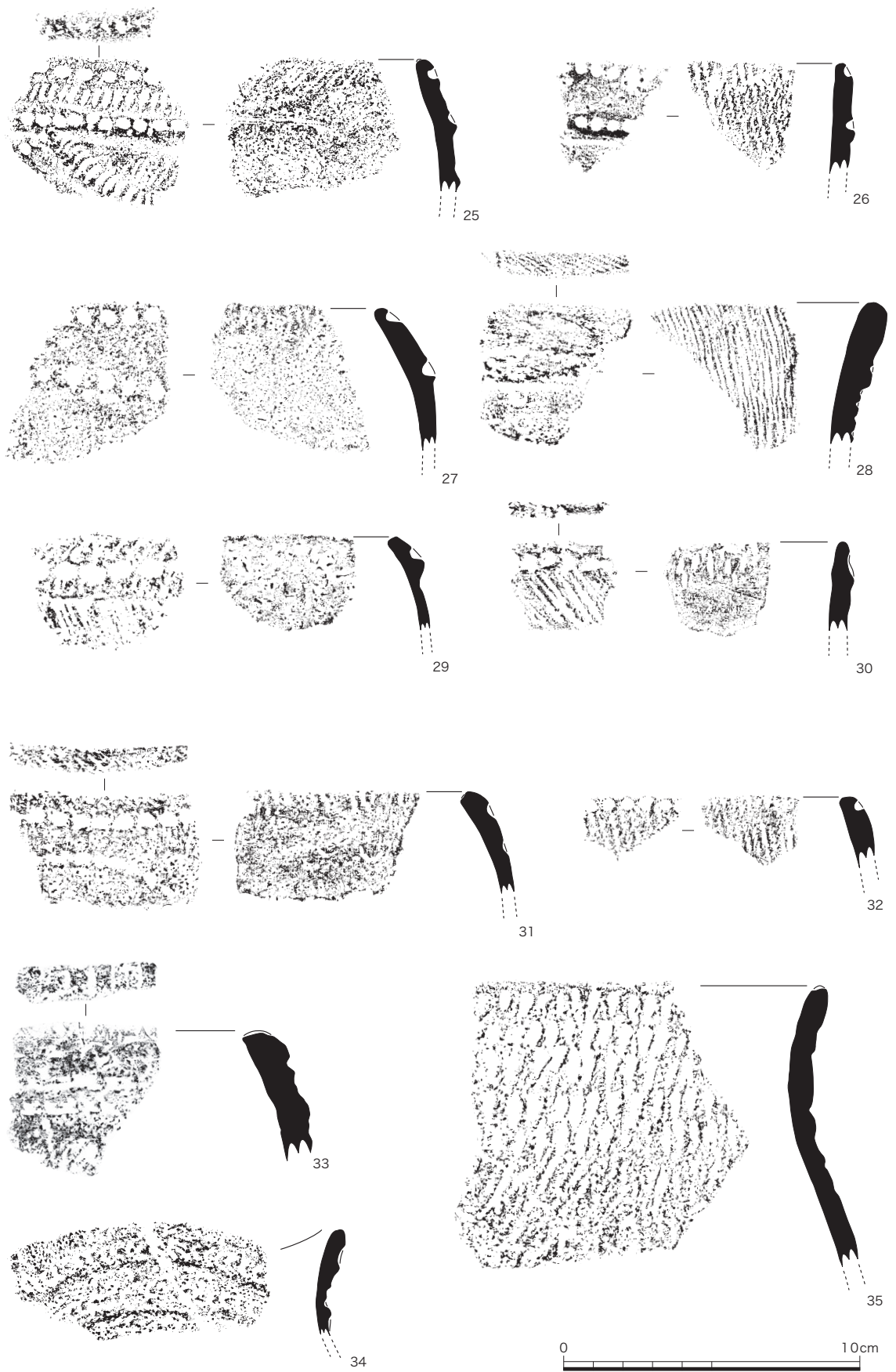
14は波状を呈する口縁部片である。口縁直下の爪形文の向きが下段の爪形文と逆位となっていて、口縁直下文様帯を意識させる。15は平縁を呈する口縁部片だが、14と同様に口縁直下文様帯が逆位の爪形文となる。16は器面の磨滅が激しく不明瞭ではあるが、口縁外面に爪形文をほどこし、内面に縄文をほどこす。17は8、9と同様に口縁直下に爪形文による文様帯はなく、口縁端部上面の刻みのみとなっている。

18～21は、第I群A2類の胴部から口縁部へいたる屈曲部の破片である。18は、胴部からゆるやかに口縁にいたるもので、条痕地をもつ。口縁部下半に、沈線によって円形状の文様を描いている。19～21は爪形文がほどこされるが、5や12と同様に、口縁部文様帯と胴部文様帯の分離がうかがえる。19・20は胴部からつよく屈曲して、口縁にいたる器形をなす。また、内面にそれに対応する明瞭な稜を形成している。20は口縁部下半に円形状の文様を爪形文で描く。21は一部しかのこらないが、胴部に二段構成の平行する爪形文をほどこし、その下に紡錘状の意匠を爪形文で描いていると推察する。

22～24は、第I群A2類の胴部片である。22はLRの撚りをもつ縄文を地文とし、爪形文による文様を描く。小片のため詳細は不明だが、胴部に垂下する文様と円形状の文様を爪形文で描いていると推察する。23は地文をもたない。爪形文によって横長楕円形状の文様を描く。24はRLの撚りをもつ縄文を地文とし、爪形文による文様を描く。小片のため詳細は不明だが、胴部に紡錘状の文様を描いていると推察する。

第12図25～29は、第I群B1類である。平縁をなす口縁をもち、内彎する口縁形態をなし、円形刺突列による文様を描く。また、口縁部内面に縄文帯をもつ。25～27は口縁部に平行する凸帯をもち、これによって、口縁部下半と区分される。口縁直下の刺突列と対応する刺突列を凸帯上にもち二段の刺突列を構成する。口縁内面は縄文をほどこす。25は、一段目の刺突列の下に平行する爪形文をもち、二段目の刺突列の下には、弧線状の意匠をもつ爪形文をほどこす。26と27は、25と同様な文様構成をもつが、爪形文はともなわない。また27は25や26と比較して、口縁内面の縄文帯の幅がせまい。28は、口縁部に平行する凸帯をもつが、凸帯上には縄文をほどこし、口縁内面にはI字状の刻みをほどこす。口縁端部上面にも刻みをもつ。円形刺突列をもたないが、25～27と文様構成が類似するため、本類に含めた。29は、口縁直下に凸帯をもち、その凸帯上に円形刺突列をもつ。凸帯貼り付け前に、爪形文をほどこし、それにかぶさるように凸帯を貼り付けている。爪形文を地文としていた可能性もある。

第12図31・32、第13図36・37は、第I群B2類である。平縁をなす口縁をもち、内彎する口縁形態をなし、円形刺突列による文様を描く。凸帯をもたないのが、B1類との違いである。また、口縁部内面に縄文帯をもつ。31は円形刺突列のみを口縁にほどこしている。口縁直下に円形刺突列をもち、その下に弧線状の意匠を円形刺突列によって描く。文様構成は25と同じ系統だが、口縁部文様帯が分離しておらず、二段構成となる25と比較して、型式学的に新相を示す。32は、小破片のため詳細は不明だが、縄文地で口縁直下に一条の刺突列をほどこす。36と37は、ゆるやかなキャリパー状を呈する器形をなすもので、口縁端部の上面に刻みをもつ。文様は、



第12図 第I群B類 (1/2)

RLの撚りをもつ縄文を地文としてもち、二段構成の円形刺突列を配する。36の口径は29.8cm。

30・33・34は、第I群B3類である。半截竹管状工具による文様をほどこすことを特徴とする。30は条痕地で、逆C字状の刻みをもつ。33は縄文を地文とし、二列の並行する刻みを二段構成でほどこす。34は波状を呈する口縁で、外反する口縁形態をなす。C字状の連続爪形文を多段にほどこしている。

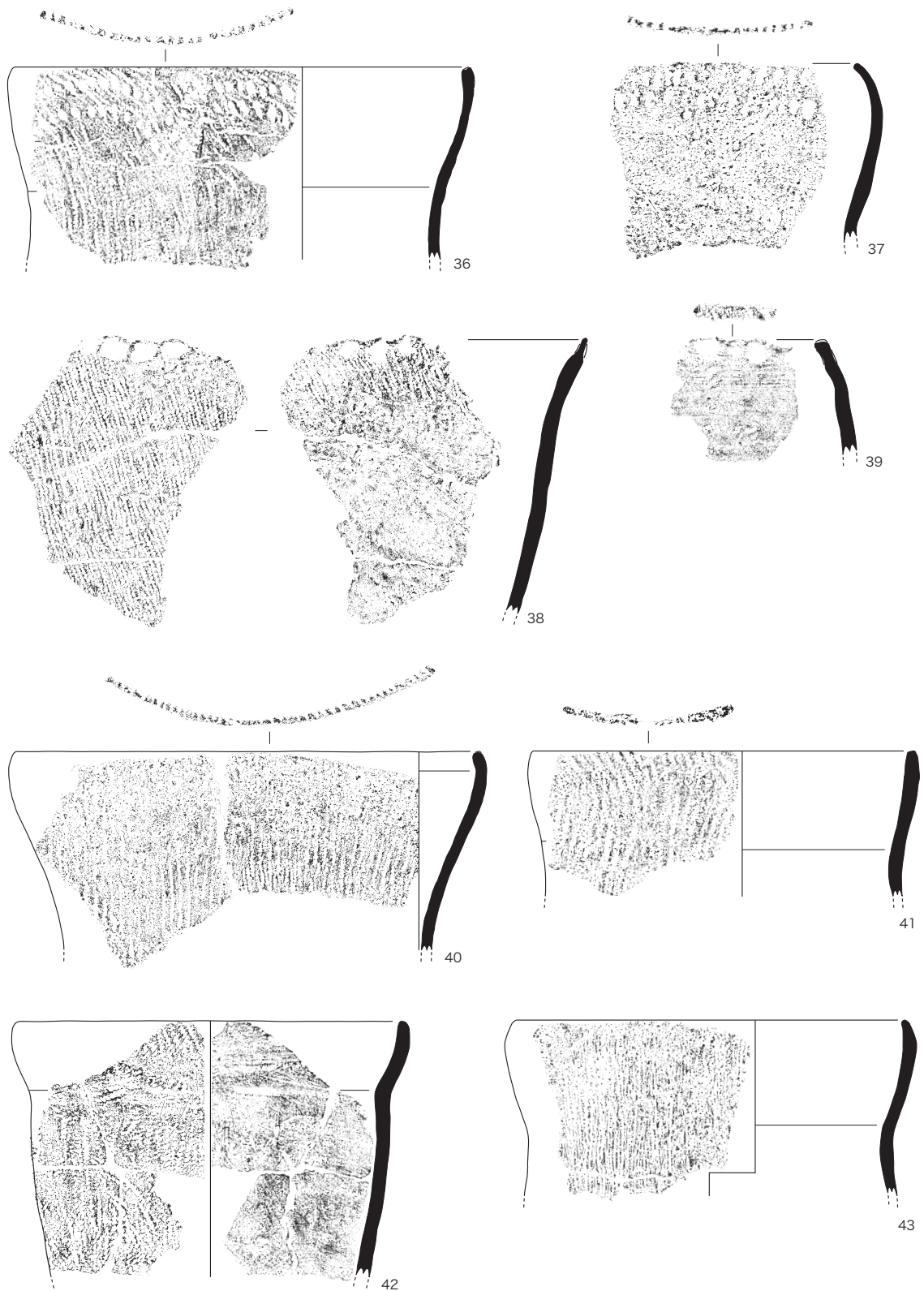
35は、第I群B4類である。外反する口縁形態をもち、棒状工具によって、口縁外面に幅広く、多段に刺突列をほどこす。

38と39は、第I群B5類である。口縁直下に指頭状の圧痕を横位の列状に巡らす。38は、胴部からゆるやかに外反しながら口縁にいたる器形をなす。39は、口縁部片のみで全体の器形は不明だが、内彎する口縁をもち、38とは明らかに器形が異なる。ゆるやかなキャリパー状を呈する器形をなすと考えられる。

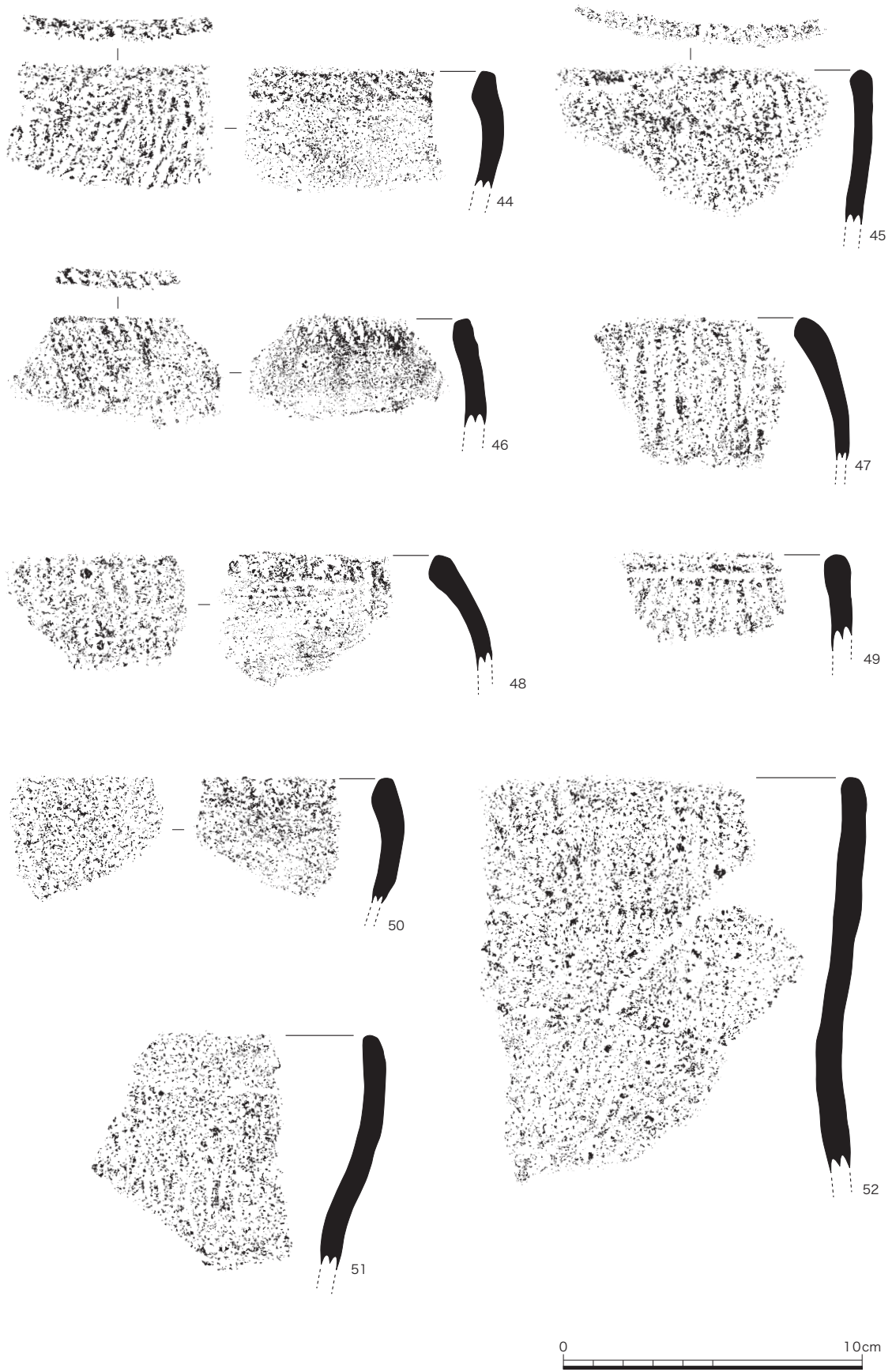
第13図40～第15図55は、第I群C類である。縄文のみをほどこす土器群を一括した。40・47・49・51・52は表面の磨滅が激しく不明瞭ではあるが、縄巻縄文による縦走縄文を全面にほどこす。52は、口縁直下に痕跡的な沈線が認められ、区画を意識したものの可能性がある。40はゆるやかなキャリパー状を呈する器形をなし、口縁端部が短く内屈する。口縁端部に刻みをもつ。口径30.6cm。41は、口胴部界からゆるやかに立ち上がる口縁部へいたる。口縁端部に刻みをもつ。器面には、RL縄文を口縁部に縦方向へころがし、胴部に横方向へころがして、全面縄文ながら、縄文の転がす方向を変えることで、口縁部の文様帯を意識させている。円形刺突列はもたないが、37と同様な構成をもつ。口径25.0cm。42も41同様にRLの縄文を口縁部にほどこし、胴部は不定方向の転がしによって、縄文をほどこす。ただ、口胴部界に屈曲をもった短い口縁部がつく器形となり、形態的には41と異なる。口径25.3cm。43は条痕を全面にほどこす。口径26.2cm。

44・46・48・50は、里木編年の船元I式F類と特徴を同じくする。44はLR、46・48・50はRLの撚りをもつ縄文を外表面と、口縁部内面にほどこす。爪形文はもたないが、文様構成は本章分類のA類に近い。53は、口縁部から胴部までのこる破片で、縄巻縄文による縦走縄文を全面にほどこし、口縁部内面にはRLの撚りをもつ縄文をほどこす。54は、胴部片で53と同じく縄巻縄文による縦走縄文をほどこし、その特徴から同一個体の可能性がある。55はLRの撚りをもつ縄文をほどこした胴部片である。

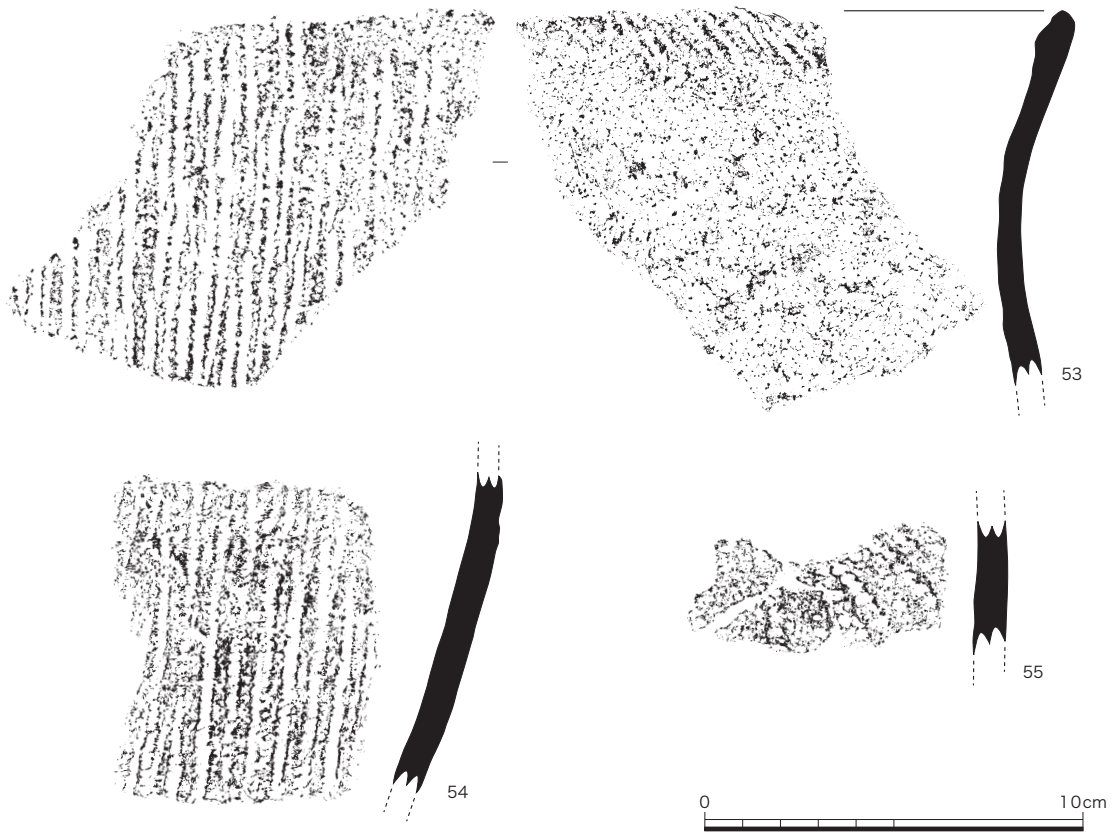
第16図56～第17図73は、第I群D類である。凸帯や微隆起帯によって文様を描出することを特徴とする。それらには刺突はともなわない。第16図56～64は、D類の口縁部片である。曲線状の文様を描く。56と57は比較的に高い凸帯で、上開きの弧状を呈するものを多段につけて、文様を構成する。57は弧状の凸帯を配するうえで、単位的に縦位の凸帯も貼り付けている。58～62は下開きの弧状の微隆起帯を多条につける。63は口縁直下に円形刺突列をもち、その下に弧状の微隆起帯によって、木の葉状の意匠を対向的に描く。対向部には、縦位の微隆起帯を配し、区分している。64は小破片のため不明瞭ではあるが、弧状の意匠が見受けられる。第17



第13図 第I群B類・C類(1)(1/4)



第14図 第I群C類(2)(1/2)



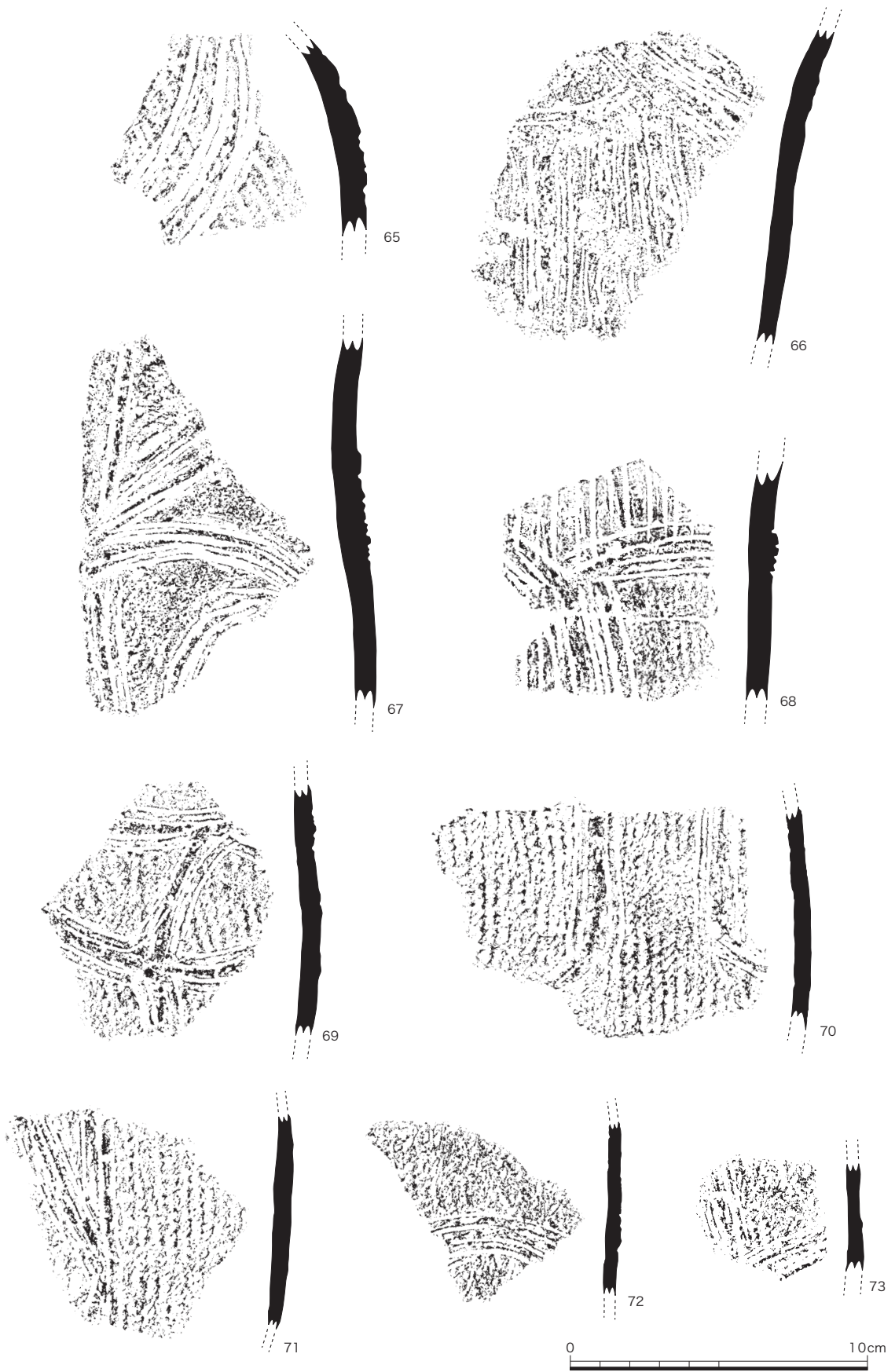
第15図 第I群C類(3)(1/2)

図65～73は、D類の胴部片である。縦位に配された微隆起帯に沿って、弧状の意匠を描いている。67～69は胴部から口縁部へ至る屈曲部で、文様が上下で転換していることがうかがえる。

第18図74～第20図95は、第I群E1類である。多条沈線によって連弧状に発達させた意匠を描くのを特徴とする。第18図74～第20図90は、E1類の口縁部片である。口縁端部に縄文をほどこすものが多い。連弧文の意匠には、77のように弧線部分を対向させるもの、79、80のように開いた部分を対向させるもの、88のように上開きの連弧を多段に構成するものがある。また80は対向連弧文の組み合う部分に平行沈線をひき、区分を意識させている。74は、多条沈線によって下開きの連呼文を描く。地文となる縄文は、円形に近い節の大きな縄文で、横方向にころがしている。75と76は、74と似通った文様構成をとるが、連弧文は上開きの形状となる。77は上段に上開きの連弧文、下段に下開きの連呼文の二段構成の連弧文をほどこしている。地文は縄巻縄文である。78は遺存状態がわるく不明瞭ではあるが、77と同じように、連弧文が二段構成でほどこされる。79は、ゆるやかに立ち上がる口縁形態をなす。文様は対向する連弧文をほどこす。地文は円形に近い節の大きな縄文がみられる。口径29.6cm。81は小片のため不明瞭だが、縦位の沈線をもち、文様帯の区分を意識させる。82は、80と同様な文様構成をとるが、開きぎみの器形をなし、口縁が立ち上がるのが特徴である。形態的にみると船元IV式の特



第16図 第I群D類(1)(1/2)



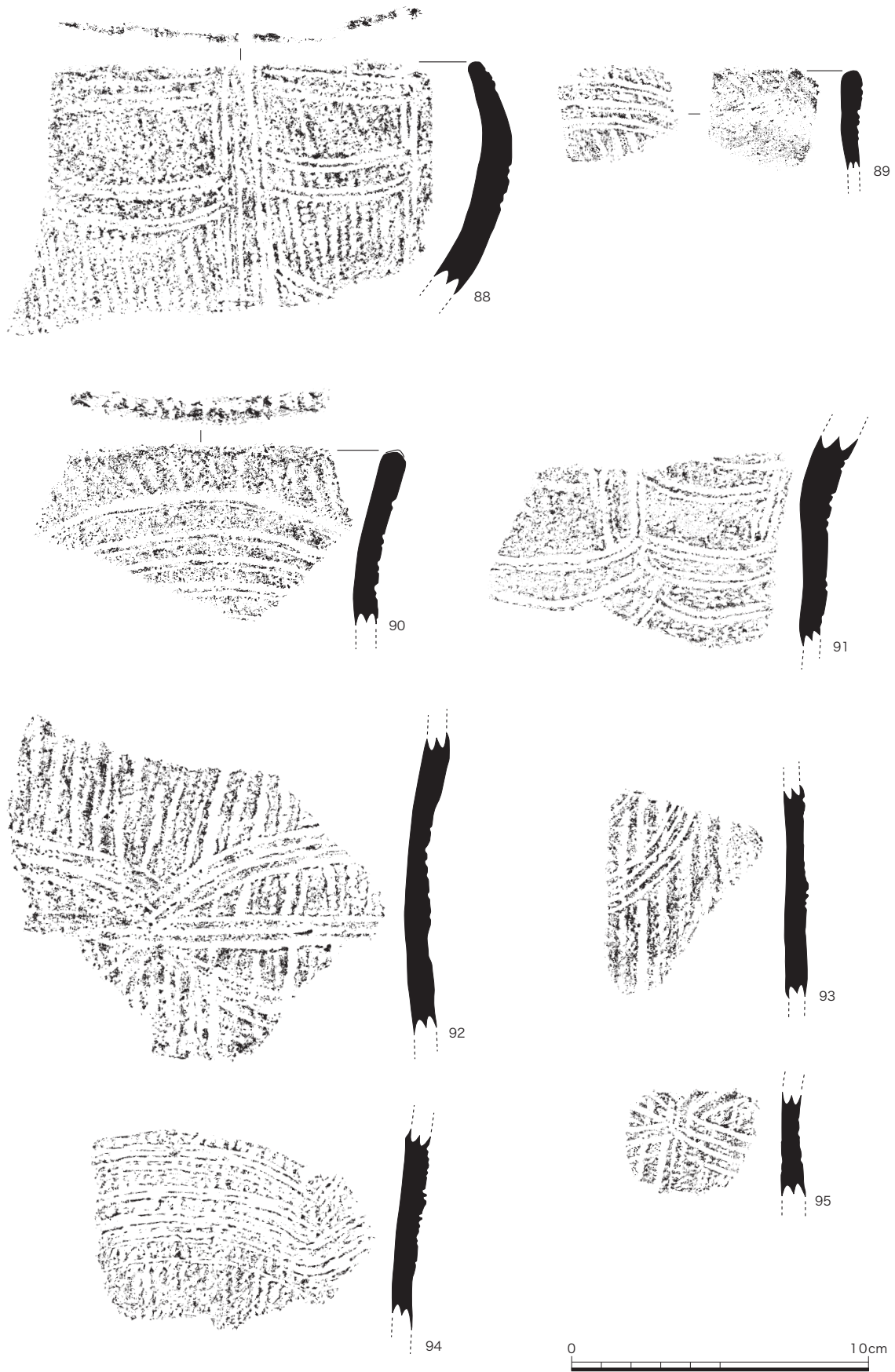
第17図 第I群D類(2)(1/2)



第18図 第I群E1類(1)(1/2)



第19図 第I群E1類(2)(1/2)



第20図 第I群E1類(3)(1/2)

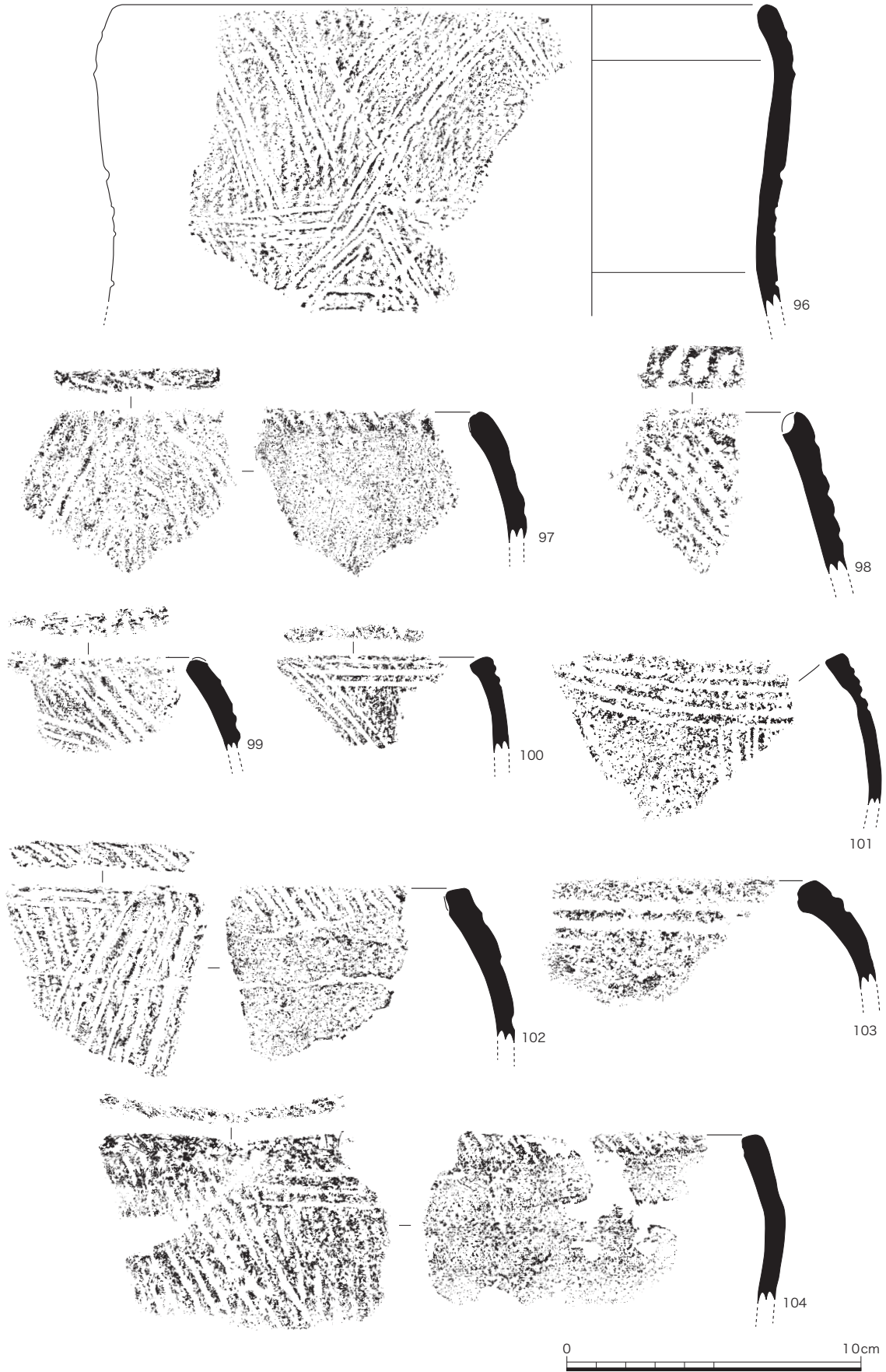
徴と一致する。地文が縄巻縄文であることも、船元式のなかでも時期的に新しいものであることを示している。83～85は、口縁部に多条の平行沈線をほどこすことを特徴とする。86は、ゆるやかなキャリパー状を呈する器形をなす口縁部から胴部の破片である。83～85とおなじように、口縁直下に多条の平行沈線を持ち、そのしたに下開きの連弧文を展開する。LRの撚りをもつ縄文を地文とする。口縁端部上面に刻みをもつ。口径30.6cm。87も同様な文様構成となるが、口縁内面に縄文をほどこす。88は、多条沈線による区画文を持ち、そのなかに上開きの弧状文を配する意匠をもつ。縄巻縄文を地文とする。89・90は立ち上がる、あるいは外反する口縁をもつ。口縁部には多条の弧状沈線をほどこす。89は口縁内面に縄文をほどこす。90は口縁端部上面に刻みをもつ。

第20図91～95は、E1類の胴部片である。口縁部と同様に、多条沈線による連弧文を配する。92は、対向連弧文を持ち、組み合う部分に、三条の平行沈線をひく。地文はLRの撚りをもつ縄文である。93は縄巻縄文を地文にもつ。胴部には、多条の弧状沈線で意匠を描く。94はRLの撚りをもつ縄文を横方向にころがして地文とする。文様は、下開きの連弧文を描く。95は小片で文様構成が不明瞭だが、対向連弧文の組み合う部分と考えられる。地文はLRの撚りをもつ縄文をほどこす。

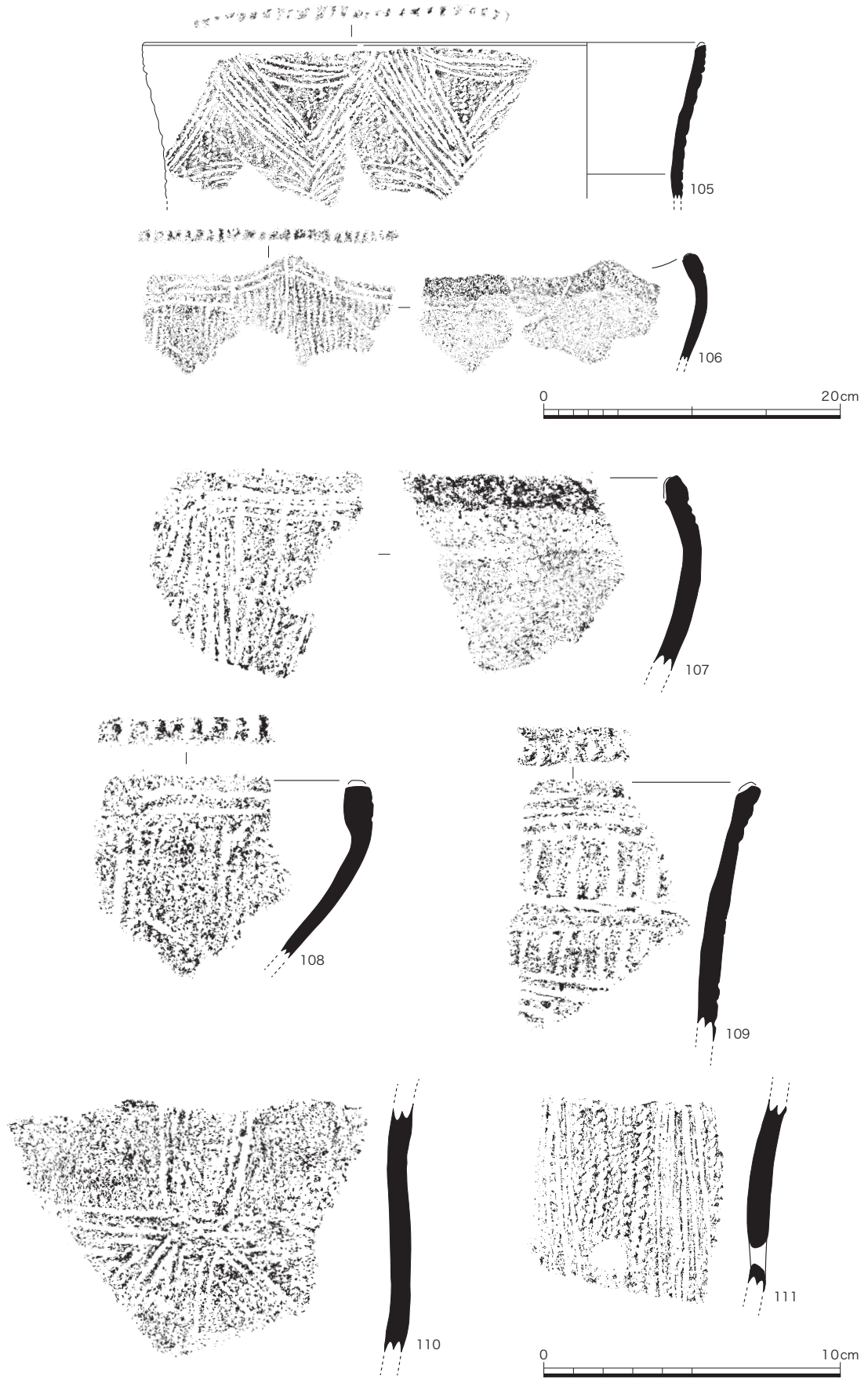
第21図96～第22図111は、第I群E2類である。三角形状を幾何学的に配する文様構成をもつことを特徴とする。第21図96～第22図109は、E2類の口縁部片である。96は口縁部～頸部の破片で、三角形状の単位文様を多段に構成している。口縁端部上面に刻みをもつ。口径22.3cm。97は口縁端部上面に刻みを持ち、口縁内面にRLの撚りをもつ縄文をほどこす。98、99は口縁端部上面に刻みをもつが、98は端部内側に、99は端部外側に偏って刻みをほどこしている。100は口縁端部上面に縄文をほどこす。102、104は口縁端部上面と口縁内面に刻みをもつ。101、103は口縁直下に平行する二条の沈線をもつ口縁部片で、口縁端部には、刻みなどの加飾をとまなわない。ほかと文様構成がやや異なる。また、101は波状を呈する口縁をもつ。105は口胴部界からゆるやかに立ち上がる器形をなす。口縁端部上面に深い刻みをもつ。文様は、口縁部に三角形状の意匠を幾何学的に配するが、胴部には下開きの連呼文をほどこしている。106は波状を呈する口縁をもつ。口縁に沿うように二条の沈線をほどこす。また波頂部から二条の垂下する沈線をひく。口縁内面に縄文をほどこす。107～109は三角形状の意匠はもたないが、区画沈線を持ち、文様構成が類似するため本類に入れた。107は口縁内面に縄文を持ち、108、109は口縁端部上面に刻みをもつ。

第22図110と111はE2類の胴部片である。110は三条の平行沈線を基軸に上下に弧線状の文様を描く。111は縄文と条痕が全面にほどこされている。不明瞭だが、縄巻縄文とみうけられる。また下半に焼成後の穿孔がみられ、補修孔と考えられる。

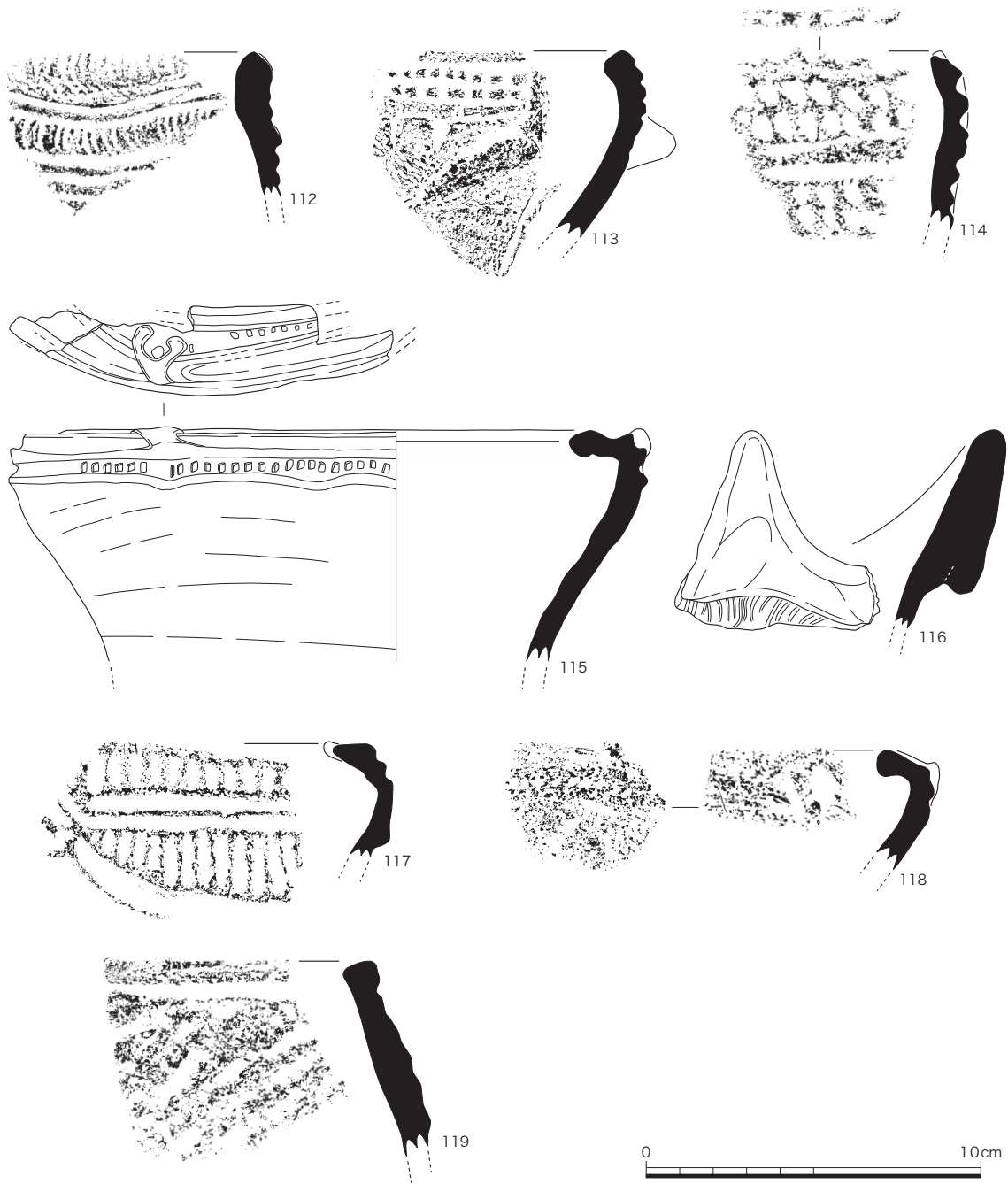
第23図112～119は、第I群F類である。ほかの地域に、分布の中心がある文様をもつ、いわゆる異系統土器をまとめた。112は、東海地方を中心に分布する、中期前葉の北裏C式である。口縁端部と隆帯上に爪形文をほどこし、爪形文のあいだに、沈線によって文様を描く。113



第21図 第I群E2類(1)(1/2)



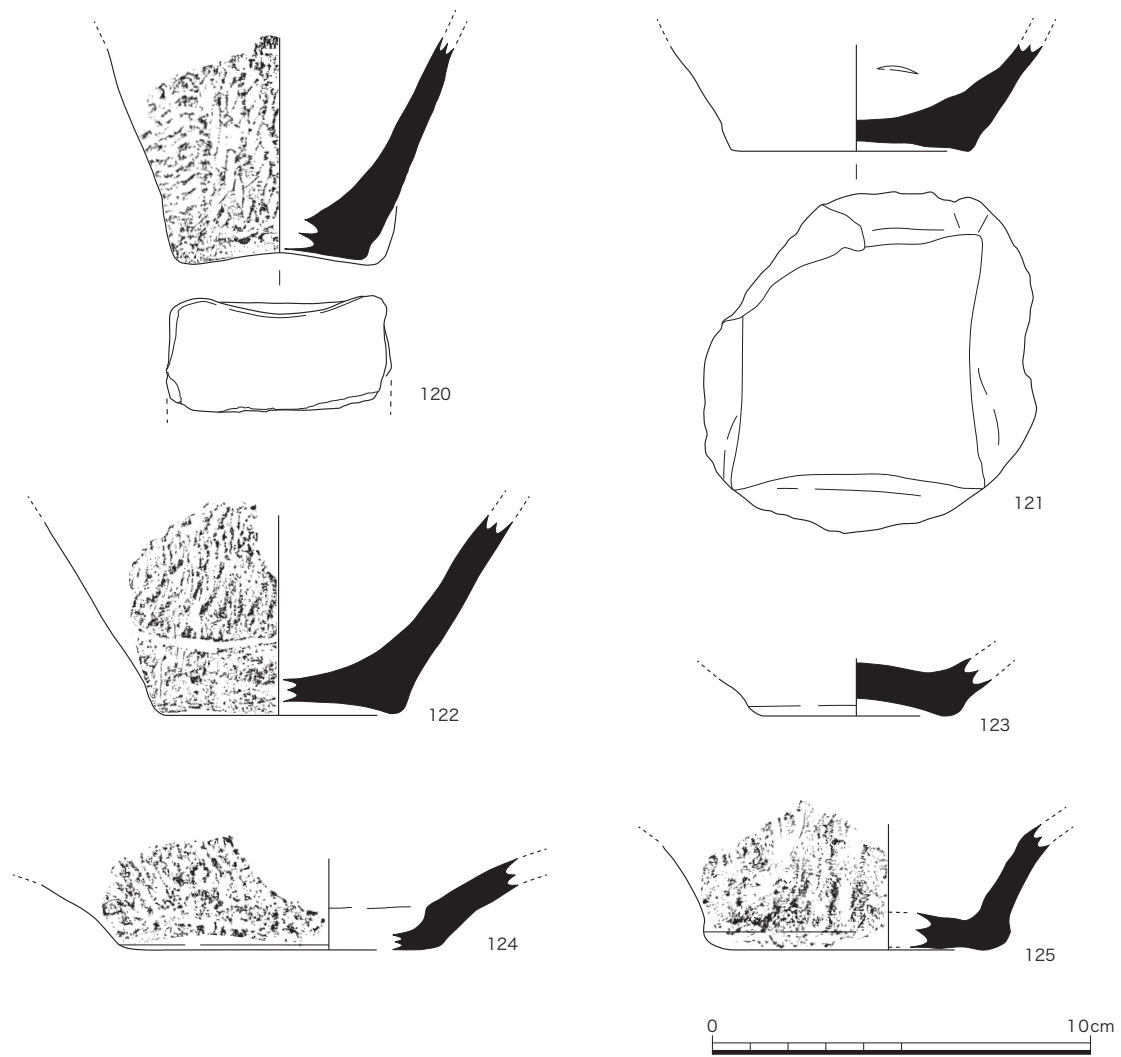
第22図 第I群E2類(2) (1/4・1/2)



第23図 第I群F類 (1/2)

は北陸地方を中心に分布する中期初頭の新保・新崎式である。半截竹管状工具の押し引きによって施文される、いわゆるキャタピラ状文様と、口縁部外面に付けられる高さをもつ突起が特徴的である。キャタピラ状文様の下には、三角形状の抉りが配される。

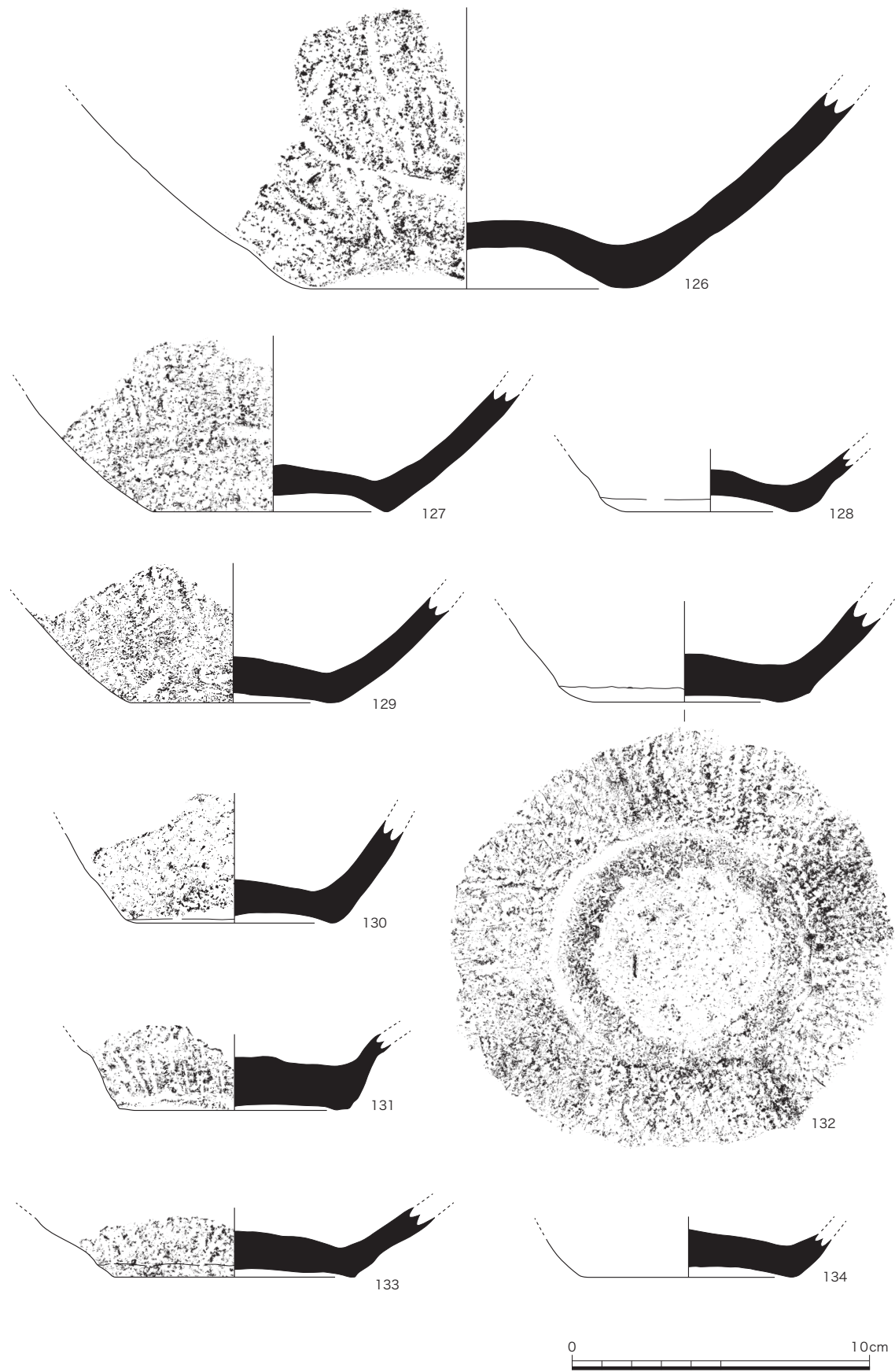
114は東海地方を中心に分布する中期後半の咲畑式の系統をひくものである。下方向から棒状工具によって施文された刺突列を配し、平行沈線と組み合わせる文様を構成する。115～118



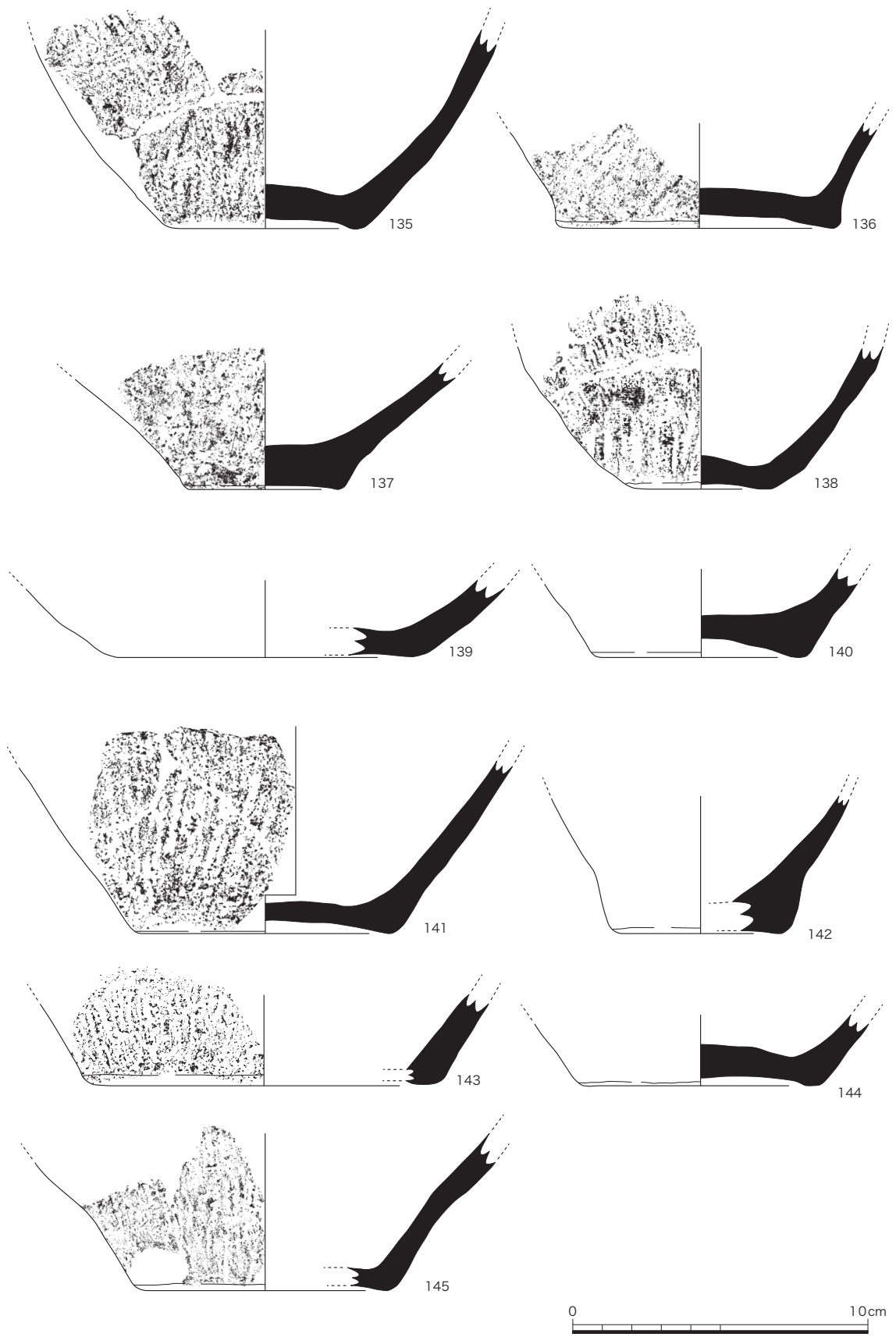
第24図 中期前葉土器底部(1) (1/2)

は東海地方を中心に分布する、中期前半の北屋敷式である。115は内折する口縁部をもち、口端部には粘土を貼り付けた文様をもつ。口縁部下半には、D字状の刺突列を配する。116は突起部である。高い三角形状をなす形態をし、下端には爪形文をほどこす。117・118も115と同じく、内折する口縁をもち、口縁外面に刺突列をもつが、刺突の形状が異なり、117は棒状工具による長方形の刺突列を二段に配する。上下段は二条の沈線によって区分される。118は円形刺突列を配する。また文様構成に沈線はともなわない。119は、中央高地を中心に分布する中期末の取組式の系統をひくものである。口縁部に一条の沈線をひき、節の大きいLRの撚りをもつ縄文をほどこす。こうした土器群から、東日本と一定の交渉をもっていたことが推察される。

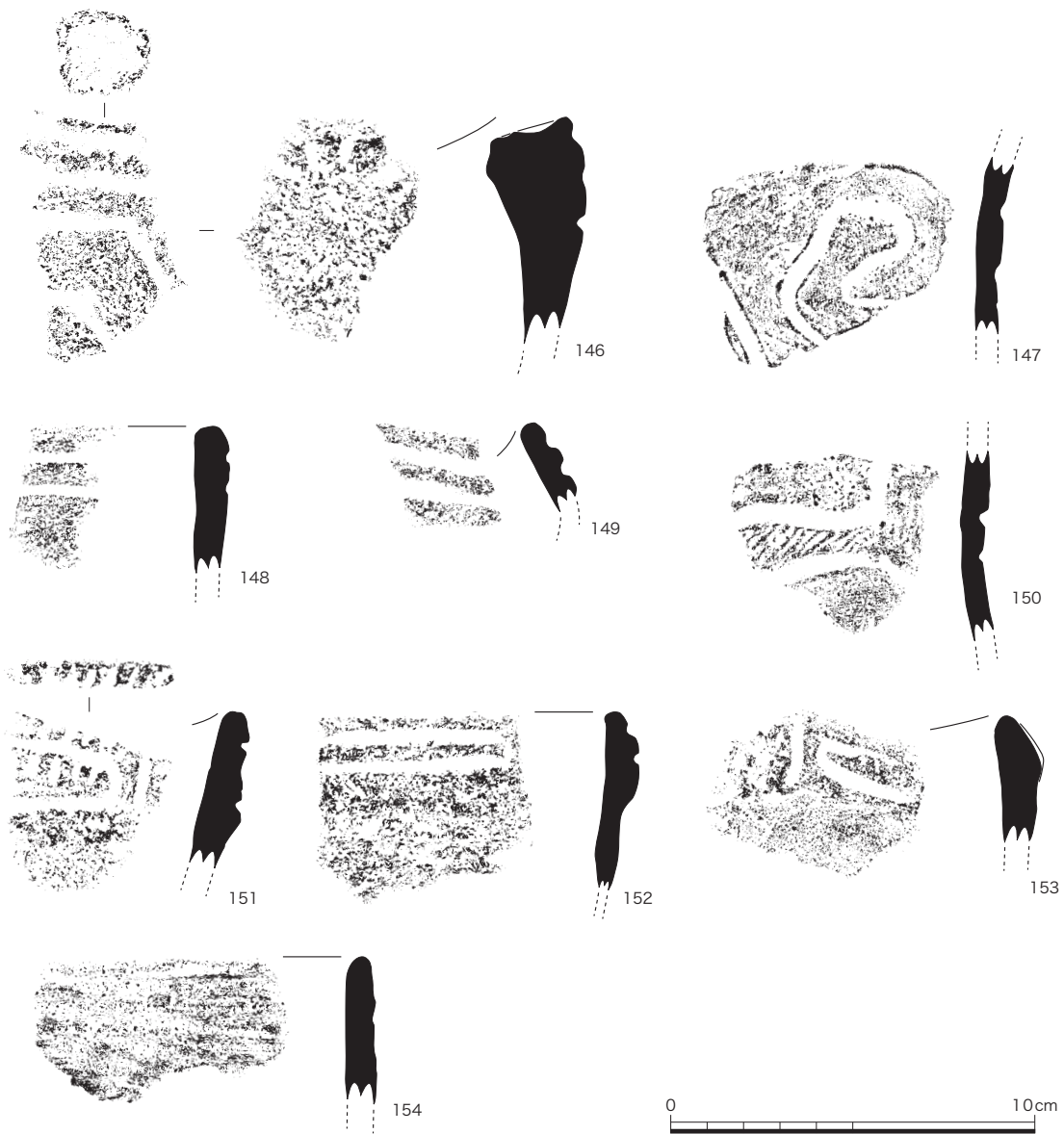
第24図～第26図は、中期前半の底部である。第24図120・121は、深鉢形土器で底面が多角形の形状をなし、中央部に凹みをもつのが特徴的な多角形底である。120は四角形あるいは五角形、121は四角形となる。鷹島式に比定される。



第25図 中期前葉土器底部（2）（1/2）



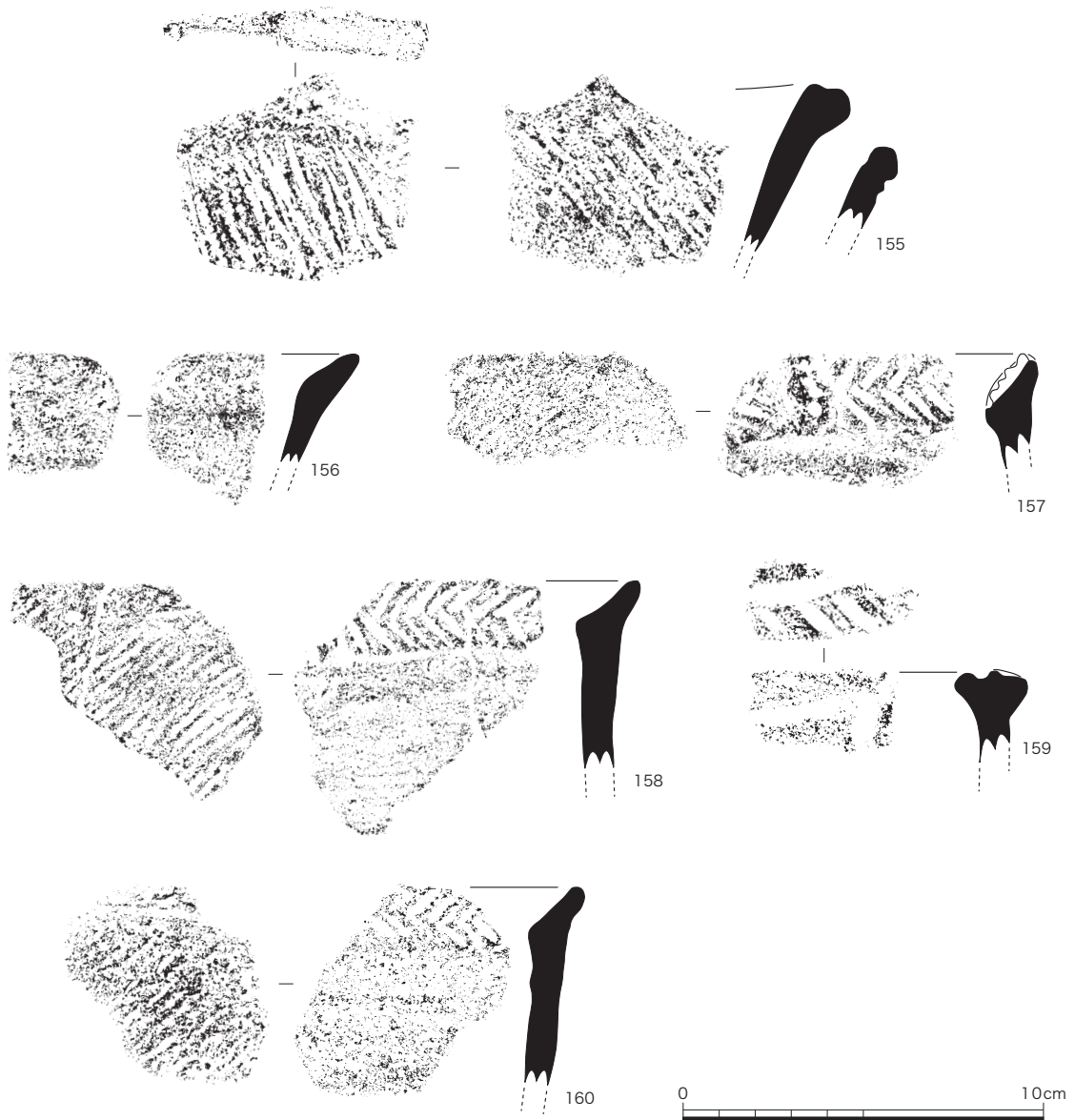
第 26 图 中期前葉土器底部 (3) (1/2)



第27図 第Ⅱ群 後期初頭～前葉土器 (1/2)

第24図122～125は、外面にほどこされる縄文が、繊維痕の目立つ縦長の節もつという特徴から、船元Ⅰ式からⅡ式に比定される。122・123・125は深鉢形土器で、122と123は底面の中央部に凹みをもつ、凹底である。125は底面の外縁部のみ一段高くなることを特徴とする、高台底である。126は立ち上がりからみて、浅鉢形土器の可能性が高い。扁平な底面をもつ平底である。

第25図126～第26図145は、外面にほどこされる縄文が、円形に近く節が大きいという特徴から、船元Ⅲ式に比定される。126～130・133～135・140～142・145は凹底を呈する底部である。とくに、126は底面中央部につよい凹みをもつ。131・132・144は高台底を呈する底部である。いずれも底面中央部にゆるやかな凹みをもつ。132は底面中央部に縄状のものを押

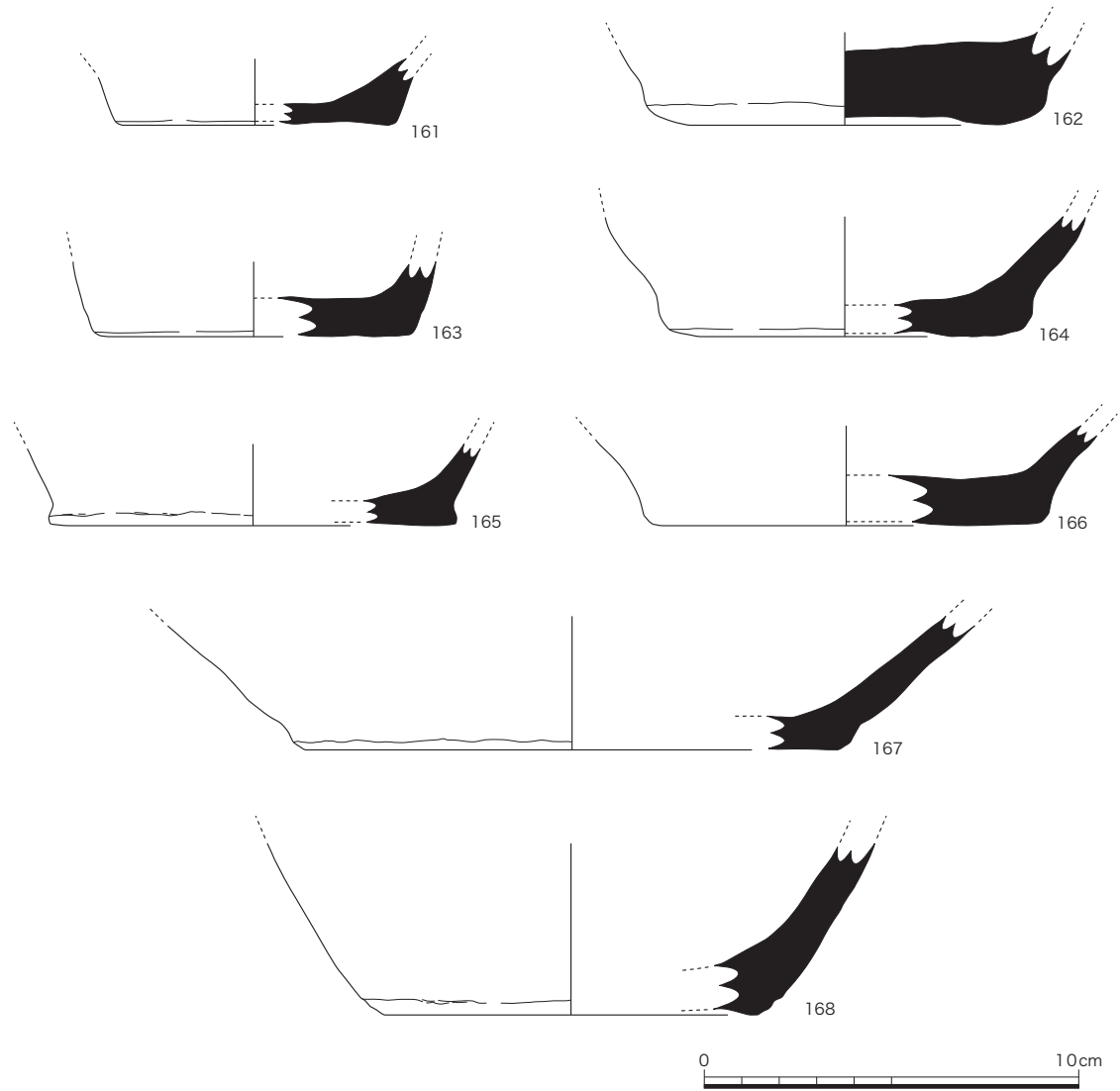


第28図 第Ⅱ群 後期前葉土器 (1/2)

し付けた圧痕がみられ、土器製作時の底部設置方法の手がかりとして、注意をひく。136～139・143は平底を呈する底部である。136は底面からやや外反ぎみに立ち上がるので、時期が中期末までくだる可能性がある。

このように、友岡遺跡から出土した縄文土器について、概観してきた。分類に即した記述の結果、Ⅰ群の土器は、とくにD類とE類を中心としていることが判明した。これらは船元Ⅱ式からⅢ式にかけての資料であり、中期前葉から中葉への移行を示している。これらを型式学的に検討していくことは、中期土器の変遷を考えていくうえで、重要な課題となろう。その検討は、考察に譲ることとして、ここでは課題の抽出をもって結としたい。

(妹尾 裕介)



第29図 後期土器底部 (1/2)

第27図146～第29図168は第Ⅱ群（後期初頭から前葉）の土器である。146～150は、平行沈線帯を意匠とする文様を描くもので、中津式に比定できる。146は大ぶりの波状口縁となる深鉢形土器の口縁部片である。縄文は確認できず、沈線のみで施文する。波頂部は、ややくぼみを持ち、そのくぼみの内側に円形刺突が連珠状に、ほどこされている。口縁端部の肥厚や波頂部への施文などの特徴から、中津式でも新しく位置づけられる。147・150は深鉢形土器の胴部片である。147は胴部のくびれ付近で、小ぶりの渦巻き文が描かれている。縄文は確認できず、沈線のみで施文する。150に描かれる文様は、曲線的な意匠になるとみられるが、残存部のみからは復元が難しい。沈線のあいだにLRの捺りをもつ縄文がほどこされている。148・149は深鉢形土器で、平縁を呈する口縁部片である。いずれも2本の平行沈線を、口縁にそって、ほどこしている。149は、口縁部が短く屈曲する口縁形態をもつことから、縁帯文期に時期がくだる可能性がある。

151～158・160は口縁部と頸部の文様帯が独立した構成をとるもので、芥川式～北白川上層

式に比定できる。151～153は深鉢形土器の口縁部片で、口縁部の外面を弱く肥厚させて、口縁部文様帯を作出している。151は波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部片で、波底部付近とみられる。口縁部文様帯には、杵状をなす区画文と縦位の単沈線が配され、区画文の上部と内側には斜位の短沈線をほどこす。また、口縁端部には刻みをつける。152は深鉢形土器で、平縁を呈する口縁部片である。口縁部の文様帯には、細長い杵状をなす区画文が配されている。153は波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部片で、波頂部付近の破片とみられる。口縁部文様は、波頂部に重弧線文を配し、その両側に杵状の区画文を配する構成をとるものとみられる。155は波状口縁となる深鉢形土器の波頂部付近である。口縁端部の上面は無文であるが、波頂部には耳たぶ形の片流れ突起が配される。頸部外面は、RL縄文を全面にほどこしたのちに、ヘラ状工具による斜位の細沈線が描かれている。内面の口縁部下3cmほどの範囲にもRLの撚りをもつ縄文がほどこされている。

156～158・160は深鉢形土器の口縁部片で、同一個体とみられる。口縁部の内面を弱く肥厚させて、口縁端部上面に文様帯を作出し、矢羽根状の沈線文をほどこす。また157・158は、文様帯に円形刺突をもった縦位の隆帯を貼り付けており、これが単位的に配されていたものとみられる。胴部外面にはLRの撚りをもつ縄文を全面にほどこす。

154は無文の深鉢形土器の口縁部片である。口縁端部は丸くおさめ、器面は巻き貝条痕ののちナデ調整をほどこしている。後期前葉に位置づけられる。159は深鉢形土器で、平縁を呈する口縁部片である。口縁端部を三角形に肥厚させ、その上面を文様帯とし、1本の周回する沈線の外側に、斜行する沈線を連続的にほどこす。頸部にも文様が確認できるものの、小片かつ摩耗が激しいため、文様構成は不明である。四ッ池式に比定できる。

161～168は後期前半の底部片である。167は立ち上がりの角度が広く、浅鉢形土器になると考えられる。その他は深鉢形土器の底部とみられるが、確定的でない。底部の形態には、いくつかのバリエーションがある。底面形態は、162のように底面の外縁部のみ一段高くなる高台底か、その他のもののように底面が平らな平底の二者がある。底部から胴部への立ち上がりの断面形では、163・168のように接地部から屈曲点をもたずに内彎しながら立ち上がるもの、165のように接地部がやや張り出して断面「く」字状に立ち上がるもの、161・162・164・166・167のように接地面から直線的に立ち上がったのちに外反して胴部に至るもの、といった3者がみられる。

(小泉 翔太)

付表-2 土器観察表

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残存度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端部加飾	内面施文	器高 (長)	口径 (幅)	底径 (厚)						
1	SX02 3区	口縁 波頂部	—	縄文	(13.1)	26.2	—	1/4	外：灰黄褐 (10YR5/2) 内：にぶい黄褐 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A1類	鷹島式
2	—	口縁 波頂部	—	縄文	(9.1)	—	—	破片	外：にぶい橙 (5YR7/4) 内：赤 (10R4/8)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A1類	鷹島式
3	SX02 3区 a	口縁 酒杯状 突起部	—	不明	(5.5)	—	—	破片	外：にぶい橙 (5YR7/4) 内：赤 (10R4/8)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A1類	鷹島式
4	SX02 2区 a	口縁酒 杯状突 起部	—	縄文	(4.2)	—	—	破片	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A1類	鷹島式
5	SX02 3区 b	口縁部	刻み	縄文	(6.8)	—	—	破片	橙 (2.5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
6	SX02 4区 b 下層	口縁部	刻み	縄文	(5.5)	—	—	破片	外：橙 (5YR7/6) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良	長石・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
7	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	口縁部	刻み	縄文	(5.4)	—	—	破片	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
8	SX02 4区 b	口縁部	刻み	縄文	(4.4)	—	—	破片	黄橙 (10YR8/6)	良	長石・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
9	SX02 2区	口縁部	刻み	縄文	(4.0)	—	—	破片	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良	長石・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
10	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	口縁部	刻み	縄文	(5.1)	—	—	破片	黄橙 (10YR8/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
11	SX02 3・4セクション 茶褐色粘質土	口縁部	刻み	縄文	(2.46)	—	—	破片	橙 (2.5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
12	SX02 4区 c	口縁部	刻み	なし	(6.5)	—	—	破片	明赤褐 (2.5YR5/8)	良	長石・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
13	SX02 4区 b	口縁部	なし	縄文	(6.5)	—	—	破片	外：橙 (7.5YR6/6) 内：灰褐 (7.5YR4/2)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
14	SX02 4区 茶褐色礫混土	口縁部	なし	縄文	(3.5)	—	—	破片	明赤褐 (2.5YR5/6)	良	長石・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
15	SX02 2区 a	口縁部	なし	縄文	(3.5)	—	—	破片	橙 (5YR6/6)	良	長石・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
16	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	刻み	縄文	(2.30)	—	—	破片	明黄褐 (10YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
17	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	口縁部	刻み	なし	(2.39)	—	—	破片	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
18	SX02 3区 f	口頸部	—	不明	(6.5)	—	—	破片	外：明黄褐 (10YR7/6) 内：橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残存度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端部加飾	内面施文	器高 (長)	口径 (幅)	底径 (厚)						
19	SX02 4区 b 下層	頸胴部	-	-	(5.2)	-	-	破片	外：橙 (5YR7/6) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
20	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	頸部	-	-	(5.2)	-	-	破片	灰褐 (7.5YR4/2)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
21	SX02 4区 b	頸胴部	-	-	(6.2)	-	-	破片	外：黒褐 (10YR3/1) 内：灰黄褐 (10YR5/2)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
22	SX02 茶褐色礫混粘質土	胴部	-	-	(7.6)	-	-	破片	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
23	SX02 3区 a	口縁部 付近	-	-	(5.5)	-	-	破片	外：橙 (5YR6/6) 内：明赤褐 (5YR5/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
24	SX02 4区 b	胴部	-	-	(6.9)	-	-	破片	外：黒褐 (10YR3/1) 内：灰黄褐 (10YR5/2)	良	長石・石英・ チャート	第1群 A2類	船元I式 1期
25	SX02 4区 l	口縁部	刻 み	縄 文	(2.11)	-	-	破片	黒褐 (5YR2/1)	良	長石・石英・ チャート	第1群 B1類	船元I式 2期
26	SX02 4区	口縁部	なし	縄 文	(3.7)	-	-	破片	外：橙 (5YR7/6) 内：橙 (2.5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 B1類	船元I式 3期
27	SX02 4区 k	口縁部	なし	縄 文	(2.33)	-	-	破片	にぶい赤褐 (5YR4/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 B1類	船元I式 3期
28	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	刻 み	1 字 刻 み	(2.22)	-	-	破片	外：橙 (5YR6/6) 内：橙 (7.5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 B類 並行	-
29	SX02 4区 c	口縁部	刻 み	縄 文	(3.3)	-	-	破片	明赤褐 (5YR5/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 B1類	船元I式 2期
30	SX02 2区 a	口縁部	なし	縄 文	(3.2)	-	-	破片	橙 (7.5YR6/6)	良	長石・ チャート・ 金雲母	第1群 B3類	船元II式 1期
31	SX02 4区 f	口縁部	刻 み	結 節 縄 文	(2.45)	-	-	破片	灰黄褐 (10YR5/2)	良	長石・石英	第1群 B2類	船元II式 1期
32	SX02 4区 j	口縁部	なし	縄 文	(2.5)	-	-	破片	外：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内：褐灰 (10YR4/1)	良	長石・石英	第1群 B2類	船元II式 1期
33	SX02 4区 写2	口縁部	刻 み	なし	(4.7)	-	-	破片	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 B3類	船元II式 1期
34	SX02 茶褐色礫混粘質土	口縁部	なし	なし	(4.2)	-	-	破片	浅黄橙 (10YR8/3)	良	長石・ チャート	第1群 B3類	船元II式 1期
35	SX02 4区 6 写3	口縁部	刻 み	なし	(10.1)	-	-	破片	外：暗オリーブ褐 (2.5Y3/3) 内：橙 (7.5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート 密	第1群 B4類	船元II式 1期
36	SX02 4区 h	口縁部	刻 み	なし	(2.40)	(29.8)	-	破片	外：橙 (7.5YR7/6) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 B2類	船元II式 1期

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残存度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端部加飾	内面施文	器高 (長)	口径 (幅)	底径 (厚)						
37	SX02 4区 k	口縁部	刻み	なし	(2.14)	—	—	破片	にぶい黄橙(10YR7/4)	良	長石・石英・チャート	第I群 B2類	船元II式 1期
38	SX02 4区 写7	口縁部	なし	縄文	(18.2)	—	—	破片	外:明赤褐(2.5YR5/6) 内:橙(2.5YR6/8)	良	長石・石英・チャート	第I群 B5類	船元II式 1期
39	SX02 4区 f	口縁部	縄文	なし	(2.44)	—	—	破片	橙(5YR6/6)	良	長石・石英・チャート	第I群 B5類	船元II式 1期
40	—	口縁部	刻み	なし	(12.9)	30.6	—	1/6	外:橙(5YR6/6) 内:にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—
41	SX02 4区 b	口縁部	刻み	なし	(9.5)	25.0	—	1/10	にぶい橙(7.5YR6/4)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—
42	—	口縁部	なし	なし	(16.7)	25.3	—	1/6	外:灰黄(2.5Y6/2) 内:黄灰(2.5Y5/1)	良	長石・チャート	第I群 C類	—
43	SX02 3区	口縁部	なし	なし	(11.3)	26.2	—	1/6	外:にぶい黄橙 (10YR7/3) 内:にぶい黄橙 (10YR7/2)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—
44	SX02 4区 e	口縁部	縄文	縄文	(3.2)	—	—	破片	橙(5YR6/6)	良	長石・チャート	第I群 C類	—
45	SX02 4区 b	口縁部	縄文	なし	(5.5)	—	—	破片	明黄褐(10YR7/6)	良	長石・チャート	第I群 C類	—
46	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	口縁部	縄文	縄文	(3.9)	—	—	破片	外:浅黄(2.5Y7/4) 内:橙(5YR6/6)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—
47	SX02 4区 k	口縁部	なし	なし	(2.28)	—	—	破片	橙(7.5YR6/6)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—
48	SX02 4区 l	口縁部	なし	縄文	(4.5)	—	—	破片	黄橙(10YR8/6)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—
49	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	なし	なし	(3.2)	—	—	破片	外:褐灰(7.5YR4/1) 内:にぶい橙 (7.5YR7/4)	良	長石・石英	第I群 C類	—
50	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	なし	縄文	(2.17)	—	—	破片	橙(7.5YR6/6)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—
51	SX02 4区 e	口縁部	なし	なし	(8.0)	—	—	破片	外:橙(5YR7/6) 内:橙(2.5YR6/6)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—
52	SX02 3・4セクション 茶褐色礫混粘質土	口縁部	なし	なし	(14.0)	—	—	破片	明黄褐(10YR6/6)	良	長石・石英・チャート 密	第I群 C類	—
53	SX02 4区 茶褐色礫混土	口縁部	なし	縄文	(10.1)	—	—	破片	明黄褐(10YR7/6)	良	長石・チャート	第I群 C類	—
54	SX02 3区 茶褐色礫混土	胴部	—	—	(8.7)	—	—	破片	外:明黄褐(2.5YR5/6) 内:橙(2.5YR6/8)	良	長石・石英・金雲母	第I群 C類	—
55	SX02 3・4セクション 茶褐色粘質土	胴部	—	—	(2.38)	—	—	破片	外:にぶい褐 (7.5YR5/4) 内:にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・チャート	第I群 C類	—

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残 存 度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端 部 加 飾	内 面 施 文	器 高 (長)	口 径 (幅)	底 径 (厚)						
56	SX02 4区 h	口縁部	なし	縄文	(2.48)	[13.8]	—	1/6	灰褐 (7.5YR4/2)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
57	—	口縁部	なし	なし	(11.9)	—	—	破片	暗灰黄 (2.5Y5/2)	良	長石・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
58	SX02 3区 a	口縁部	なし	なし	(4.7)	—	—	破片	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
59	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	なし	なし	(6.2)	—	—	破片	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
60	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	なし	なし	(4.5)	—	—	破片	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
61	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	なし	なし	(4.2)	—	—	破片	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
62	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	なし	なし	(5.6)	—	—	破片	外：黄橙 (10YR8/6) 内：にぶい黄橙 (10YR5/3)	良	長石・石英・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
63	SX02 4区 I	口縁部	刻 み	なし	(4.5)	—	—	破片	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	チャート・ 長石・石英	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
64	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	なし	縄文	(2.29)	—	—	破片	外：浅黄褐 (10YR8/4) 内：灰黄褐 (10YR6/2)	良	長石・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
65	SX02 4区 I	胴部	—	—	(2.9)	—	—	破片	外：明赤褐 (5YR5/6) 内：橙 (5YR6/6)	良	長石・ 金雲母・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
66	SX02 4区 茶褐色礫混土	胴部	—	—	(11.8)	—	—	破片	橙 (2.5YR6/6)	良	長石・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
67	SX02 4区 写7	胴部	—	—	(12.4)	—	—	破片	外：明黄褐 (10YR7/6) 内：明黄褐 (10YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
68	SX02 4区 茶褐色礫混土	胴部	—	—	(8.4)	—	—	破片	黄橙 (10YR8/6)	良	長石・石英・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
69	SX02 4区 f 写 10	胴部	—	—	(8.4)	—	—	破片	灰黄褐 (10YR6/2)	良	長石・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
70	SX02 4区 f 写 10	胴部	—	—	(7.4)	—	—	破片	灰黄褐 (10YR6/2)	良	長石・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
71	SX02 4区 f 写 10	胴部	—	—	(7.2)	—	—	破片	灰黄褐 (10YR6/2)	良	長石・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
72	SX02 4区 f 写 10	胴部	—	—	(5.8)	—	—	破片	灰黄褐 (10YR6/2)	良	長石・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
73	SX02 4区 f 写 10	胴部	—	—	(3.6)	—	—	破片	灰黄褐 (10YR6/2)	良	長石・ チャート	第 I 群 D 類	船元 II 式 2 期
74	SX02 3・4セクション 茶褐色礫混土	口縁部	刻 み	なし	(2.47)	—	—	破片	明黄褐 (10YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第 I 群 E1 類	船元 III 式

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残 存 度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端 部 加 飾	内 面 施 文	器 高 (長)	口 径 (幅)	底 径 (厚)						
75	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	刻 み	な し	(5.4)	—	—	破 片	外：にぶい黄褐 (10YR5/3) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート 密	第I群 E1類	船元Ⅲ式
76	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	刻 み	な し	(6.8)	—	—	破 片	外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
77	SX02 2・3セクション 茶褐色粘質土	口縁部	な し	な し	(7.0)	—	—	破 片	外：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内：灰白(10YR8/2)	良	長石・石英	第I群 E1類	船元Ⅲ式
78	黄灰色礫混粘質土 3区	口縁部	な し	な し	(7.5)	—	—	破 片	浅黄(2.5YR7/4)	良	長石・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
79	—	口縁部	縄 文	な し	(6.35)	29.6	—	1/4	にぶい橙(2.5YR6/4)	良	長石・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
80	SX02 3・4セクション 茶褐色粘質土	口縁部	縄 文	な し	(2.37)	—	—	破 片	外：褐灰(7.5YR4/1) 内：明褐灰(7.5YR7/2)	良	長石・石英・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
81	SX02 4区 茶褐色礫混土	口縁部	刻 み	な し	(3.3)	—	—	破 片	黄橙(10YR8/6)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第I群 E1類	船元Ⅲ式
82	SX02 3区	口縁部	な し	な し	(16.2)	—	—	破 片	外：明赤褐(2.5YR5/6) 内：橙(2.5YR6/8)	良	長石・石英・ チャート やや密	第I群 E1類	船元Ⅲ式
83	SX02 4区 1	口縁部	な し	縄 文	(2.10)	—	—	破 片	にぶい黄橙(10YR7/4)	良	長石・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
84	SX02 4区 k	口縁部	縄 文	な し	(2.27)	—	—	破 片	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
85	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	な し	な し	(3.6)	—	—	破 片	オリーブ褐(2.5Y4/3)	良	長石・ チャート 密	第I群 E1類	船元Ⅲ式
86	—	口縁部	刻 み	な し	(15.4)	30.6	—	1/4	浅き(2.5Y7/3)	良	長石・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
87	SX02 4区 写2	口縁部	刻 み	縄 文	(2.8)	—	—	破 片	外：明黄褐(10YR6/6) 内：にぶい黄褐 (10YR5/4)	良	長石・石英・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
88	SX02	口縁部	縄 文	な し	(8.0)	—	—	破 片	明黄褐(10YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
89	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	な し	縄 文	(3.3)	—	—	破 片	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
90	SX02 4区 f	口縁部	刻 み	な し	(2.43)	—	—	破 片	明黄褐(10YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式
91	SX02 2区	胴部	—	—	—	—	—	破 片	10YR6/3	良	石英・ チャート	第I群 E1類	船元Ⅲ式

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残存度	色 調	焼成	胎 土	分類	泉編年
			端部加飾	内面施文	器高 (長)	口径 (幅)	底径 (厚)						
92	SX02 3区	胴部	—	—	(12.6)	—	—	破片	外：橙 (5YR6/6) 内：橙 (2.5YR6/8)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E1類	船元Ⅲ式
93	SX02 3区 茶褐色礫混土	胴部	—	—	(7.3)	—	—	破片	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第1群 E1類	船元Ⅲ式
94	SX02 4区 b 写3	胴部	—	—	(7.1)	—	—	破片	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート・ 赤色粒	第1群 E1類	船元Ⅲ式
95	SX02 3区 茶褐色礫混土	胴部	—	—	(4.0)	—	—	破片	橙 (2.5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
96	SX02 4区 6 写3	口縁部	刻み	なし	(10.2)	22.3	—	1/6	外：にぶい黄褐 (10YR4/3) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第1群 E2類	船元Ⅲ式
97	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	刻み	縄文	(2.26)	—	—	破片	明黄褐 (10YR7/6)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第1群 E2類	船元Ⅲ式
98	SX02 4区 1	口縁部	刻み	なし	(5.8)	—	—	破片	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
99	SX02 4区	口縁部	刻み	なし	(2.35)	—	—	破片	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良	長石・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
100	SX02 4区 茶褐色礫混土	口縁部	縄文	なし	(3.6)	—	—	破片	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
101	SX02 4区 写7	口縁部	なし	なし	(5.5)	—	—	破片	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：橙 (5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
102	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	刻み	刻み	(2.24)	—	—	破片	明黄褐 (10YR7/6)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第1群 E2類	船元Ⅲ式
103	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	口縁部	なし	なし	(4.1)	—	—	破片	橙 (5YR7/6)	良	長石・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
104	—	口縁部	刻み	刻み	(5.7)	—	—	破片	外：橙 (7.5YR7/6) 内：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良	長石・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
105	SX02 3区	口縁部	刻み	なし	—	—	—	破片	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
106	SX02	口縁部	刻み	縄文	(7.5)	—	—	破片	黄灰 (2.5Y4/1)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
107	SX02 4区 k	口縁部	なし	縄文	(2.12)	—	—	破片	外：橙 (5YR6/6) 内：浅黄橙 (7.5YR8/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
108	SX02 4区 b	口縁部	刻み	なし	(6.5)	—	—	破片	明黄褐 (10YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式
109	SX02 3区 写	口縁部	刻み	なし	(9.0)	—	—	破片	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 E2類	船元Ⅲ式

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残 存 度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端部 加飾	内面 施文	器高 (長)	口径 (幅)	底径 (厚)						
110	SX02 3区	胴部	—	—	(8.4)	—	—	破片	外：橙 (5YR6/6) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良	長石・石英・ チャート 密	第I群 E2類	船元Ⅲ式
111	SX02 4区b	胴部	—	—	(7.2)	—	—	破片	灰黄褐 (10YR6/2)	良	長石・石英・ チャート	第I群 E2類	船元Ⅲ式
112	SX02	口縁部	—	なし	(4.2)	—	—	破片	明黄褐 (10YR7/6)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第I群 F類 (北裏 C式)	—
113	SX02 2区	口縁部	—	なし	—	—	—	破片	橙 (5YR6/6)		長石・石英	第I群 F類 (新保・ 新崎式)	—
114	SX02 3区f	口縁部	—	なし	(5.4)	—	—	破片	外：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内：灰黄褐 (10YR4/2)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第I群 F類 (咲 畑式系)	—
115	SX02 4区1	口縁部	—	なし	(6.9)	15.6	—	1/4	外：橙 (5YR7/6) 内：明黄褐 (10YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第I群 F類 (北 屋敷式)	—
116	SX02 2区	突起部	—	なし	—	—	—	破片	にぶい黄褐 (10YR5/3)		長石・石英・ チャート	第I群 F類 (北 屋敷式)	—
117	SX02 2区	口縁部	—	なし	—	—	—	破片	にぶい橙 (7.5YR6/4)		長石・石英・ チャート黒 雲母	第I群 F類 (北 屋敷式)	—
118	SX02 4区	口縁部	—	なし	(2.34)	—	—	破片	外：にぶい褐 (7.5YR5/4) 内：にぶい褐 (7.5YR6/3)	良	長石・ チャート	第I群 F類 (北 屋敷式)	—
119	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	—	なし	(6.3)	—	—	破片	外：橙 (7.5YR6/6) 内：にぶい黄橙 (10YR5/3)	良	長石・石英・ チャート	第I群 F類 (取 組式系)	—
120	SX02 4区b	多角形 底部	—	—	(6.0)	—	[5.5]	1/2	橙 (5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第I群 底部	鷹島式
121	SX02 2区	多角形 底部	—	—	—	—	—	破片	にぶい黄橙 (10YR6/4)		長石・石英・ チャート	第I群 底部	鷹島式
122	SX02 3区a	凹底部	—	—	(5.3)	—	[6.3]	2/3	外：にぶい橙 (5YR6/4) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第I群 底部	船元Ⅰ－ Ⅱ式
123	SX02 4区d	凹底部	—	—	(1.5)	—	3.5	2/3	明赤褐 (2.5YR5/8)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第I群 底部	船元Ⅰ－ Ⅱ式
124	SX02 4区k	平底部	—	—	(2.15)	—	[8.5]	1/6	外：橙 (10YR7/4) 内：にぶい黄褐 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第I群 底部	船元Ⅰ－ Ⅱ式
125	SX02 3区a	高台 底部	—	—	(3.3)	—	[8.2]	1/4	外：明黄褐 (10YR7/6) 内：橙 (5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第I群 底部	船元Ⅰ－ Ⅱ式

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残 存 度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端部 加飾	内面 施文	器高 (長)	口径 (幅)	底径 (厚)						
126	SX02	凹底部	—	—	(6.6)	—	8.4	2/3	浅黄 (2.5Y7/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
127	SX02 2区	凹底部	—	—	—	—	—	破 片	浅黄橙 (10YR8/3)		長石・ チャート・ 茶粒	第1群 底部	船元Ⅲ式
128	SX02 4区 1	凹底部	—	—	(2.15)	—	5.8	1/1	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：浅黄橙 (10YR8/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
129	SX02 4区 c	凹底部	—	—	(3.6)	—	7.2	2/3	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
130	SX02 4区 h	凹底部	—	—	(2.41)	—	7.2	1/1	にぶい橙 (5YR6/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
131	SX02 4区 1	高台 底部	—	—	(2.6)	—	7.7	1/2	橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第1群 底部	船元Ⅲ式
132	SX02 4区 茶褐色礫混土	高台 底部	—	—	(3.4)	—	6.1	1/1	橙 (7.5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
133	SX02 4区 f 写 11	凹底部	—	—	(2.3)	—	8.2	1/2	外：褐灰 (7.5YR4/1) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
134	SX02	凹底部	—	—	(1.6)	—	7.4	2/3	明黄褐 (10YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
135	SX02 3・4セクション 茶褐色粘質土	凹底部	—	—	(2.36)	—	7.0	1/1	外：明赤褐 (5YR5/6) 内：橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
136	SX02 3区 a	平底部	—	—	(3.6)	—	9.7	1/1	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
137	SX02 3・4セクション 茶褐色粘質土	平底部	—	—	(4.3)	—	[5.5]	2/3	橙 (5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
138	—	平底部	—	—	(4.8)	—	4.7	2/3	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良	長石・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
139	SX02 4区 h 写 15	平底部	—	—	(2.6)	—	[10.0]	1/4	赤 (10R4/6)	良	長石・石英・ チャート 密	第1群 底部	船元Ⅲ式
140	SX02 2区	凹底部	—	—	—	—	—	破 片	暗灰黄 (2.5Y5/2)		長石・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
141	SX02 2区 a	凹底部	—	—	(5.8)	—	8.8	1/3	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式
142	SX02	凹底部	—	—	(4.6)	—	[6.0]	1/3	外：赤褐 (2.5YR4/6) 内：灰黄褐 (10YR5/2)	良	長石・ チャート・ 金雲母・角 閃石	第1群 底部	船元Ⅲ式
143	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	平底部	—	—	(2.25)	—	[11.8]	1/6	外：橙 (7.5YR7/6) 内：明赤褐 (2.5YR5/6)	良	長石・石英・ チャート	第1群 底部	船元Ⅲ式

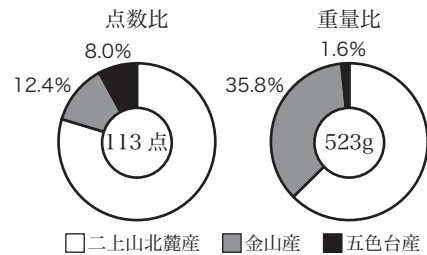
個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残 存 度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端 部 加 飾	内 面 施 文	器高 (長)	口径 (幅)	底径 (厚)						
144	SX02 3・4セクション 茶褐色粘質土	高台 底部	—	—	(2.42)	—	8.3	2/3	浅黄橙 (10YR8/4)	良	長石・石英・ チャート	第I群 底部	船元Ⅲ式
145	SX02 茶褐色礫混粘質土	凹底部	—	—	(5.3)	—	[8.9]	1/3	橙 (5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第I群 底部	船元Ⅲ式
146	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	突 起	な し	(2.23)	—	—	破 片	橙 (7.5YR6/8)	良	長石・石英	第II群 中津式	—
147	SX02 茶褐色礫混粘質土	胴部	—	—	(5.1)	—	—	破 片	橙 (2.5YR6/6)	良	長石・石英・ チャート	第II群 中津式	—
148	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	口縁部	—	な し	(4.3)	—	—	破 片	外：黒褐 (10YR3/2) 内：にぶい黄褐 (10YR5/4)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第II群 中津式	—
149	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	—	な し	(2.32)	—	—	破 片	灰褐 (7.5YR4/2)	良	長石・ チャート・ 金雲母	第II群 中津式	—
150	SX02	胴部	—	—	(2.8)	—	—	破 片	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良	長石・ チャート	第II群 中津式	—
151	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	刻 み	な し	(4.8)	—	—	破 片	外：灰黄褐 (10YR4/2) 内：明赤褐 (5YR5/6)	良	長石・石英	第II群 中津式	—
152	SX02 4区 d	口縁部	—	な し	(4.9)	—	—	破 片	外：明赤褐 (2.5YR5/6) 内：明赤褐 (5YR5/6)	良	長石・ チャート	第II群 芥川式 ～北白 川上層 式	—
153	SX02 3区 茶褐色礫混土	口縁部	—	な し	(3.7)	—	—	破 片	外：浅黄橙 (10YR8/4) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良	長石・石英・ チャート	第II群 芥川式 ～北白 川上層 式	—
154	SX02 4区 k	口縁部	—	な し	(2.13)	—	—	破 片	外：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内：橙 (7.5YR7/6)	良	長石・石英・ チャート	第II群 芥川式 ～北白 川上層 式	—
155	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	口縁部	突 起	縄 文	(5.4)	—	—	破 片	外：橙 (5YR7/6) 内：浅黄橙 (10YR8/4)	良	長石・石英・ チャート	第II群 芥川式 ～北白 川上層 式	—
156	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	—	刻 み	(2.31)	—	—	破 片	褐 (7.5YR4/4)	良	長石・ チャート・ 角閃石	第II群 芥川式 ～北白 川上層 式	—
157	SX02 4・5セクション 茶褐色礫混土	口縁部	—	刻 み	(3.7)	—	—	破 片	赤褐 (2.5YR4/6)	良	石英・金雲 母・角閃石	第II群 芥川式 ～北白 川上層 式	—

個体番号	出土遺構 層位・地区	部位	口縁部		法 量 (cm)			残 存 度	色 調	焼 成	胎 土	分類	泉編年
			端 部 加 飾	内 面 施 文	器高 (長)	口径 (幅)	底径 (厚)						
158	SX02 4区 b	口縁部	-	刻 み	(6.5)	-	-	破 片	外：褐 (7.5YR4/3) 内：黒褐 (7.5YR3/1)	良	長石・石英・ チャート・ 角閃石	第II群 芥川式 ～北白 川上層 式	-
159	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	口縁部	-	文 様	(2.18)	-	-	破 片	明褐 (7.5YR5/6)	良	長石・石英・ チャート・ 金雲母	第II群 四ッ池 式	-
160	SX02 4区 サブトレ (北)	口縁部	-	刻 み	(5.6)	-	-	破 片	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	良	長石・ チャート・ 角閃石	第II群 芥川式 ～北白 川上層 式	-
161	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	平底部	-	-	(2.20)	-	[7.5]	1/6	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第II群 底部	-
162	SX02	平底部	-	-	(2.5)	-	8.4	1/3	浅黄橙 (10YR8/4)	良	長石・ チャート	第II群 底部	-
163	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	平底部	-	-	(2.16)	-	[8.6]	1/4	赤褐 (2.5YR4/6)	良	長石・石英・ 金雲母	第II群 底部	-
164	SX02 2区 茶褐色礫混土	平底部	-	-	(3.2)	-	[9.4]	1/3	橙 (7.5YR6/6)	良	長石・ チャート	第II群 底部	-
165	SX02 4区 茶褐色礫混土	平底部	-	-	(2.19)	-	[10.8]	破 片	外：赤褐 (2.5YR4/6) 内：黒褐 (5YR3/1)	良	長石・石英・ チャート	第II群 底部	-
166	SX02	平底部	-	-	(2.7)	-	[10.4]	1/6	外：明赤褐 (5YR5/8) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)	良	長石・石英・ チャート	第II群 底部	-
167	SX02 4区 黄灰色礫混粘質土	平底部	-	-	(2.21)	-	[14.8]	1/8	浅黄橙 (10YR8/4)	良	長石・石英・ チャート	第II群 底部	-
168	SX02 4区 1	平底部	-	-	(4.6)	-	[10.0]	1/6	外：橙 (7.5YR6/6) 内：褐灰 (7.5YR5/1)	良	長石・石英・ チャート	第II群 底部	-

3 石器

(1) 石器石材の種類と原産地

本石器群は打製石器を量的主体に、わずかに礫石器や磨製石器がともなう構成をとる。打製石器に使用された石材は、粗粒の安山岩製とみられる剥片1点をのぞき、すべてサヌカイト製である。本石器群のサヌカイトは肉眼観察で三分できる。一つめは石基が極めて均質で斑晶が少なく、風化した剥離面は灰黒色、新欠部では漆黒でピロード状光



第30図 サヌカイトの原産地

沢が観察できるものである。二つめは石基のザラつきが著しく、微細な白色の斑晶が顕著なものである。風化した剥離面は青灰色で、白色の粗雑なフィッシャーが観察できる。この種のサヌカイトの風化がより進行したように見えるのが三つめのグループで、風化の発達がやや弱い資料では白色のフィッシャーが目立つ傾向にある。ほぼすべてのサヌカイト製遺物に対して蛍光X線分析による原産地推定を試みたところ、前二者はそれぞれ奈良県二上山北麓産、香川県金山産に判別され、他の原産地に由来する可能性は明瞭に否定できたが、後一者は香川県国分台や蓮光寺など、五色台産であることを強く示唆する結果となった。^(注1) 肉眼観察で二上山北麓産、金山産と推定した資料は、化学組成のうえでもほぼ100%の確率でこれを支持する結果が得られたが、風化した剥離面の肉眼観察において、金山産と五色台産のサヌカイトを峻別することは不可能であった。第30図には、蛍光X線分析の結果にしたがって原産地組成をまとめた。香川県産のサヌカイトが相当量搬入されていることが注目され、和歌山県徳蔵地区遺跡のデータを相対化する意義を見いだせる。⁽²⁾ 点数が豊富な二上山北麓産サヌカイトの原礫面の観察からは、二上山北麓の大阪層群が再堆積した地点や、河床礫としてサヌカイトが点在する原産地付近の河川が、石材の採取場所として選ばれたことがうかがえる。⁽³⁾

打製石器が非在地製の岩石を材料とするのに対し、礫石器には遺跡の付近で採取できる岩石が用いられている。砂岩が多用されているほか、大形の敲石には硬質の石英岩、切目石錘には硬質の泥岩、打欠石錘には切目石錘よりもやや軟質の岩石が利用されており、石器の製作・使用の方法に適した岩種が選択されていることがわかる。磨製石斧に用いられた緑白色の凝灰岩も遺跡付近で採取可能とみられるが、給源の特定には至っていない。

(2) 石器群の特徴

石鏃には平基～微凹基の形態をとるもの(1～3)がふくまれるが、点数が多いのは凹基鏃(4～8)である。5・6の側縁にわずかにS字状の湾曲を認めうること、7が肥大した脚部を有するハート形を呈することには、近畿地方における他の縄文時代中期前半の石器群と共通する。8は身部と脚部の境界に肩をもつ特徴的な形態を見せるが、これは中期末～後期に顕在化する要素である。他の打製石器とは帰属時期を異にするのだろう。9は刺股状の石鏃か琴柱形の石器を志向した未完成品の可能性が疑われる。

石匙は自然面を背面に取りこんだ、石器製作の初期工程で得られた中形の剥片から製作されている。細身の縦型石匙（10・11）、工字～凸字形を呈する横型石匙（12・13）は中期前半に特徴的である。このように石鏃や異形石器、石匙の大多数には、縄文時代中期前半の石器群に通底する普遍性を指摘できる。

削器に分類できる 14 は本石器群の打製石器のうち最も大きなもので、金山産サヌカイト製と推定される。背面にのこされたポジティブな剥離面上に、灰白色の微細な衝撃痕が認められる。石材の運搬にともなう衝撃痕と考えられ、金山産サヌカイトが打ち割りを進めた状態でもち運ばれていたことを示唆する⁽⁴⁾。二次加工は素材剥片の打面を除去するように施されているが、作出された縁部は直線性に乏しく、刃として適しているとは言い難い。一方で素材剥片の末端に相当する箇所には微細剥離が観察できることからすれば、本資料は鋭い末端部を刃とし、打面側に背つぶしを施して持ち手に配慮された刃器と理解するのが妥当である。

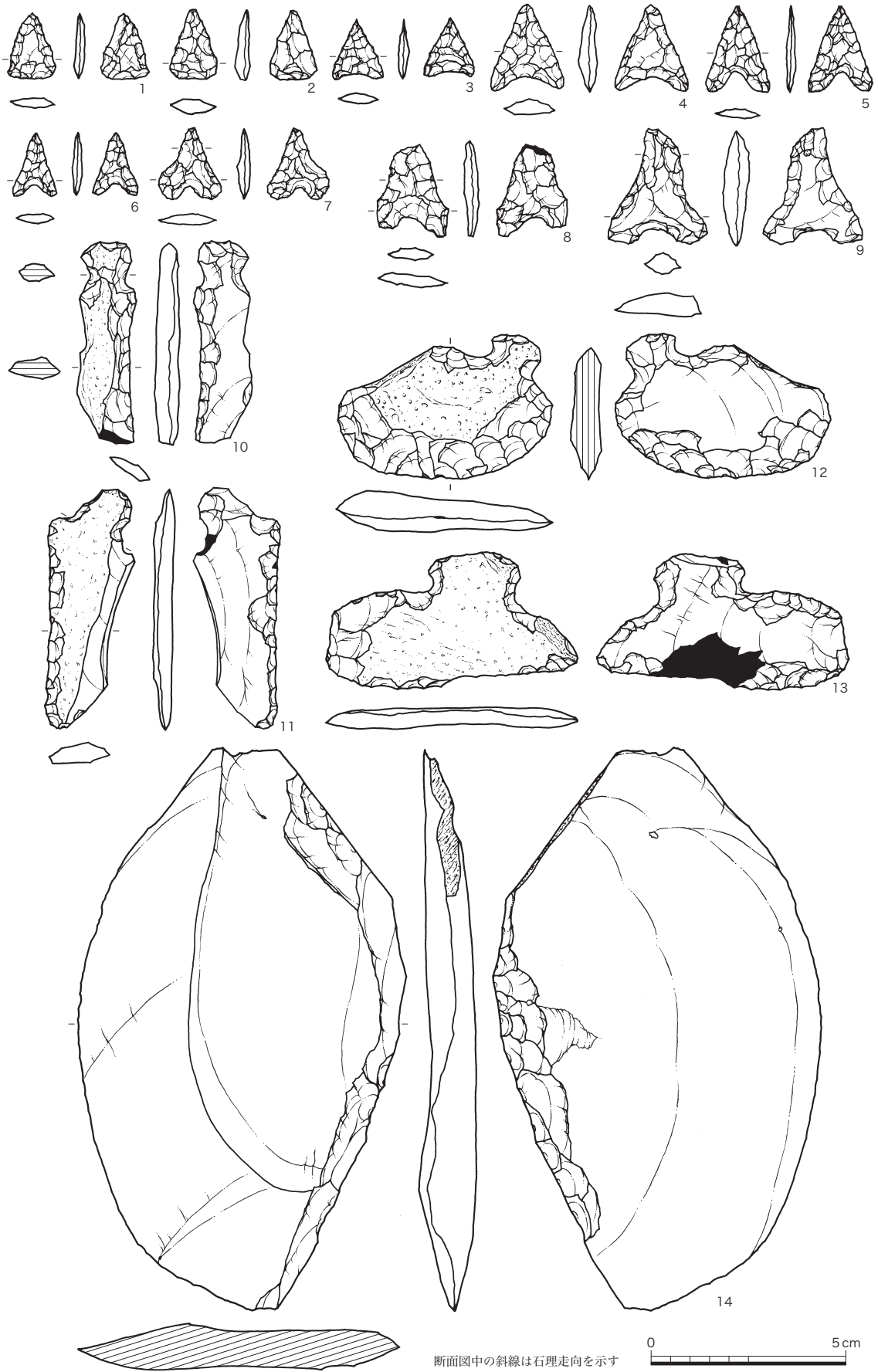
本石器群には、上述のような剥片石器やその素材や製作にともなう残滓であろう剥片が多数ふくまれるが、それには対照的に石核に分類できる資料は 15 のみである。厚手の剥片を素材とし、それに両面剥離を施すことで小形の剥片を得ることが期待されているようで、近畿地方の縄文時代に通有の剥片剥離技術のなかで理解できる⁽⁵⁾。石核の異常な少なさ、この調査区付近での直接打法による石器素材剥片の生産がきわめて限定的であることを示唆する。他所で打ち割った中形剥片を持ちこみ、両極打法による石器素材剥片生産や剥片石器の製作に供することが一般的であったのだろう⁽⁶⁾。図示していないが本石器群には楔形石器が 4 点ふくまれ、また剥片の約半数が両極打法との関連が強く疑われるものである。

サヌカイトの打ち割り作業が複数の工程をもつことは敲石からもうかがえ、大形で硬質な 16 には手の平と指で支持して対象物に強く打ちつける動作が、小形でやや軟質な 17 には指先で支持して細かい動作で対象物に打ちつける動作が想定できる。径が大きく深い敲打痕が機能部を覆っており、石器製作に用いられたと考えるのが妥当である。

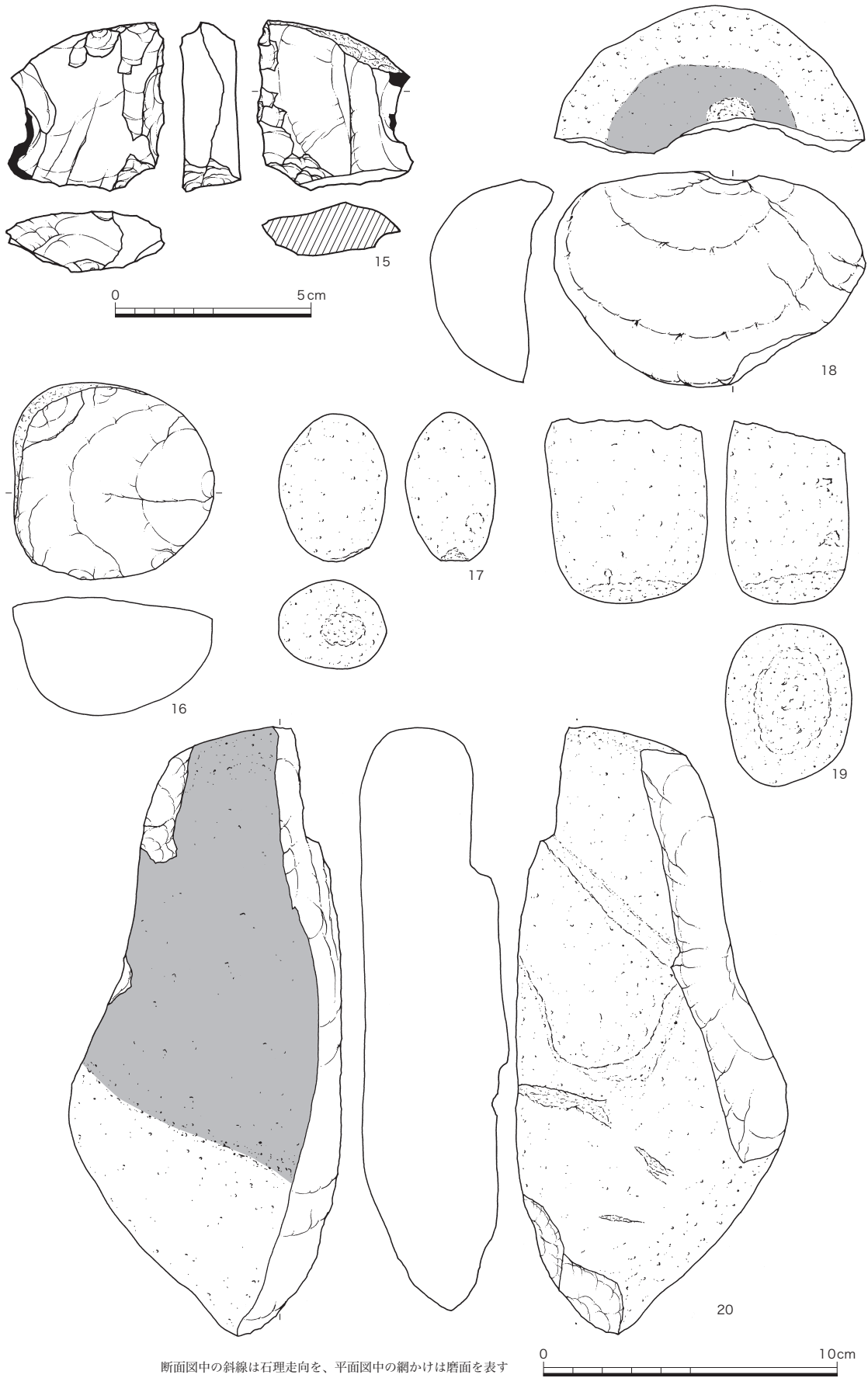
18 は磨面に後続してのこされた凹痕を起点に破碎した凹石片で、凹痕が敲打痕の累積と判断されること、破損面がヘルツ型の割れを示すことから、磨面上で対象物を入念に砕く作業に用いられたと考えることができる。これと調和的なのが 19 の敲石で、径が小さく浅い敲打痕が端部を遍く覆っており、対象物を細かく砕く作業を想定できる。使用痕の形成状況からは、かなり使い込まれた印象を受ける。両者は植物質食料の加工に使われた可能性が考えられる。

20 では凹痕と磨面が面を異にして共存している。凹痕は平面形状が線状、断面形状が V 字状を呈する打ち欠き凹痕で、両極打法にともなう痕跡であろう。磨面は著しく平坦で、大きな作業量を想定できる。この点は他の磨石（21～24）も同様で、磨面によって面取りされたように見えるほど、磨面の発達が顕著である。

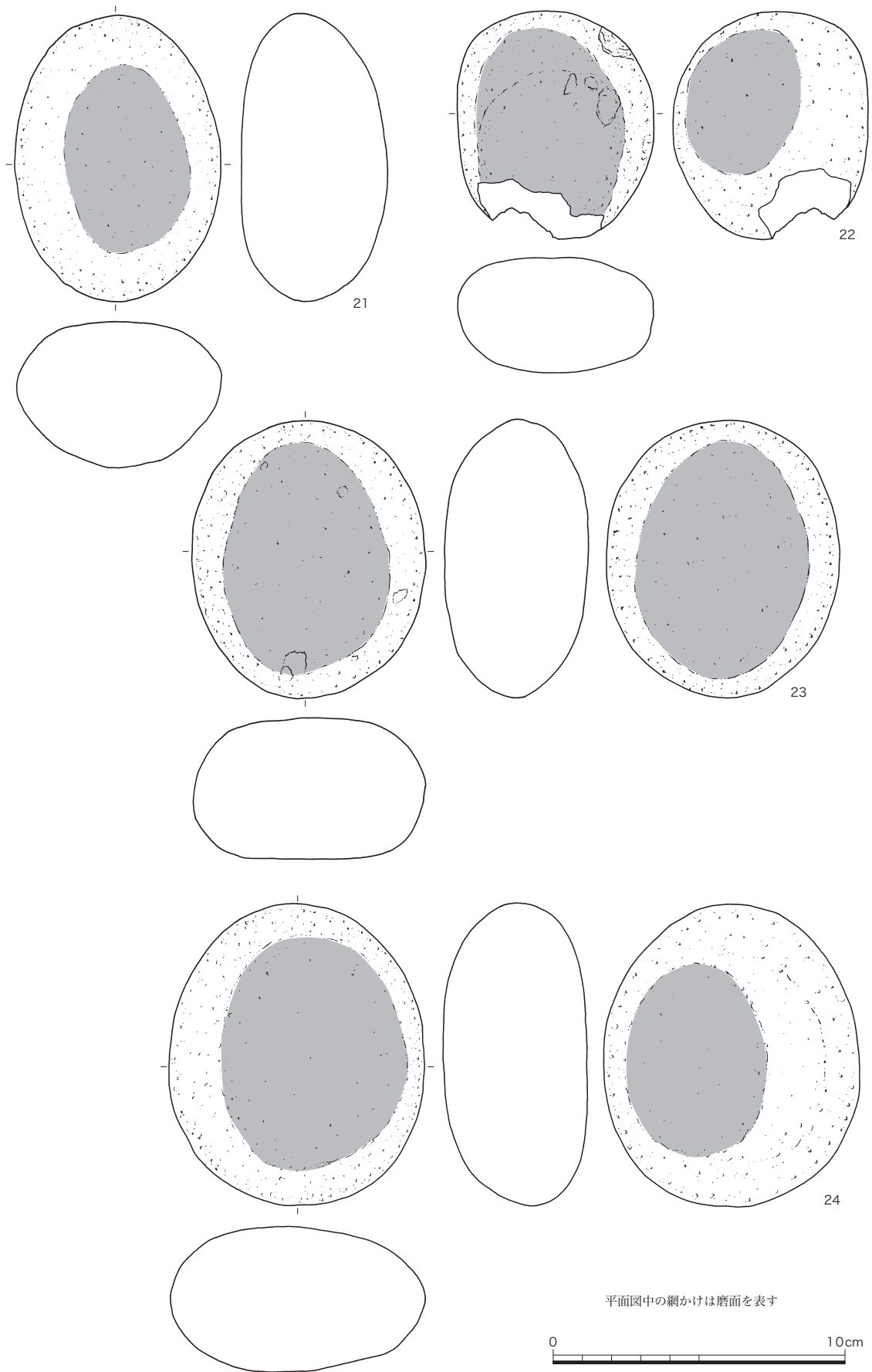
切目石錘では、小判状の円礫の端部に切目がつけられている。切目の作出方法にはバリエーションがあり、25・26 では一方の面からの加工の後、裏返して対応する場所を加工して切目を作り出しているのに対し、27 ではさらに端部から加工を施して仕上げとしている。切目縁部の観察



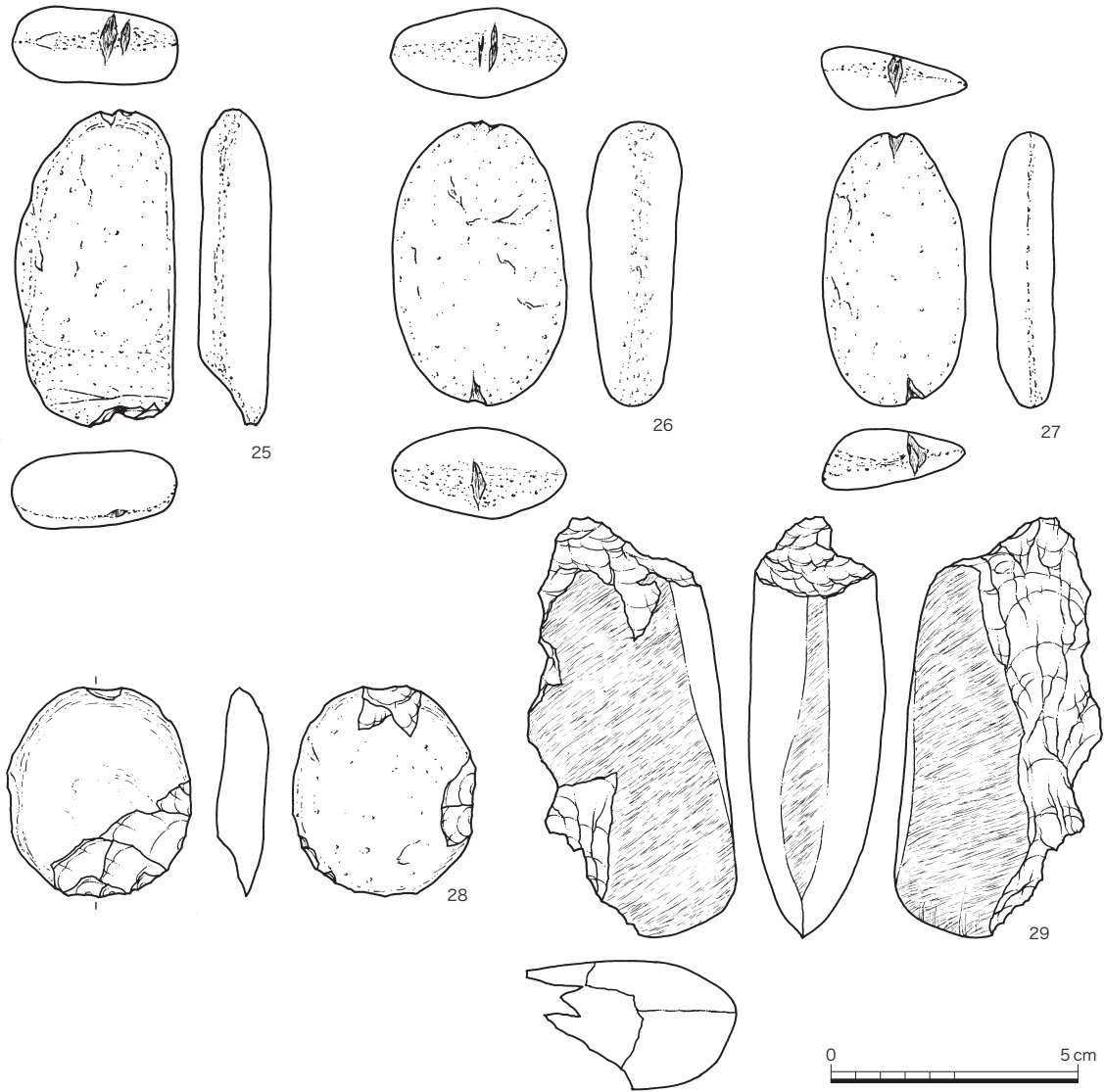
第31図 石器-1 (1/1.5)



第32図 石器-2 (1/1.5・1/2)



第33図 石器-3 (1/2)



第34図 石器-4 (1/1.5)

からは、かなり鋭い道具を何度も擦りつけることで切目が作出されたことがわかる。28は円盤状の原石を素材とし、連続的な剥離調整が施されている。剥離の深さからすれば縁辺に大きな抉りを作ろうとしたとは考えがたく、切目石錘の場合と同様、縁辺にわずかな凹み作出することに加工意図があったと判断される。

29は唯一の磨製石器で、いわゆる定角式の形態をとる小形石斧である。著しく破損しているが、本来は撥形の形状であったと見られる。器面と同様に破損部にも褐鉄が付着しており、遺棄された時点で破損していた可能性が高い。出土地付近で破損したものがまとめて廃棄されたと考えられ、一括して回収された石斧本体と破片を可能な限り接合したものを図示している。破損面は先端部方向からの衝撃で石斧が半割されるのとはほぼ同時に、基部方向からの衝撃が加わって寸詰まり状に破損している。実測図右面には基軸にほぼ直交する線状痕が見られ、製作にともなう研磨痕を切ることから使用痕と考えられる。破損状況や使用痕の形成部位からみて、横斧として着柄され、実測図右面を後主面として使用されたと推定できる。⁽⁷⁾ (上峯 篤史)

注1) 蛍光X線分析は、次の文献に記した測定条件で実施した。

上峯篤史・朝井琢也・L・ドレイク・竹原弘展「ハンドヘルド型蛍光X線分析装置による隠岐・九州地方黒曜岩の原産地推定」『日本文化財科学会第33回大会研究発表要旨集』、2015年、pp.242-243。

- 2) 渋谷高秀・佐伯和也『徳蔵地区遺跡』和歌山県文化財センター、2005年。
- 3) 二上山北麓産サヌカイトの原産地は次の文献に記した基準で肉眼観察し、III b種が多くVI b種がそれに次ぐ結果を得た。上峯篤史『縄文・弥生時代石器研究の技術論的転回』雄山閣、2012年。
- 4) 上峯註3前掲書中で検討した「白色擦痕」と同じ痕跡である。
- 5) 上峯註3前掲書。
- 6) 写真図版20-a～cは本石器群中では大形の資料で、本調査区における石器製作の初期工程の様相を伝えていると考えられる。
- 7) 磨製石斧の部位名称は、次の文献によった。佐原 真『斧の文化史』東京大学出版会、1994年。

付表-3 石器観察表

実測図	写真	資料番号	出土遺構・層位	岩種	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
1	1	20	SX02 4e 区	Sa-N	石鏃	1.7	1.2	0.2	0.5
2	2	19	SX02 4・5区 Section 茶褐色礫混土	Sa-G	石鏃	1.8	1.2	0.4	0.5
3	3	23	SX02 3・4区 Section 茶褐色礫混粘質土	Sa-N	石鏃	1.4	1.3	0.2	0.3
4	4	21	SX02 4l 下層	Sa-G	石鏃	1.9	1.8	0.5	1.1
5	5	16	SX02 3b 区	Sa-N	石鏃	1.7	1.6	0.2	0.5
6	6	17	SX02 4k 区	Sa-G	石鏃	1.3	1.1	0.3	0.2
7	7	18	SX02 4h 区	Sa-N	石鏃	1.7	1.6	0.4	0.6
8	8	28	SX02 4K 区 下層	Sa-N	石鏃	2.2	1.8	0.4	1.1
9	9	22	SX02 4・5区 Section	Sa-N	異形石器	2.5	2.5	0.6	3.3
10	10	24	SX02 4h 区	Sa-K	石匙	5.2	1.5	0.6	4.9
11	11	108	SX02 3区 茶褐色礫混土	Sa-K	石匙	5.8	2.1	0.5	6.0
12	12	25	SX02 4b 区	Sa-N	石匙	3.3	5.5	1.0	18.7
13	13	26	SX02 4e 区	Sa-N	石匙	3.2	6.4	0.5	11.8
14	14	133	SX02 4・5区 Section 茶褐色粘質土	Sa-K	削器	8.3	14.3	1.5	160.9
15	15	38	SX02 4b 区	Sa-N	石核	4.2	3.8	1.4	30.1
16	16	2	-	石英岩	敲石	6.7	6.7	4.2	256.7
17	17	3	SX02 4・5区 Section 茶褐色礫混土	砂岩	敲石	5.0	3.7	3.0	64.8
18	18	14	SX02 4i 区	砂岩	凹石	10.5	4.4	6.9	353.3
19	19	6	SX02 4k 区	砂岩	敲石	6.3	5.3	4.1	216.3
20	20	15	-	砂岩	磨石・台石	20.1	9.2	4.9	1057.0
21	21	10	-	砂岩	磨石	9.8	7.0	5.0	462.1
22	22	9	SX02 5i 区	砂岩	磨石	7.7	6.7	4.0	272.5
23	23	13	SX02 3e 区	砂岩	磨石	9.5	8.0	5.0	558.9
24	24	11	-	砂岩	磨石	10.3	8.7	5.0	617.6
25	25	131	SX02 4e 区	泥岩	切目石錘	6.3	3.2	1.5	48.0
26	26	119	SX02 4i 区	泥岩	切目石錘	5.7	3.5	1.8	52.8
27	27	27	SX02 4k 区	泥岩	切目石錘	5.5	2.9	1.3	24.5
28	28	124	SX02 4h 区	雲母片岩	打欠石錘	4.2	3.7	1.0	18.1
29	29	132	SX02 4d 下層	凝灰岩	磨製石斧	7.7	3.9	2.8	102.9
-	a	55	SX02 4e 区	Sa-N	剥片	5.2	2.9	0.9	11.9
-	b	35	SX02 3・4区 Section 黄褐色礫混土	Sa-N	剥片	3.5	4.7	1.5	36.2
-	c	58	SX02 4区 黄褐色礫混粘 土	Sa-N	剥片	4.6	4.2	1.2	20.4

※ Sa-N：二上山北麓産サヌカイト Sa-K：金山産サヌカイト Sa-G：五色台産サヌカイト

第3章 船元式の変遷と展開 —友岡遺跡出土資料を軸として—

はじめに

第2章で述べたように、友岡遺跡の出土土器は、第I群の縄文中期土器が主体を占める。とくに、中期前葉から中葉に位置づけられる船元式に比定されるものが多い。船元式は中四国から近畿地方を中心に分布する縄文土器型式で、独特の原体による縄文を地文にもち、半截竹管状工具によって文様を描出することを型式認定の指標とする。時間的にみると、中期初頭の鷹島式や中期後葉の里木Ⅱ式と、形態や文様構成が型式学的につながり、これらの型式間の関係は深い。したがって、鷹島式、船元式、里木式を合わせて西日本の中期を特徴づける縄文土器様式として認識可能である。このうち、船元式は、船元Ⅰ式からⅢ式に大別され、さらに船元Ⅰ式を3期、船元Ⅱ式を2期に細分し、船元Ⅲ式を合わせた6段階の編年がされている(泉2008)。本章でも、この編年観にしたがい、友岡遺跡から出土した船元式土器資料を分析して編年的位置づけを確認する。その内容を周辺遺跡との関係のなかでみていくことで、船元式の変遷と展開を考察していきたい。

1 研究略史と研究課題

(1) 研究略史

まずは、船元式をめぐる研究史をおさえる。船元式の型式設定および段階設定の手続きを整理することで、船元式の現状と課題を確認したい。

船元式は、三森定男によって設定されたことを始まりとする(三森1938)。その基準資料は、清野謙次らが調査した岡山県浅口郡里木貝塚出土資料(清野1925, pp.25-29、三森1936, pp.20-28)と、三森らが調査した岡山県倉敷市船元貝塚出土資料である(三森1936, pp.14-20)。三森は、縄文地にほどこす文様の特徴に着目し、弧状線文をもつA式と、爪形文をもつB式に、文様系統を分けている。さらにA式は、①微隆帯と②沈線、B式は、③凸帯と④扁平な爪形文に細分している。これらの分類を、船元貝塚の出土層位から、下層(①, ③)と上層(②, ④)に位置づけ、時期差を想定した。また、里木貝塚出土資料は、②と④の特徴をもつものが主体を占めるとし、船元貝塚上層出土資料と並行させている(三森1938, pp.41-46)。

一方、三森が船元式を設定するのと前後して、清野の里木貝塚出土資料は上層と下層の土器分類から、山内清男によって、前期の「里木Ⅰ」、中期の「里木Ⅱ」が置かれ(山内1937, p.32)、里木Ⅰ式とⅡ式が設定された(高橋1981)。このうち里木Ⅱ式は、加曾利E式とあいだで、文様構成に関係があることを、山内が言及している(京大文博1960)。こうした見解から、里木Ⅱ式は中期後半に位置づけられ、三森の船元式に後続するものとして理解された。

また、三森のいう船元B式の凸帯をもつ群(③)は、和歌山県有田郡鷹島遺跡で単純なまとまりとして出土したことにより、鷹島式として分離され(巽・中村1969, pp.32-34)、前期末の

大歳山式と、船元式のあいだに位置づけられて、中期初頭の土器型式と想定された。こうして、鷹島式、船元式、里木式という順の変遷が整備された。

しかしながら、船元式および周辺の時期の資料に関する調査報告は、断片的なものしかなく（間壁 1971）、依然として層位的な発掘調査情報はなく型式細分に対する共通理解は得られていなかった。それを体系的に実施したのが、間壁忠彦と間壁菫子による『里木貝塚』の報告書であり（間壁 1971）、船元式研究における重要な成果である。報告書の中で、間壁らがおこなった編年（以下、里木編年と呼称する）は、里木貝塚の貝層と貝層下の土層にみられた資料の層位的な出土状況と、土器に施文された縄文の撚りと施文具の変化の関係を基本としている。里木編年は、船元式をⅠからⅣ式に四細分し、これに里木Ⅱ式、里木Ⅲ式を合わせて、計六形式（型式）で構成される。里木編年は、諸型式の定義が明快であるので、共通の理解を得やすいという利点もっている。とくに地文のありかたによって、縄文をもつ船元Ⅰ式からⅢ式と、深浅の条が交互にくる、いわゆる浅深縄文をもつ船元Ⅳ式、撚糸文をもつ里木Ⅱ式、条線をもつ里木Ⅲ式という順序は層序にのっとった変遷をもつので、ひろく支持された。今でも基本的な変遷観に変更はないが、一部、地文の変遷と文様の型式学的変遷が一致していない（泉 2008,p.503）点が課題としてのこっている。

また、里木編年には編年を組み立てる上での資料的な制約に影響されて、問題点もあった。一つは、船元Ⅰ式をA類からH類の八つに分類したうちのB類と、既定の鷹島式（巽・中村 1969）の関係である。B類は、その特徴から鷹島式に一致する（間壁 1971,p.27）が、里木編年では、調査所見を重視して、これを地域差として、鷹島式と船元Ⅰ式の並行関係を想定した（間壁 1971,p.56）。鷹島式を地域差か時期差かどちらで捉えるかという問題は、前期末資料の増加と、高橋護（1981）による鷹島式と前期末土器との比較検討を経て、鷹島式（船元Ⅰ式B類）が先行し、船元Ⅰ式がそれに続くとする変遷観（泉 1981,p.17）が優勢となった。もうひとつ、里木編年をめぐる問題として、船元Ⅳ式がある。船元Ⅳ式は浅深縄文を地文とするのを特徴として船元式のなかの細分型式として設定し、里木Ⅱ式と分離している（間壁 1971,pp.70-75）。これについて、高橋は、山内の里木Ⅱ式の定義（京都大学文学部博物館 1960）をふまえて、船元Ⅳ式を里木Ⅱ式の細分とし（高橋 1981）、泉拓良（1988）もこれにしたがっている。

こうした里木編年による共通理解が得られた一方で、船元Ⅰ式B類や船元Ⅳ式の設定に対する高橋の修正を踏まえて、あらたに器形と文様の変遷に重きをおいた縄文土器様式編年を泉（1988）が提示した。とくに、滋賀県大津市粟津遺跡出土資料の検討（泉 1981,1984）をふまえて、第2様式（船元Ⅰ式）から第3様式（船元Ⅱ式）への連絡が整理された。

こののち、当該期の良好な資料が増加した。なかでも船元Ⅰ式の新相から船元Ⅱ式が主体となる粟津遺跡第3貝塚（瀬口 1997）、船元Ⅱ式を主体とする大阪府寝屋川市讃良川遺跡（塩山 1997）が重要である。粟津遺跡第3貝塚では、瀬口真司（1997）が出土資料の分析、考察をしている。とくに船元Ⅰ式と船元Ⅱ式の関係のなかで、口縁部と胴部の境（口胴部界）内面にみられる稜がⅡ式で消失するとされる変遷観（泉 1988）について、Ⅰ式の段階ですではじまって

いる可能性を指摘している点が注目される。また、従来船元Ⅱ式の指標とされていた刻み目をもつ凸帯、円形刺突列による文様意匠が船元Ⅰ式にまでさかのぼることを指摘している。讚良川遺跡では、船元Ⅱ式の良好な資料が得られたことから、円形刺突列と凸帯による文様意匠の変遷が把握された（塩山 1997, pp.58-63）。こうした資料増加を受け、泉は編年を修正、補強し、鷹島式、船元Ⅰ式（Ⅰ期～Ⅲ期）、船元Ⅱ式（Ⅰ期・Ⅱ期）、船元Ⅲ式、里木Ⅱ式（Ⅰ期～Ⅲ期）の5大別11細別の編年を提示している（泉 2008）。本稿では、この泉編年の変遷観にしたがい、分析をすすめていく。

（2）研究課題

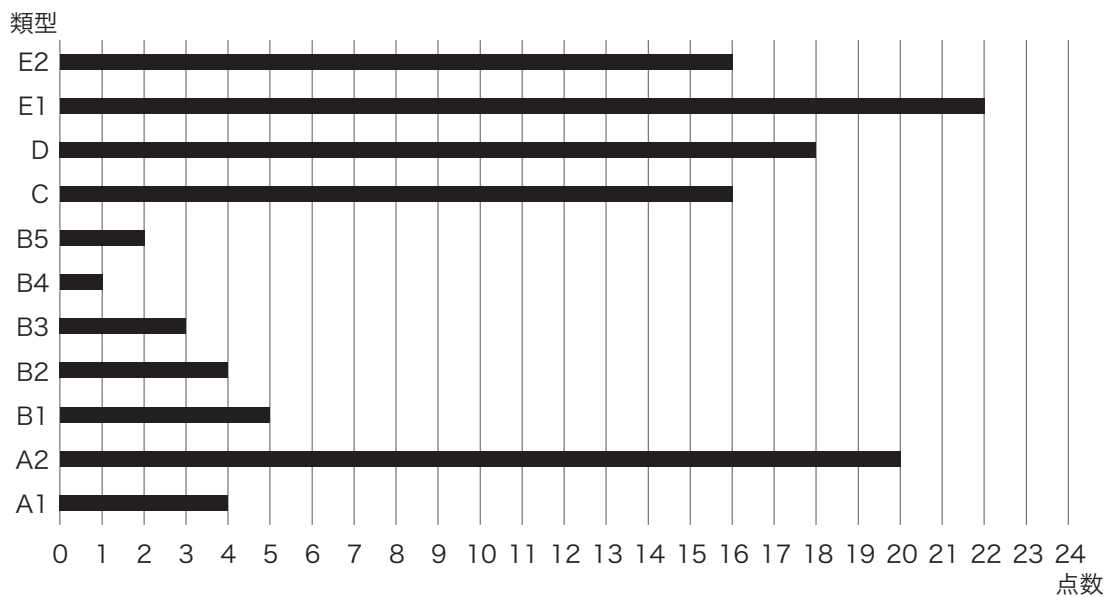
このように、船元式は整理されてきたが、いまひとつ課題がのこる。それは船元Ⅱ式からⅢ式への連絡である。船元Ⅱ式は、船元Ⅰ式までみられた口胴部界の屈曲が弱まること、キャリパー形の器形のほか口縁が外反、直立する器形が生じることを特徴としている。文様構成は、円形刺突列を基調とする、Ⅱ式Ⅰ期と凸帯を基調とするⅡ期に分かれる。船元Ⅲ式は半截竹管状工具による沈線文を特徴としており、文様の種類の違いが明白である。器形はⅡ式のことを踏襲するが、外反、直立する口縁をもつ器形は消極的である。とくに、問題となるのは船元Ⅱ式からⅢ式にみられる三角形の文様意匠である。これは里木Ⅱ式にはみられない（泉 2008, pp.506-507）ものである。一方で、船元Ⅲ式にみられる弧線状文の盛行を考えるうえでは、船元Ⅱ式の文様構成は大きく影響すると考えられる。したがって、船元Ⅱ式とⅢ式のあいだの連絡を追究し、その変遷過程を明らかにすることは重要であろう。

2 考察

（1）友岡遺跡出土資料の検討

第2章では、文様構成から、爪形文をもつA類、押し引きや円形刺突をもつB類、縄文のみのC類・微隆帯をもつD類・沈線で文様を描くE類の五つに大別して、さらに、A類を、扁平な隆帯上に爪形文を施文するA1類・器面に直接爪形文を施文するA2類の二細分、B類を、円形刺突列をほどこすB1類・半截竹管状工具による刺突をもつB2類・棒状工具による刺突列をもつB3類・指頭状の押圧痕列をもつB5類の五細分、E類を、弧状線をもつE1類・三角形状線をもつE2類の二細分をし、その内容を詳述した。その構成比率は第35図のとおりである。

結果、友岡遺跡の資料は、鷹島式から連続して考えられる土器群である第Ⅰ群A2類、C類、D類、E類（泉編年船元Ⅲ式）が多い。このうち、C類は縄文のみをほどこす一群で時期比定は困難である。またD類は同一個体と考えられるものが多く、破片数が個体数とはならない。したがって、20点の第Ⅰ群A2類（泉編年船元Ⅰ式Ⅰ期）、22点のE1類（泉編年船元Ⅲ式）、16点のE2類（泉編年船元Ⅲ式）が多いことが当遺跡の特徴となる。一方で、押し引きや刺突を主体としたB類は、分類によって、多様性がみられる（B1類～B5類）ことが特徴である。ただ全体でも17点しかなく、E類に比べると、当遺跡の主体とはならないことが分かる。このB類は泉編年でいうと船元Ⅰ式Ⅱ期からⅡ式Ⅱ期に該当し、この時期が友岡遺跡では資料が少ない



類型	A1	A2	B1	B2	B3	B4	B5	C	D	E1	E2	計
点数	4	20	5	4	3	1	2	16	18	22	16	111
百分率	3.6%	18.0%	4.5%	3.6%	2.7%	0.9%	1.8%	14.4%	16.2%	19.9%	14.4%	100.0%

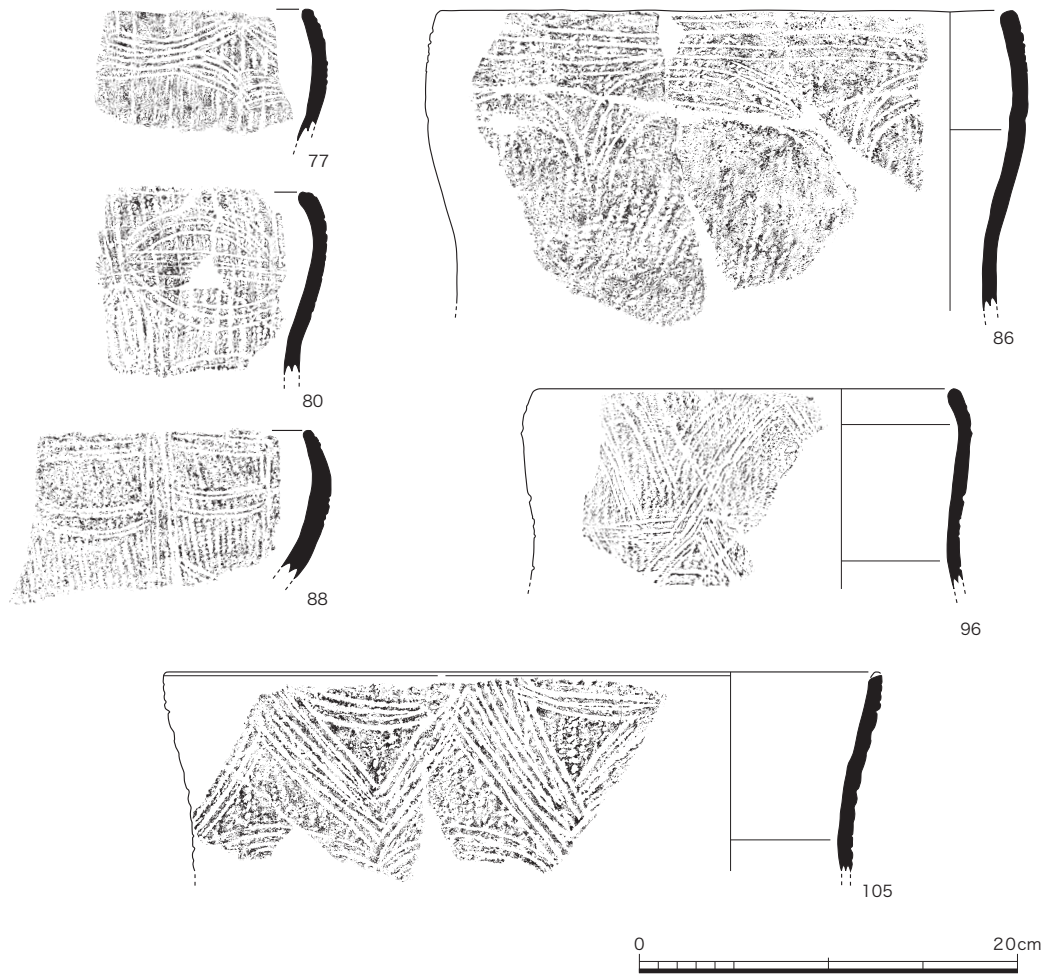
第35図 友岡遺跡出土土器の類型分布

ということとなる。ただし、資料自体は数が少ないながらあるので、遺跡の断絶までは想定しない。第35図でみた類型分布の結果からすると、友岡遺跡出土資料には、時期的なカタよりが見受けられ、船元I式I期と船元III式という二つの盛行時期がうかがえる。

ここでは、前節で抽出した課題である、船元II式からIII式への連絡について考察をする。したがって、とくにE類を中心に検討をすすめていく。第36図にE類の代表例を示す。77・80・86・88が弧線状文をもつE1類、96・105が三角形状文をもつE2類である。器形は、105がやや外反する口縁部をもち、古相の特徴をのこすが、それ以外は、ゆるく内彎するキャリパー形を呈している。88は口縁の内彎がつよく、より新相に近い特徴をもつ。いずれにしても、船元III式の範疇で捉えられる。77は上向きと下向きの連弧が背を合わせて対向し、80は下向きと上向きが口を合わせて対抗する。88は上向きの連弧が多段に構成されている。

この3者は、いずれも複数段にわたって連弧を組み合わせて、文様を構成しているが、80・88には縦位の沈線がひかれ、連弧文が縦に区分されていることに注意を要する。すなわち77は、対向連弧文を横に展開する文様構成をしているのに対して、80・88は縦位沈線によって分断され、縦に展開する文様構成をもつのである。また、86は口縁に沿うように平行沈線を四条ひいており、口縁部の直下に連弧文とはつながらない文様帯を形成している。連弧の単位文様は口縁部の文様帯の下に配される。77と同様に横に展開する文様構成といえよう。なお、77と86は文様構成が口縁部のみになっており、文様が胴部へはつづかない。

96は、三角形状の文様意匠が展開し、横位の多条平行沈線で文様帯を多段化している。105

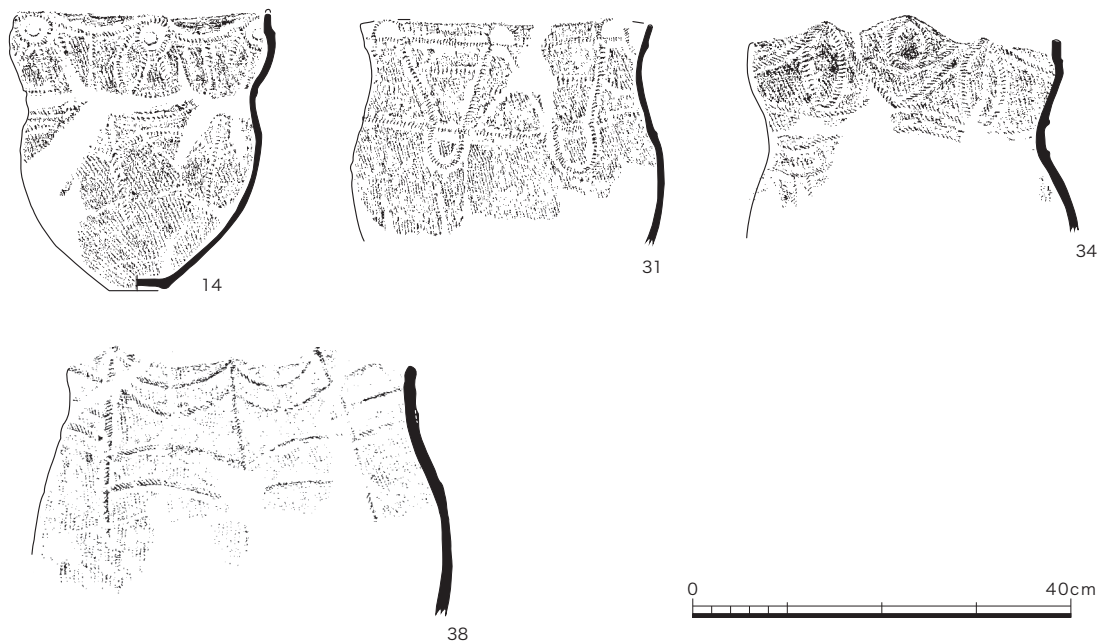


第36図 友岡遺跡出土土器のE類 (1/4)

は96と同様な構成をもつが、横位の区画は沈線ではなく、連弧による。これらは横に展開しながら、多段をもつ文様構成となっている。

(2) 讚良川遺跡出土資料の検討

E類の成立は、D類（泉編年船元Ⅱ式2期）からのつながりを検討することが、その成立を考える道筋のひとつである。しかしながら、友岡遺跡から出土しているD類は点数が少ないのと、小破片資料であるので比較検討が難しい。そこで、船元Ⅱ式の資料を主体とする讚良川遺跡出土資料と対比していくなかで、E類の成立を検討していきたい。第37図には、讚良川遺跡出土資料のうち船元Ⅱ式として挙げられているもの（塩山1997）を載せた。なお、実測図に付した番号は転載元の番号と対応する。いずれも刻み目をもつ凸帯を主体として文様を展開している。14は口胴部界内面にみられる稜の名残から、船元Ⅰ式とⅡ式をつなぐ資料と捉えられている。口縁直下を上向きの弧線で横につなぎ（文様帯Ⅰ）、円形状の文様意匠によって単位文をつくる。口胴部界にも同様な上向き弧線をほどこし（文様帯Ⅲ）、文様帯Ⅰと文様帯Ⅲをつなぐように縦位の文様（文様帯Ⅱ）を展開している。文様帯Ⅲの下には下向き連弧文を配する。31は、14と同様な文様構成をとるが、文様帯Ⅲの下にくる文様意匠は、紡錘状となり、文様帯Ⅱとの連絡が



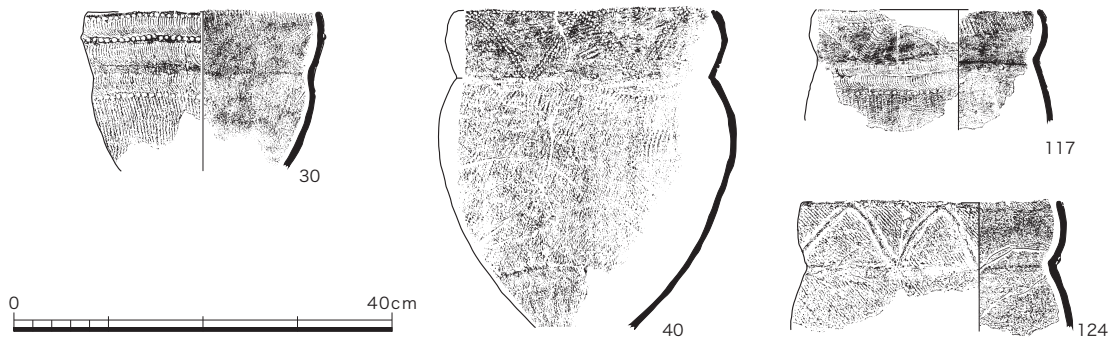
第37図 讃良川遺跡出土資料 (1/8)

読み取れる。船元Ⅱ式Ⅰ期に位置づけられる。こうした文様意匠は、前段階の船元Ⅰ式にみられる爪形文による楕円状文とともに貉沢式、新道式の影響が考えられ（泉 2008, p.504）、中部高地との関係が注目される。とくに文様帯Ⅱに着目すると、文様帯Ⅰと文様帯Ⅲへの連結が顕著となり、直線化した文様であるのが鮮明となる。ここに、E2類の三角形状文の祖型がもとめられよう。

第36図96と105にみられた横位の区画は、円形状の文様意匠による単位文で成る文様帯Ⅰ、文様帯Ⅱを受けて平行に文様をひく文様帯Ⅲの名残と考えたい。とりわけ、第37図34にみられる、円形状の文様意匠が肥大化して文様帯Ⅱと同化してしまっている文様帯Ⅰの崩れは、まさに文様帯Ⅰを意識させなくなる過渡期に位置づけられよう。特徴的には船元Ⅱ式Ⅰ期の資料だが、新相を示す資料と考えられる。同じく第36図77や80にみられる口縁部における連弧文が対向して組み合う文様意匠は、文様帯Ⅰの崩れたことを要因として、さらに進んで、下の文様帯とのつながり、口縁部文様帯として再構成していることが読み取れる。したがって、77、80はE類のなかでも新しいと判断される。第37図38は、船元Ⅱ式Ⅱ期に位置づけられる。縦位の区画と、その中に連弧を充填する文様構成をとる。器形の違いがあるため、直接的にはつながらないが、凸帯を沈線に置きかえると成り立つ文様意匠であるので、第36図88と第37図38は同系譜上の文様構成とみなすことができよう。

(3) 粟津遺跡第三貝塚出土資料の検討

前項で、船元Ⅱ式で盛行する刻み目をもつ凸帯で構成される文様に、船元Ⅲ式で展開する文様の祖型があることがあきらかとなった。文様構成の基本は、文様帯Ⅰ、文様帯Ⅱ、文様帯Ⅲの関係である。そこで、さらに時期をさかのぼって、そもそも船元Ⅱ式にみられた文様構成がどのように成立するかを探る。ここでは、船元Ⅰ式が主体的に出土した粟津遺跡第3貝塚を検討する。

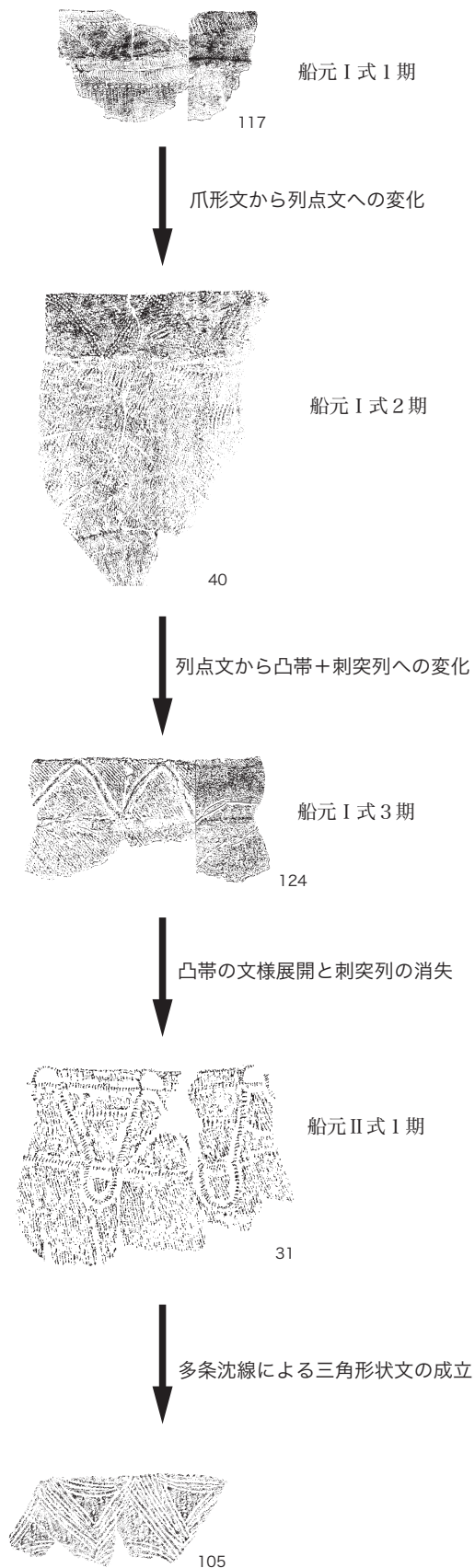


第38図 栗津遺跡第3貝塚出土資料(1/8)

第38図は、第Ⅷ層(30・40)と第Ⅶ層(117・124)から出土した土器である。第36図と同じく、実測図に付した番号は転載元の番号と対応する。30と117は船元Ⅰ式Ⅰ期に位置づけられる。30は平行する爪形文を多段に構成し、口縁部に二列の列点文、胴部に一列の列点文を配し、区画を強調している。前者は文様帯Ⅰとして捉えられ、後者は文様帯Ⅲの原型となろう。117は30と同様に、口縁直下と、胴部に平行する爪形文と列点を配している。口胴部界にみられる二段の爪形文のありかたから、文様帯Ⅲの発達が読み取れる。

さらに、文様帯Ⅰと文様帯Ⅲのあいだに、波状の爪形文を横に展開し、文様帯Ⅱをつくる。これは、第36図でみた文様帯Ⅱの三角形状文、連弧文の原型をうかがわせる。40は文様意匠が列点のみでほどこされているものである。型式学的に117に後出するもので、船元Ⅱ式に盛行する円形刺突列との関係がうかがえる。しかしながら、器形が船元Ⅰ式の典型であるのと、口縁部に描かれた鋸歯状の文様意匠が同時期の波状の爪形文と類似する。また出土層位もふまえて、これを船元Ⅰ式Ⅱ期に位置づける。

124は117の文様意匠を、凸帯で表現したものである。口縁直下には列点文がめぐる。船元Ⅰ式Ⅲ期に位置づけられよう。これらの資料から、文様帯Ⅰが列点文を基準に構成されていることが分かる。この列点文は、船元Ⅰ式Ⅰ期に盛行するC字状爪形文の支点を由来として(泉2008,p.505)成立したと考えられる。さらに30の爪形文の形状がI字状に近づいていることから、C字状爪形文+支点→I字状爪形文+列点の文様変遷が想定できる。したがって、三角形状文の出自は、波状の爪形文に求められ、沈線による三角形状文は、文様帯Ⅱの発展とともに成立した文様意匠であると結論づける。文様帯Ⅱを構成する波状の爪形文は、40や124のように列点や凸帯で替えるようになる。そして第37図で示したように、やがて凸帯による文様意匠へと統一されていく。凸帯による文様意匠は、文様帯Ⅱの直線化を強める方向へと変遷していく。こうして船元Ⅲ式にみられる沈線による三角形状の文様意匠をもつE2類が成立していく下地ができるのである。



第39図 三角形状文の成立過程

3 まとめ

本稿では、E2類の主な文様要素である三角形状文に主眼をおき、その成立と展開を考察した。結果、三角形状文の出自は波状の爪形文に求められること、それが文様帯IIを構成する重要な要素であることを示した。

第39図は、これまでの分析結果をまとめて、三角形状文の成立過程を示したものである。船元I式1期の段階でみられた波状の爪形文は文様帯IIとしてあらわれる。船元I式2期になると、刺突列の盛行により、文様帯IIを刺突列では縄文をつくりだすものが出てくる。第39図の40は、その一例である。三角形状文の形成を明瞭に示すために、分かりやすい例を求めて、刺突列のみで構成されている40を挙げたが、同時期に凸帯も組み合わせられて展開するものも多くある。したがって、祖型としての三角形状文はすでにみられるが、必ずしもこれが主体となるわけではない。

重要なのは、当該期に文様帯IIが定着することである。船元I式1期では、並行する爪形文を多段につける文様帯Iが発達し、文様帯IIも同様な構成となって、明確に分離していないものも多い。船元I式2期は、その文様帯IIが明確に文様帯Iから分離する時期として評価できよう。船元I式3期では、波状文が凸帯により表現されるようになり、文様帯IIが主文様帯となる。このことは、つづく船元II式2期の、文様帯IIの文様構成に影響する。

第37図でみてきたように、船元II式で、文様帯IIの文様が大きく展開する。一方で、文様帯Iや文様帯IIIと連絡をもち、文様帯IIが独立した文様帯を維持できなくなる時期でもある。第39図では、31から105への変遷から、文

様帯Ⅱの変化を読み取れる。ただし、31は船元Ⅱ式Ⅰ期資料であり、105の船元Ⅲ期資料とのあいだに時間的な隔りがある。現状では、船元Ⅱ式Ⅱ期で、三角形状文へ直接つながる良好な資料がないが、第37図34をさらに明瞭にしたような、文様帯Ⅰと文様帯Ⅱがひとつの口縁部文様帯へとなる資料をあいだに介して、船元Ⅲ式の三角形状文が成立してくることを想定したい。なお、船元Ⅲ式以降は、文様帯Ⅰがくずれ、文様帯Ⅱと合流し、口縁部文様帯として再構成されることで、一連の変遷を完了する。つぎの里木Ⅱ式では、口縁部文様帯と胴部文様帯というふたつの文様帯で展開していくことをふまえると、この文様帯Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは、船元式の特徴的な文様構成であるといえよう。一方で、本稿では、船元Ⅲ式より盛行する連弧文は、触れなかった。これは、連弧文の盛行する里木Ⅱ式を合わせて考えるべき問題であり、先行研究で指摘されているように（京都大学文学部博物館1960、高橋1981、泉1988）、東日本との関係のなかで読み解くべきである。今後の課題として、本稿を終えたい。

(妹尾 裕介)

- 注1) 泉 拓良 1979「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集』1 日本原始 小学館 pp.142-172
- 2) 泉 拓良 1981「付章 粟津遺跡出土遺物 1. 縄文土器」『遺跡確認法の調査研究昭和55年度実施報告』文化庁 pp.13-20
- 3) 泉 拓良 1984『粟津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会
- 4) 泉 拓良 1988「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』3 中期Ⅱ 小学館 pp.307-310
- 5) 泉 拓良 2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp.502-509
- 6) 春日井 恒 2003「第5章まとめ 4 縄文時代中期後葉の土器」pp.225-228
- 7) 鎌木義昌 1969「西日本における二大土器分布圏」『新版考古学講座』3 先史文化 雄山閣 pp.163-167
- 8) 河口貞徳 1988『鹿児島』日本の古代遺跡 38 保育社
- 9) 河瀬正利 2006『吉備の縄文貝塚』吉備考古ライブラリィ 14 吉備人出版
- 10) 清野謙次 1925『日本原人の研究』岡書院
- 11) 京都大学文学部博物館 1960「里木貝塚」『京都大学文学部博物館資料目録』I 日本先史
- 12) 佐原 真 1981「縄文施文法入門」『縄文土器大成』3 後期 講談社 pp.162-167
- 13) 塩山則之 1997「讃良川遺跡」『寝屋川市史』1 寝屋川市史編纂委員会 pp.52-68
- 14) 瀬口真司 1997a「第7章 第1節 土器」『粟津湖底遺跡第3貝塚』本文編 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 pp.93-180
- 15) 瀬口真司 1997b「第10章 第2節 第3貝塚出土の船元式土器」『粟津湖底遺跡第3貝塚』本文編 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 pp.363-398
- 16) 高橋 護 1981「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成』2 中期 講談社 pp.164-165
- 17) 巽 三郎・中村 貞史 1969『鷹島』鷹島遺跡発掘調査報告書 南紀考古同好会
- 18) 田中良之 1980「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』九州大学文学部考古学研究室編 鞍手町埋蔵文化財調査会
- 19) 田中良之 1988「阿高式土器様式」『縄文土器大観』3 中期Ⅱ 小学館 pp.307-310
- 20) 原 秀樹 1990「右京第325次(7ANNKG-3地区) 調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 pp.56-57
- 21) 間壁忠彦・間壁葎子 1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報7
- 22) 三森定男 1938「先史時代の西日本」『人類学先史学講座』第2巻 pp.33-72

- 23) 三森定男 1936 「西南日本縄文土器の研究」『考古学論叢』1 pp.12-48
- 24) 矢野健一 1993 「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚』I 愛媛大学法文学部考古学研究室報告2冊 pp.157-175
- 25) 山内清男 1937 「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1 pp.29-32

※実測図は各報告書より転載、筆者による再トレース、表現統一のため、一部改変

報告書抄録

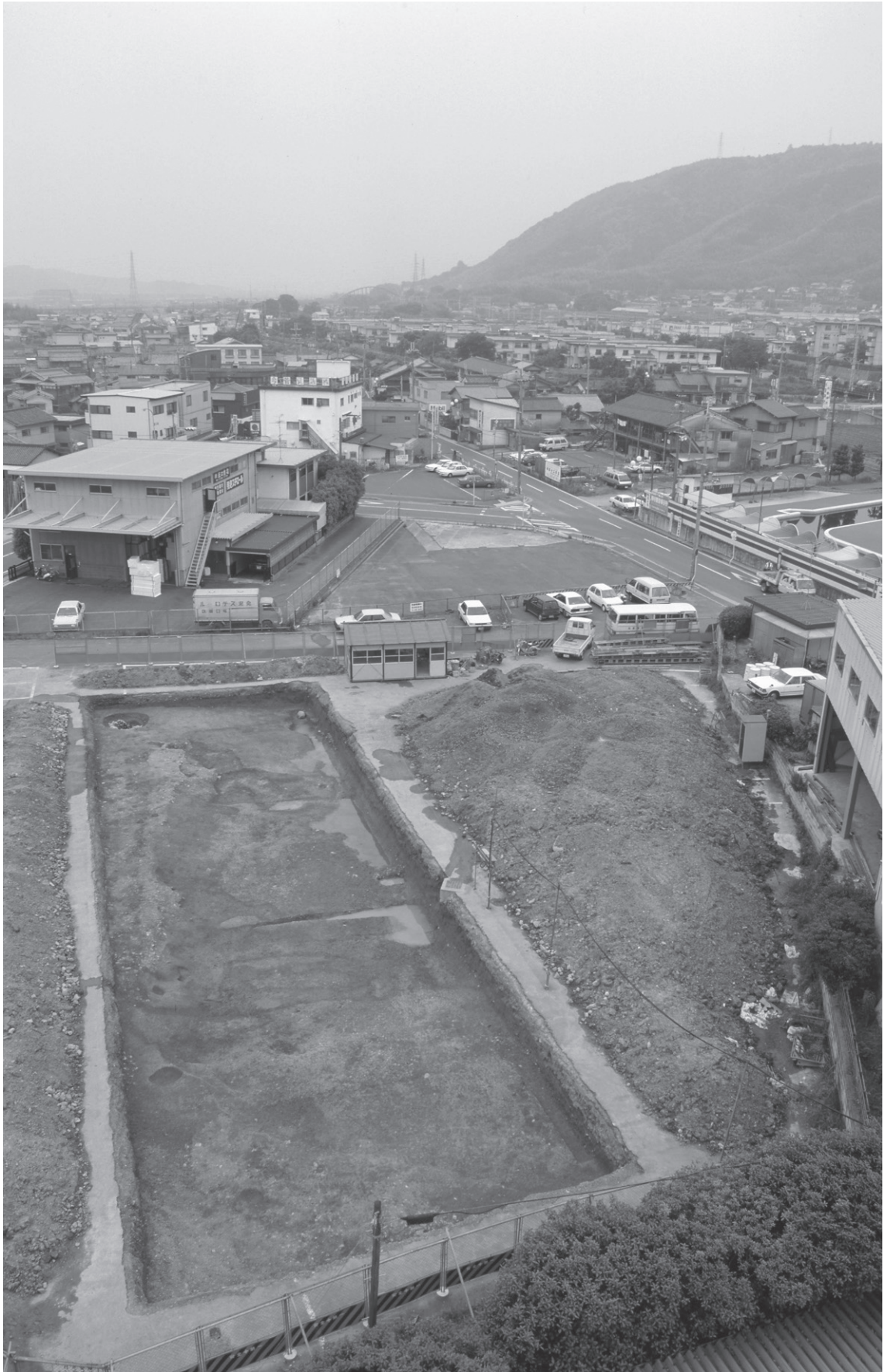
ふりがな	ともおかいせき ながおかきょうあとうきょうだい325じはつくつちょうさほうこく
書名	友岡遺跡-長岡京跡右京第325次発掘調査報告-
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第57集
編著者名	泉 拓良、妹尾裕介、上峯篤史、小泉翔太、原 秀樹
編集機関	公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 ともおかいせき 友岡遺跡	ながおかきょうし 長岡京市 ともおか 友岡四丁目 114他	26209	107	34°54'36"	135°41'34"	19890307 ＼ 19890529	450㎡	老人福祉 施設建設
			97					

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 (右京第325次) 友岡遺跡	都城 集落	室町時代 鎌倉時代 長岡京期 縄文時代	石組井戸 落ち込み	土師器、須恵器、瓦器、 陶磁器 縄文土器	縄文時代中期前半の 土器・石器群

※緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。

图 版



調査地から天王山を望む（北東から）



(1) 調査地全景 (南から)



(2) 落ち込み SX02 堆積状況 (南から)



(1) 落ち込み SX02 4区出土状況 (西から)



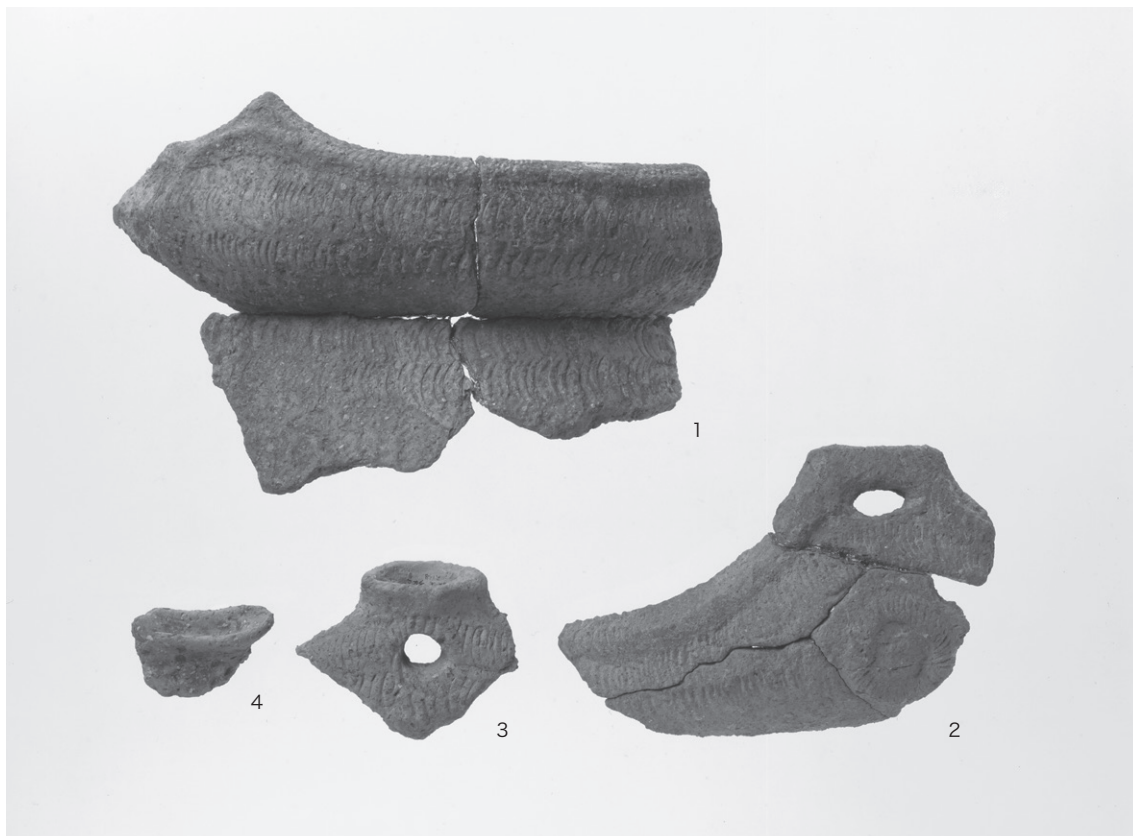
(2) 落ち込み SX02 4区鷹島式土器出土状況 (西から)



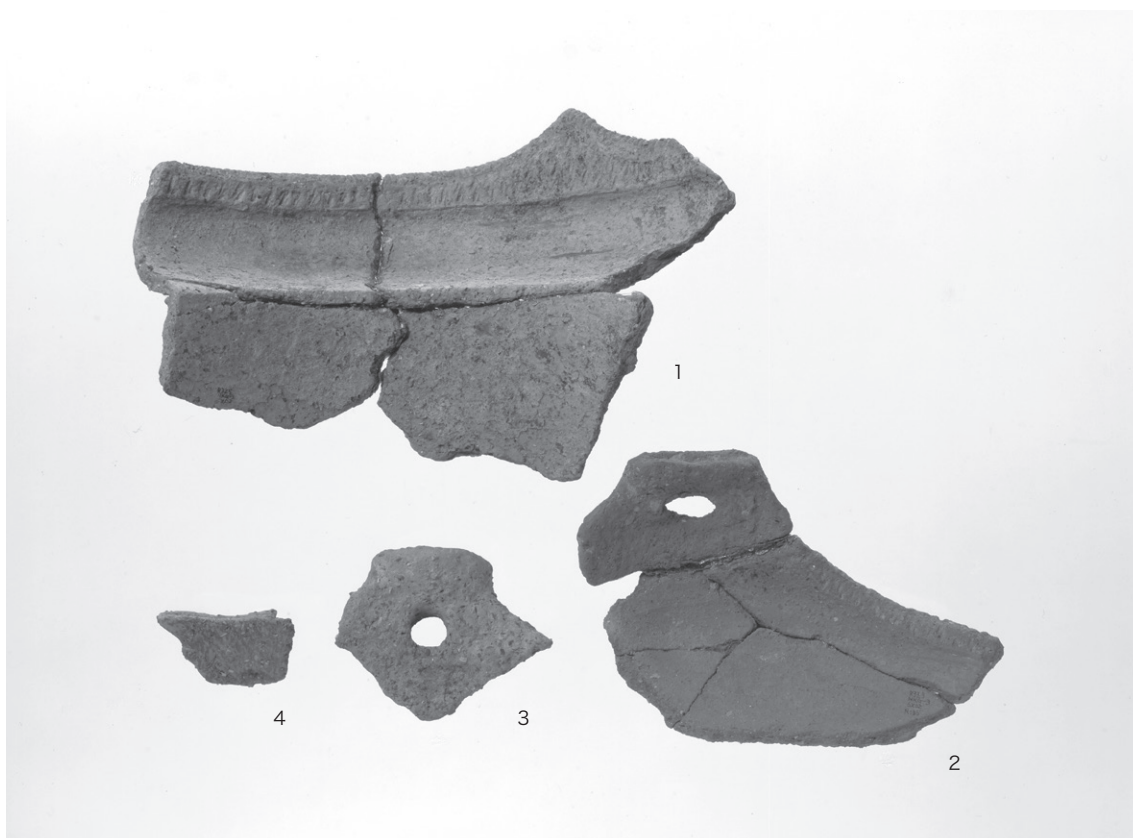
(1) 落ち込み SX02 3区出土状況 (西から)



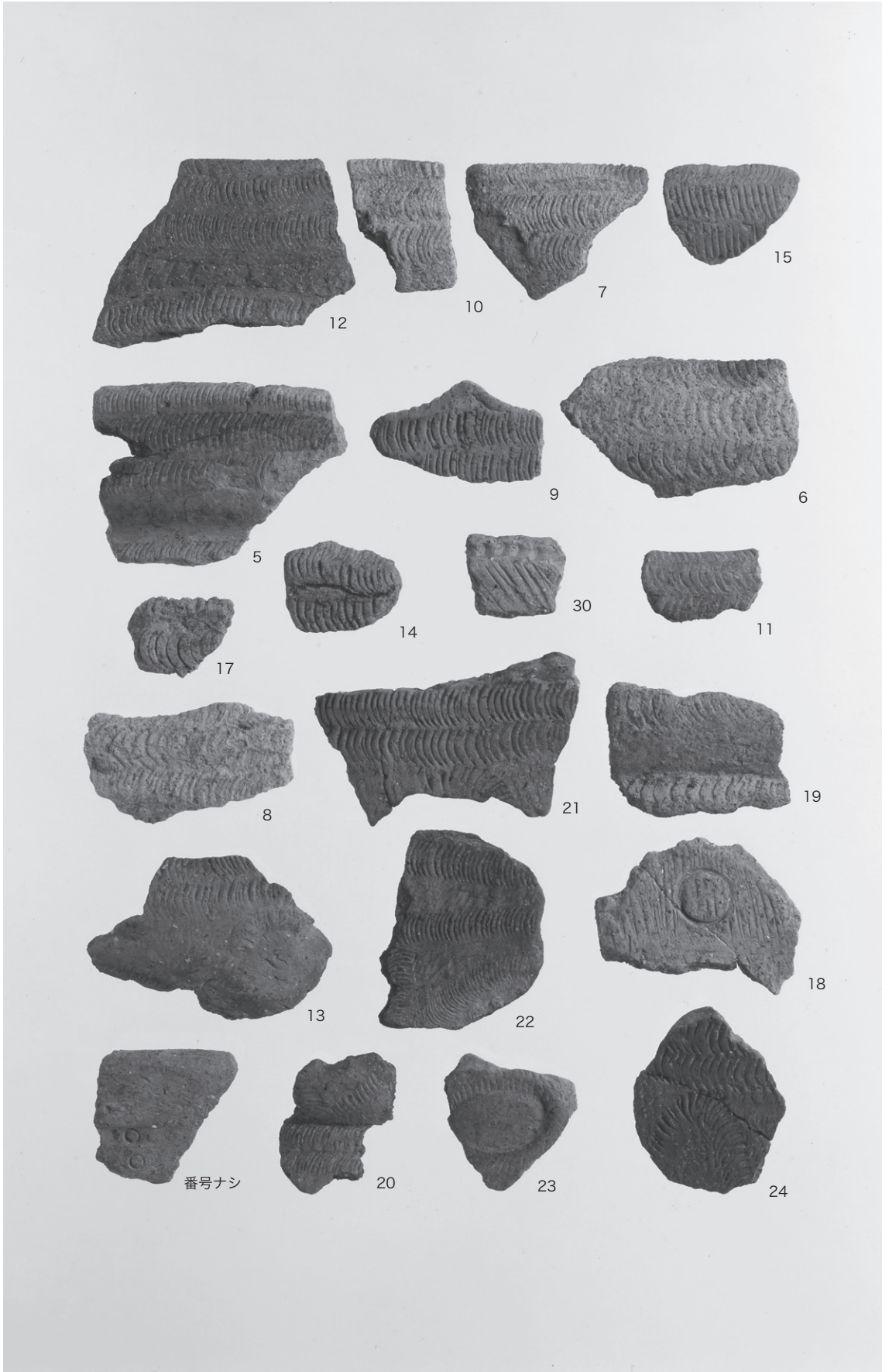
(2) 落ち込み SX02 3区掘り下げ風景 (西から)



(1) 第I群A1類(表)



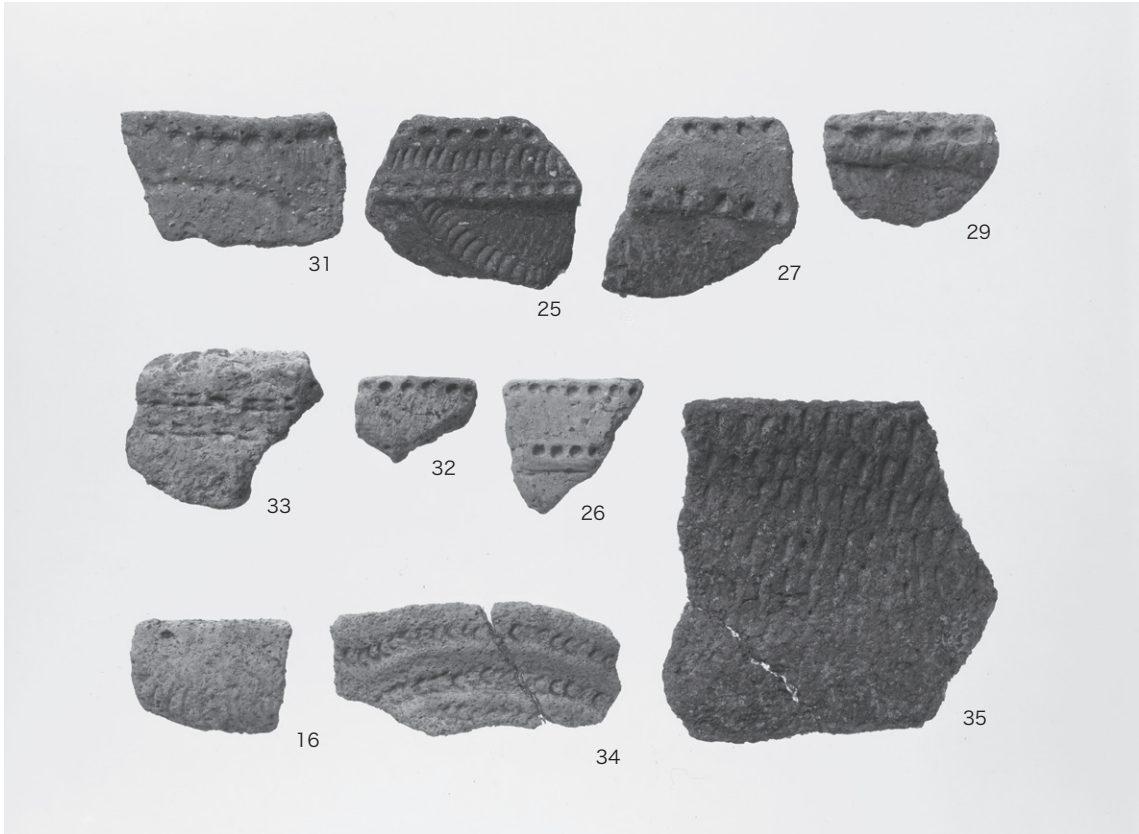
(2) 第I群A1類(裏)



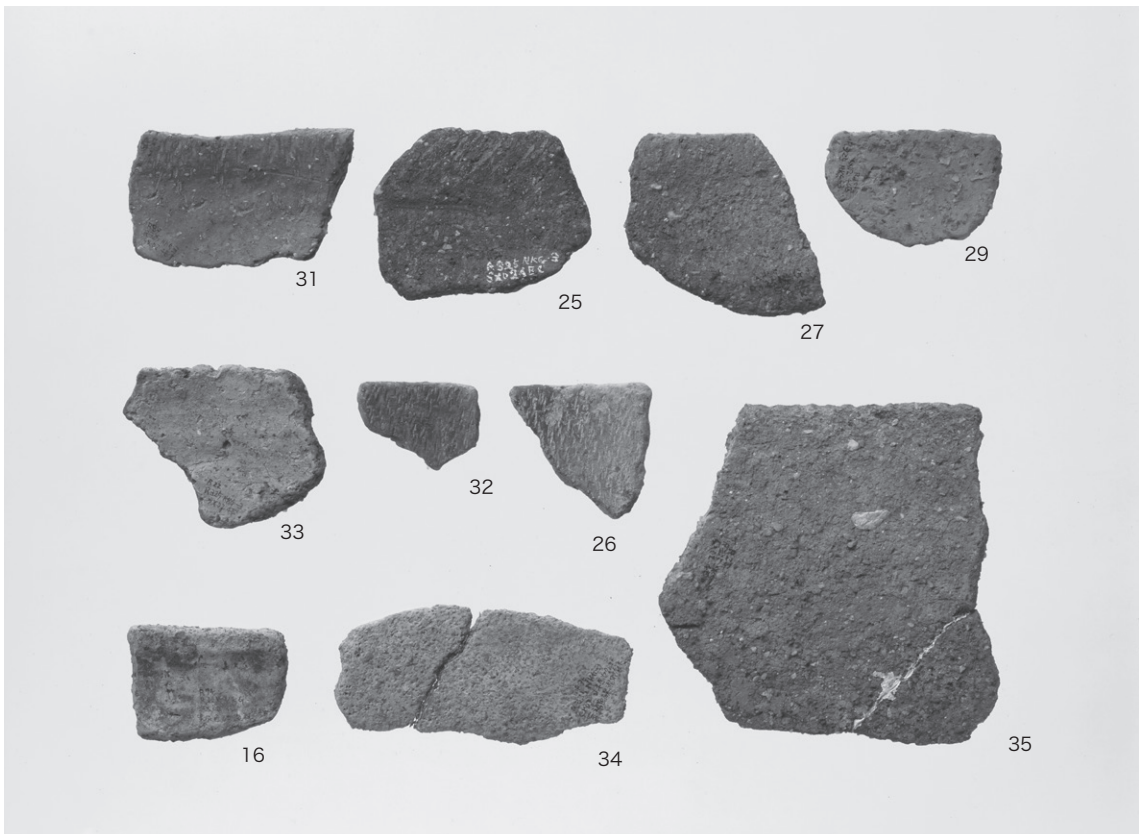
第I群A2類



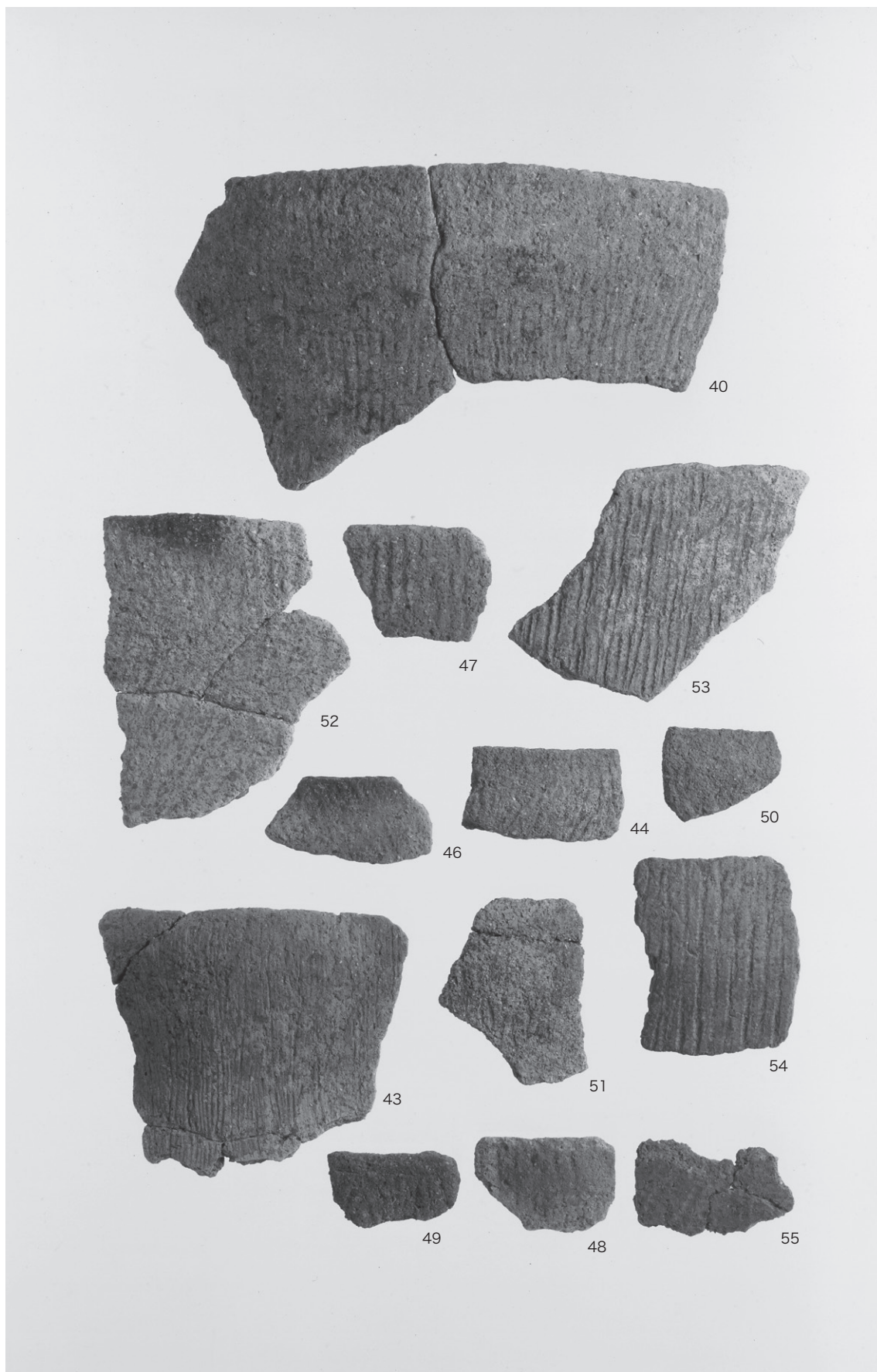
第I群B類・C類



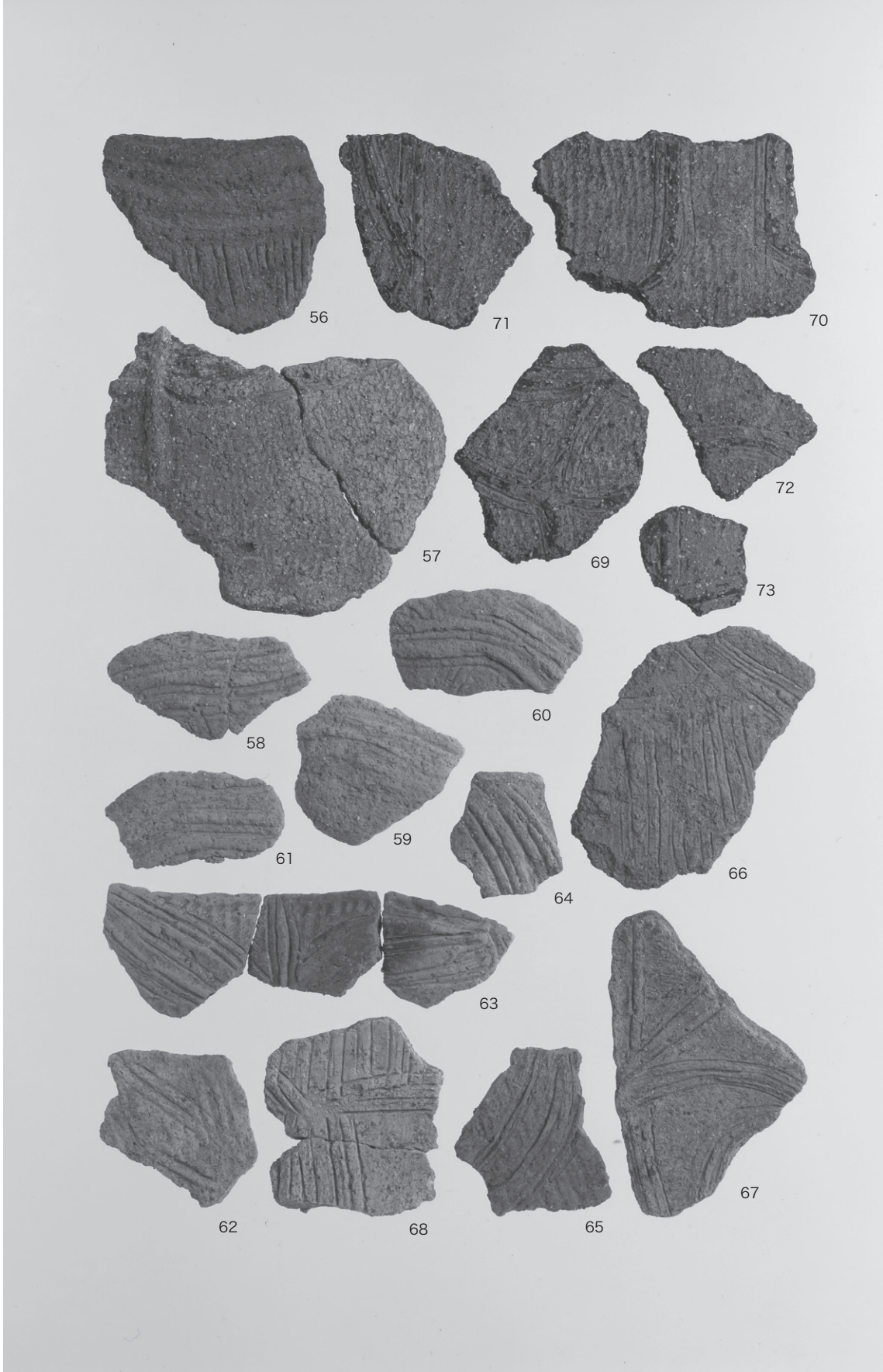
(1) 第I群B類 (表)



(2) 第I群B類 (裏)



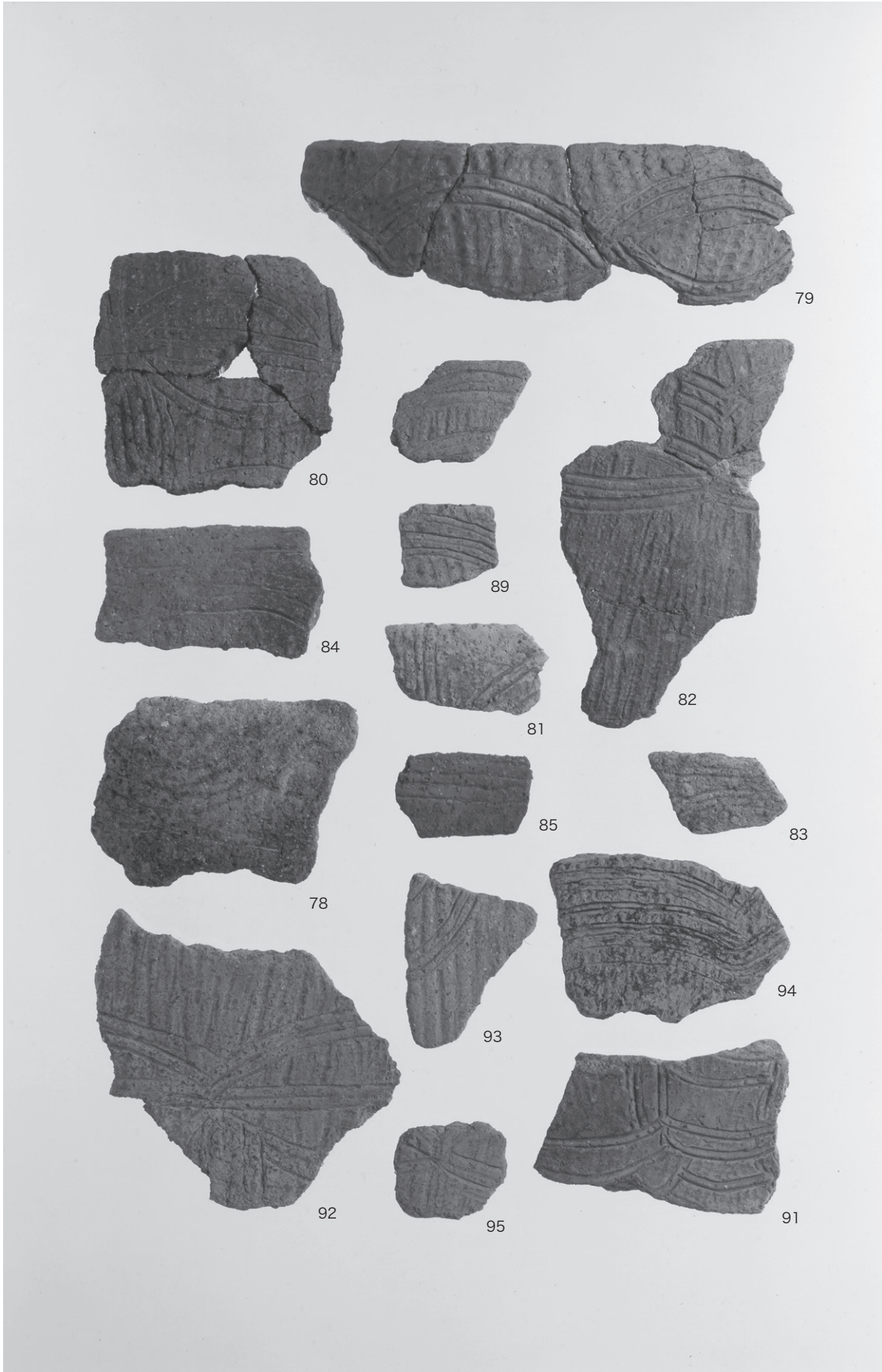
第I群C類



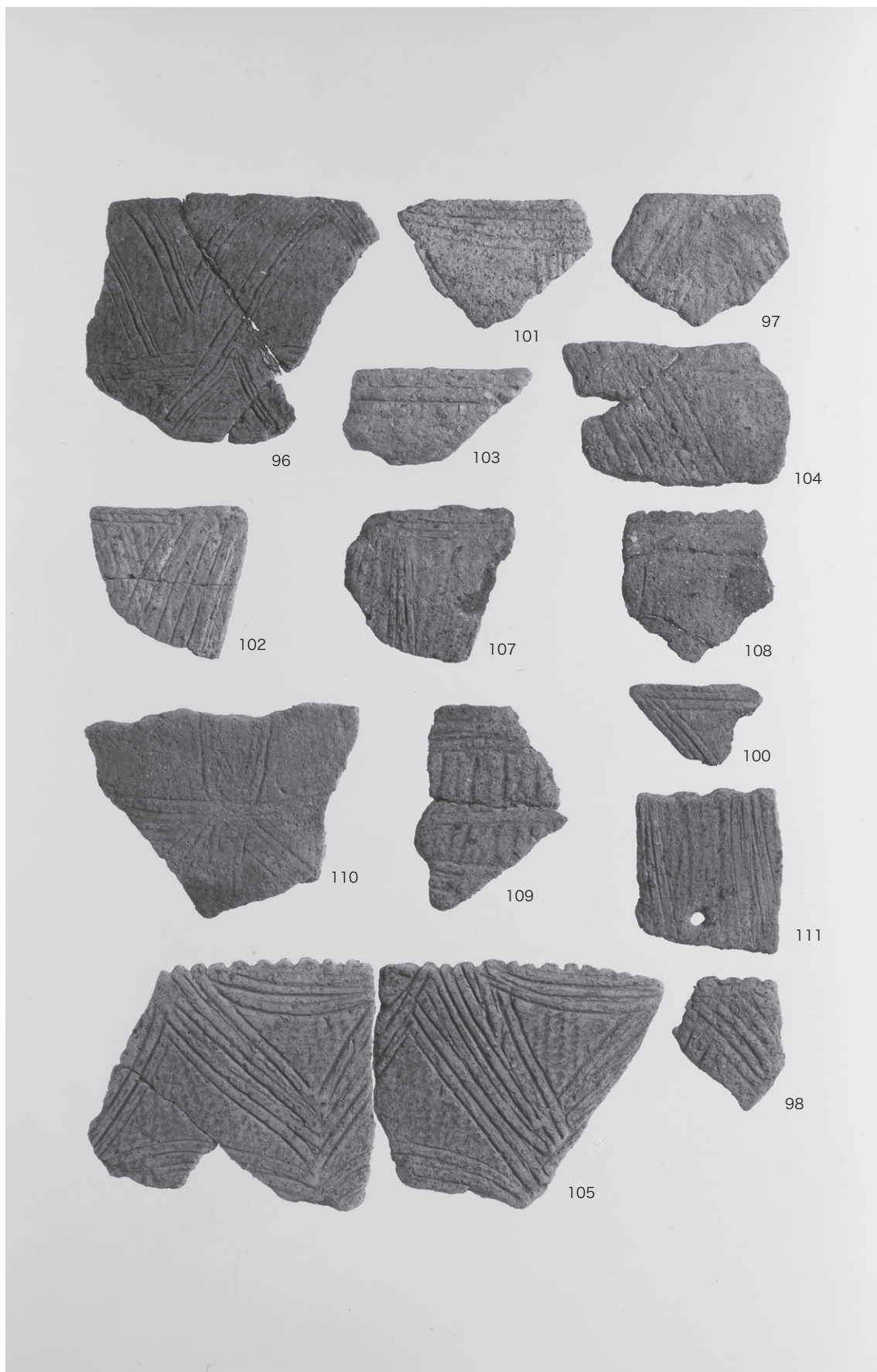
第I群D類



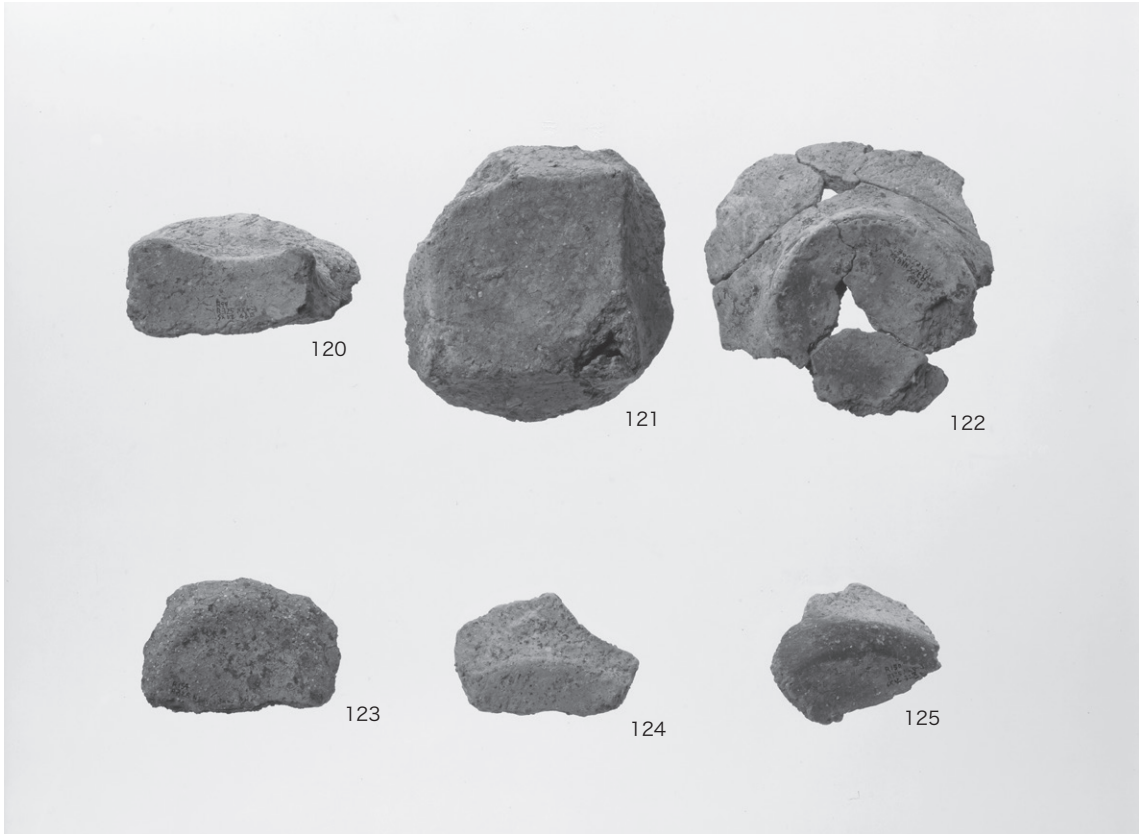
第I群E類(1)



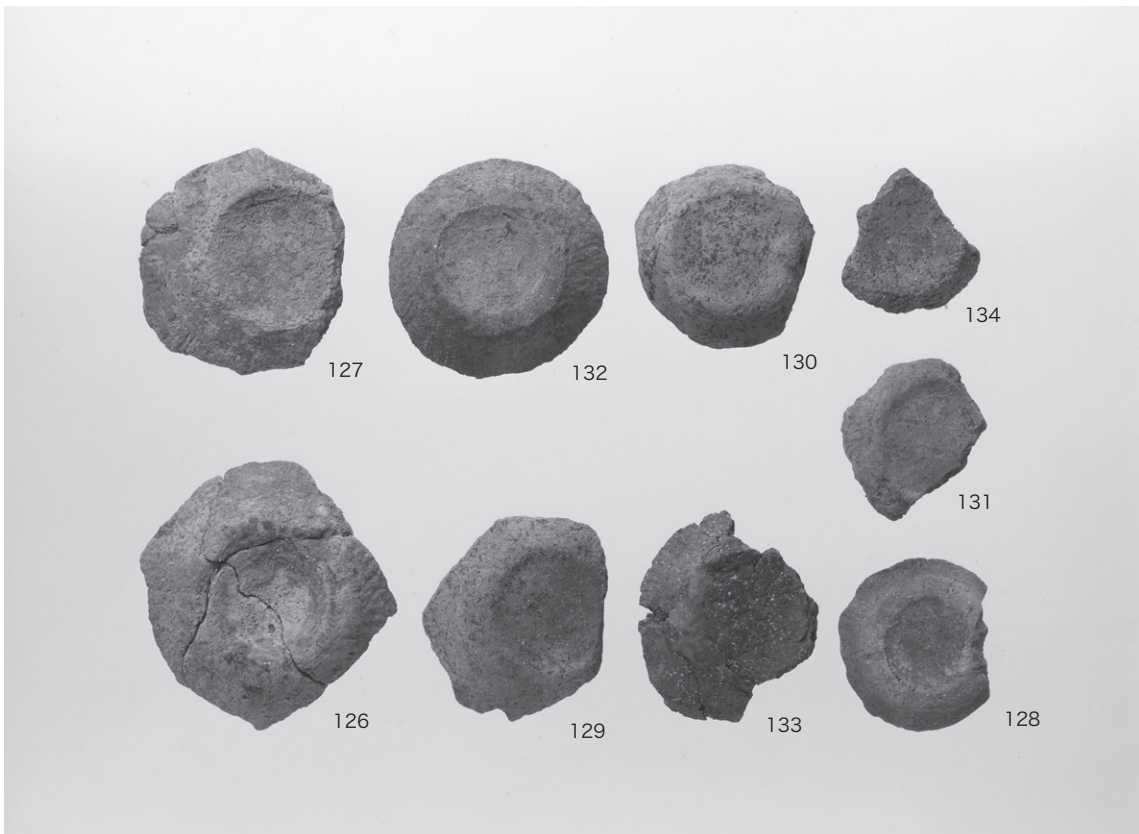
第I群E類(2)



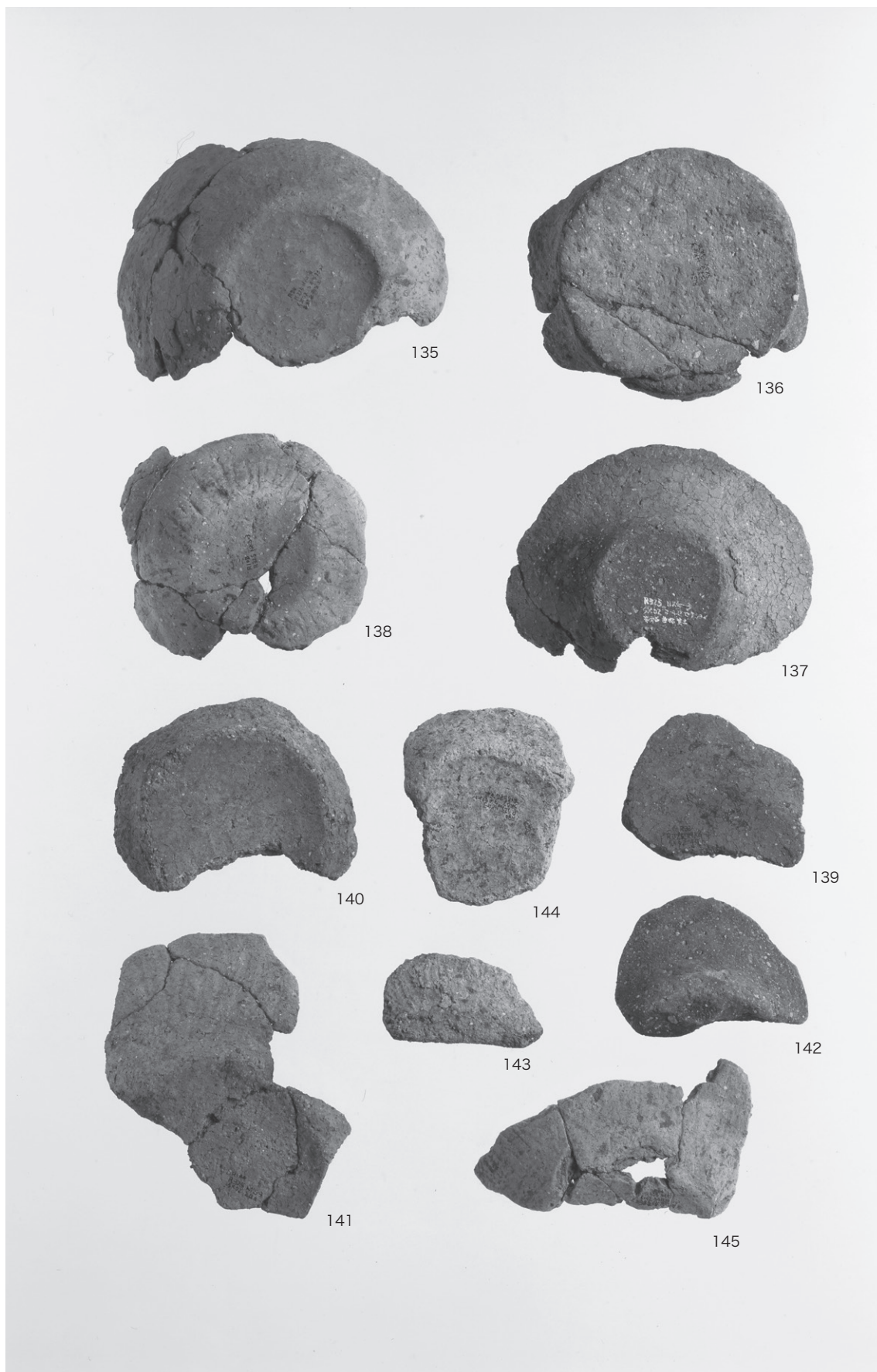
第I群E2類



(1) 第I群底部 (鷹島式~船元II式)



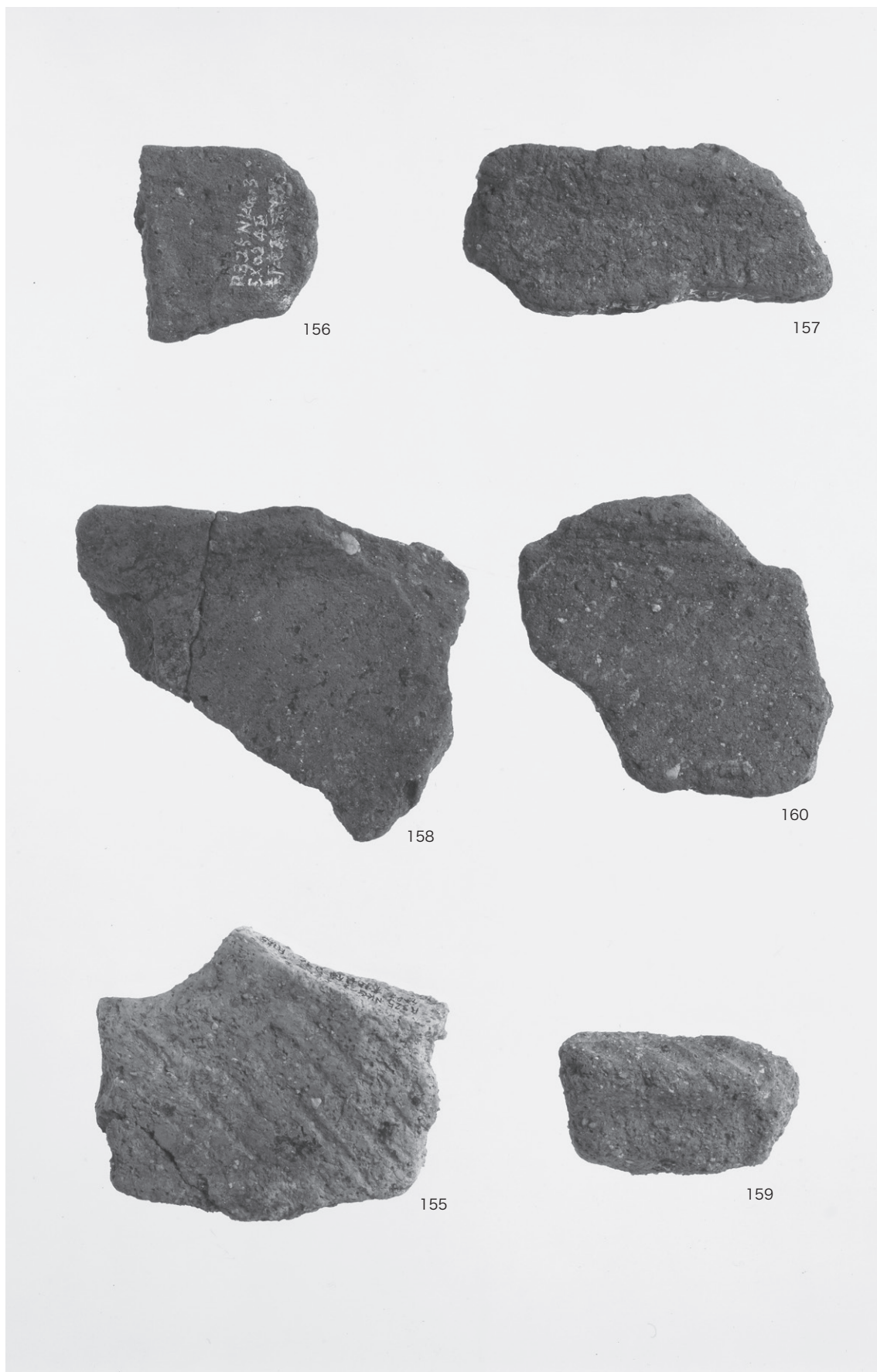
(2) 第I群底部 (船元III式)



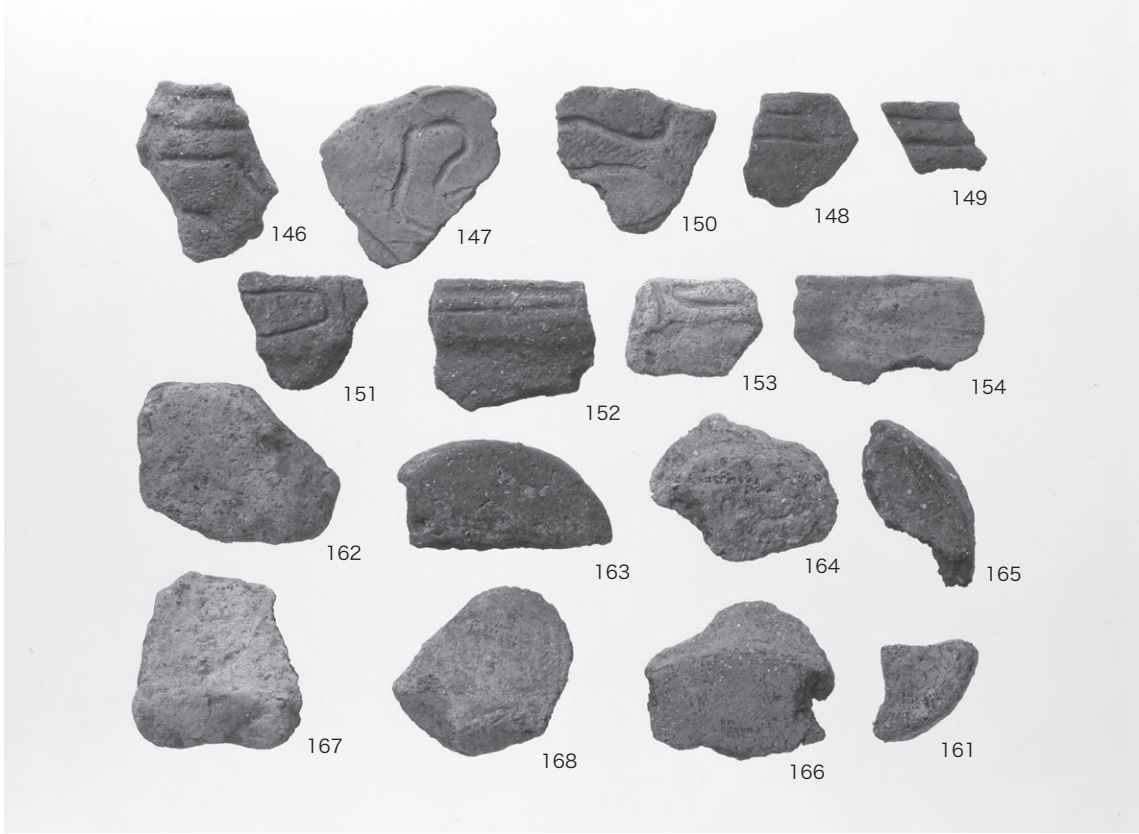
第 I 群底部 (中期)



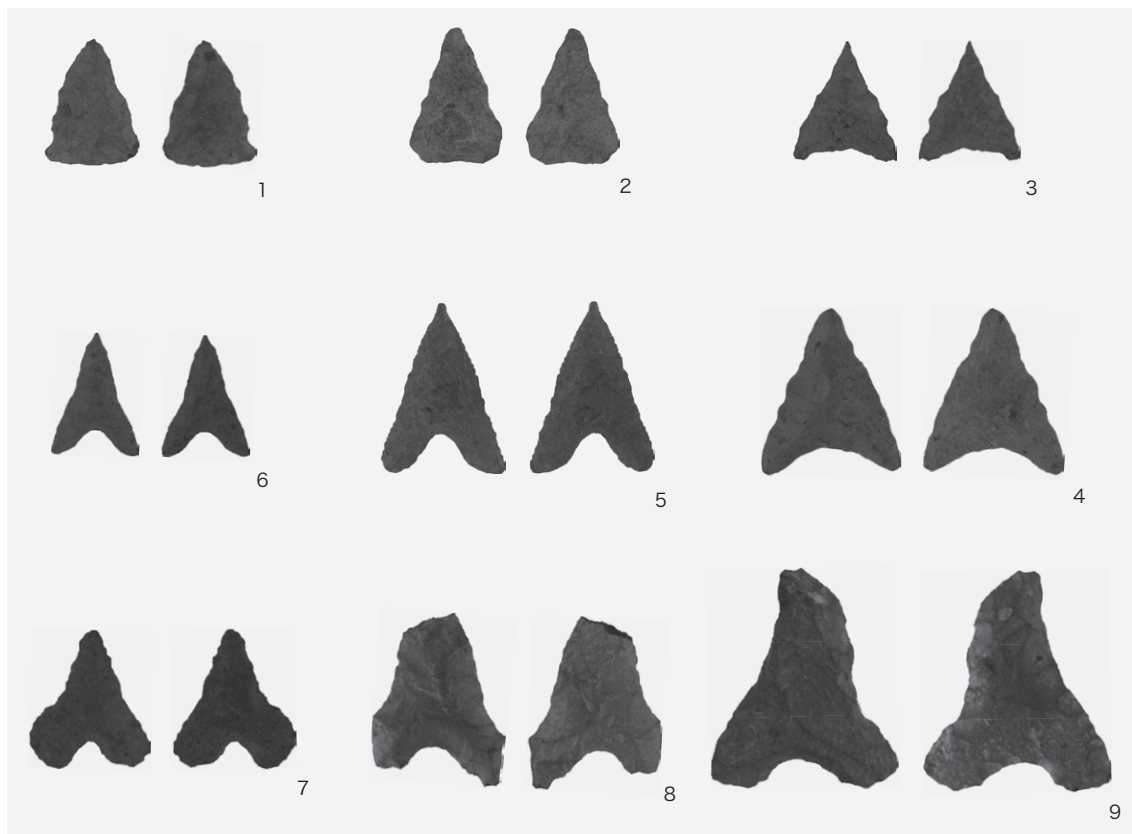
第Ⅱ群後期土器 (表)



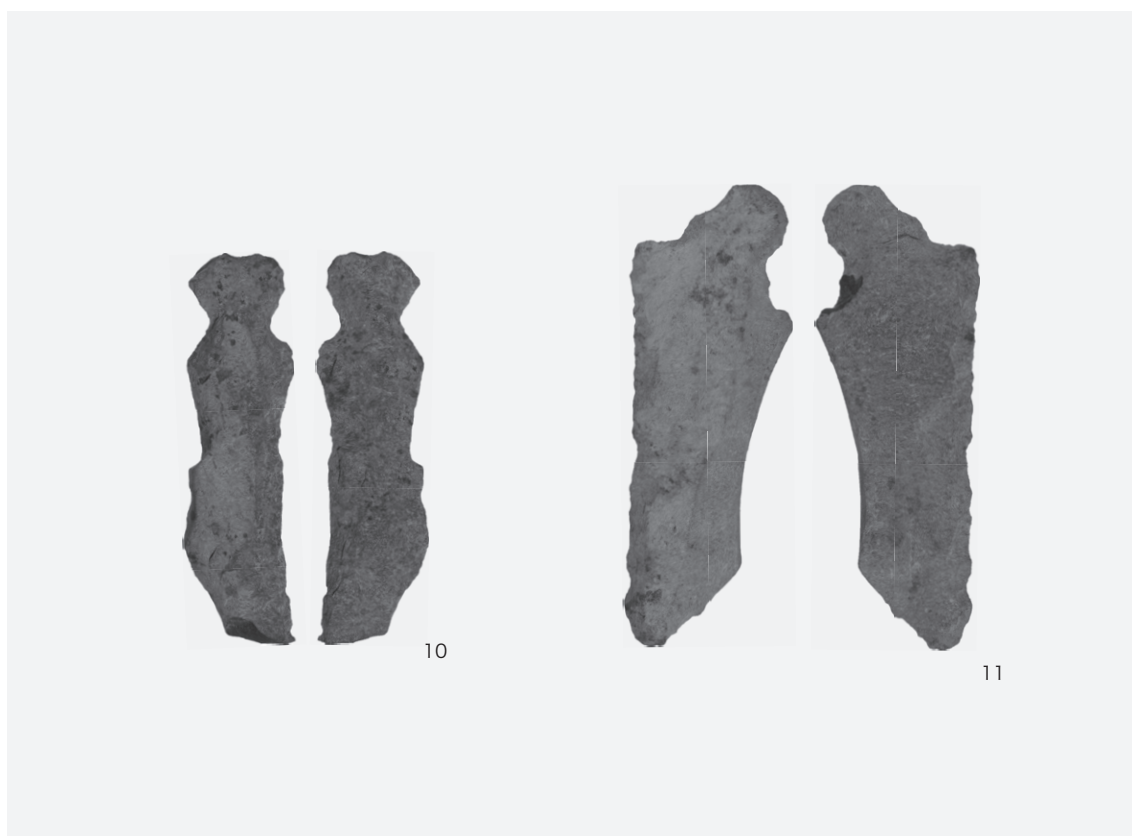
第II群後期土器(裏)



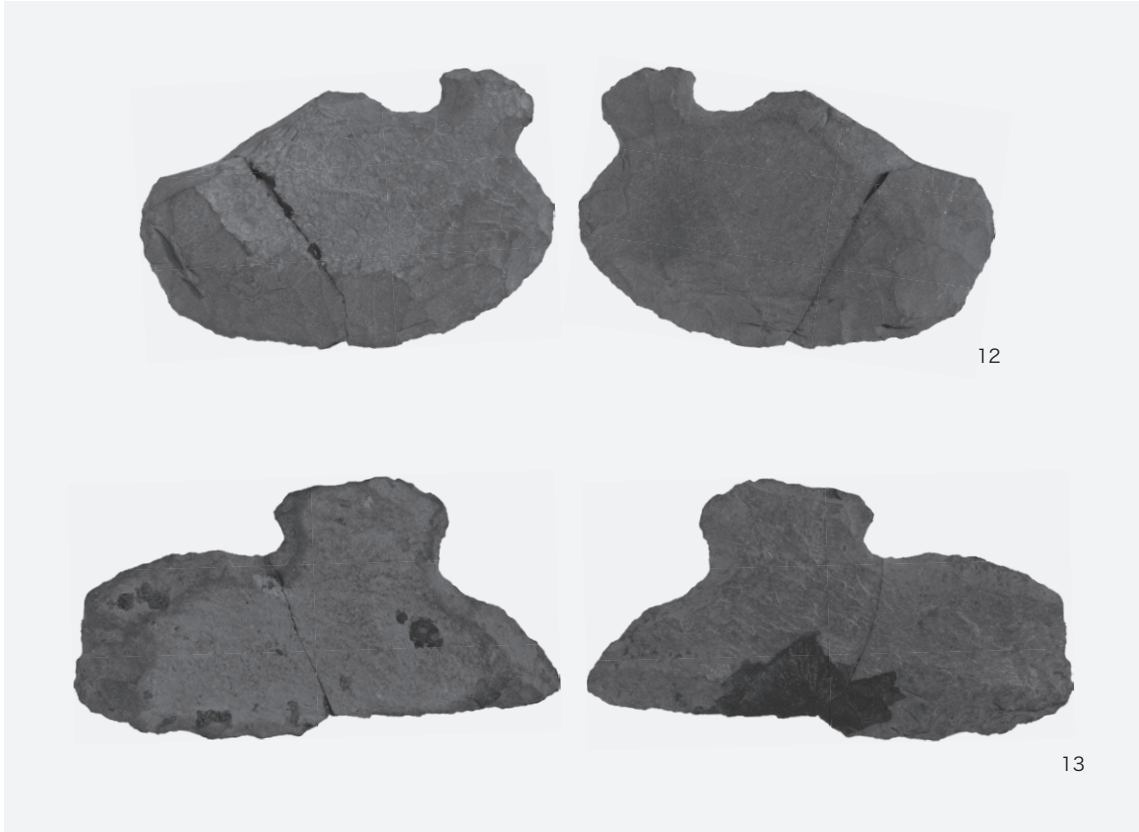
第Ⅱ群後期土器（Ⅰ）



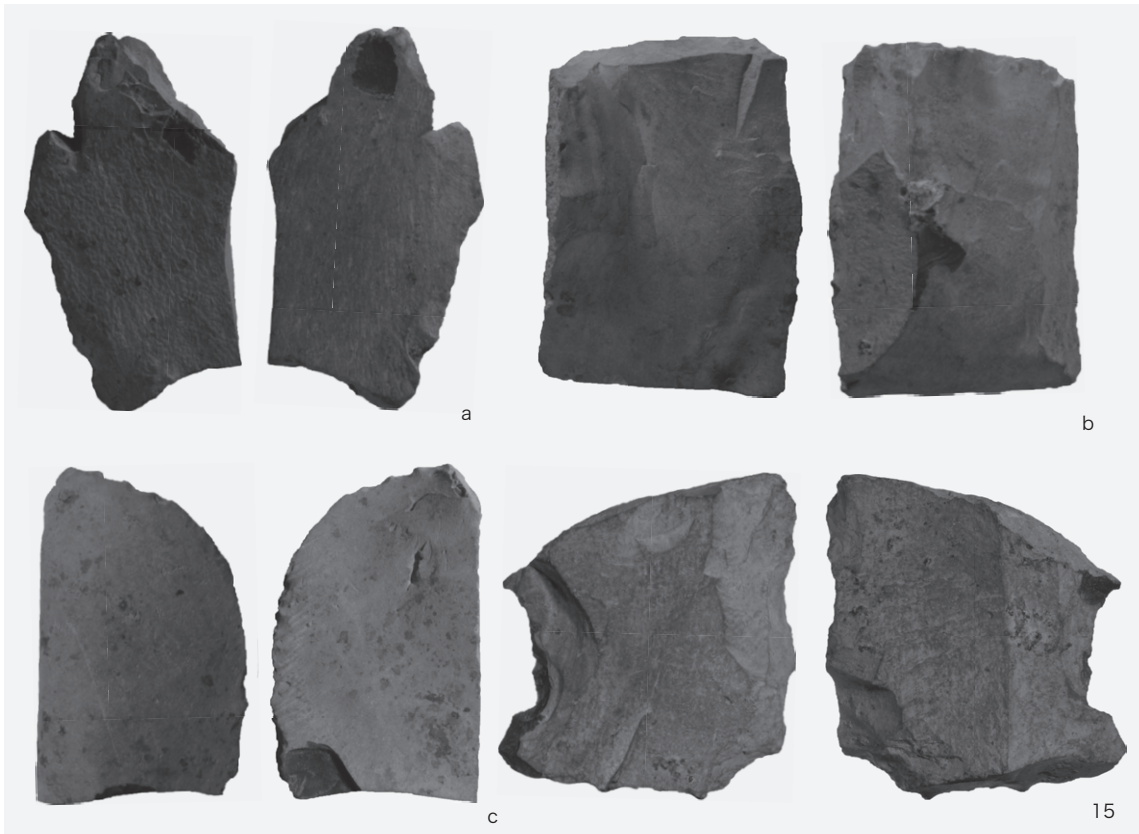
(1) 石鏃・異形石器



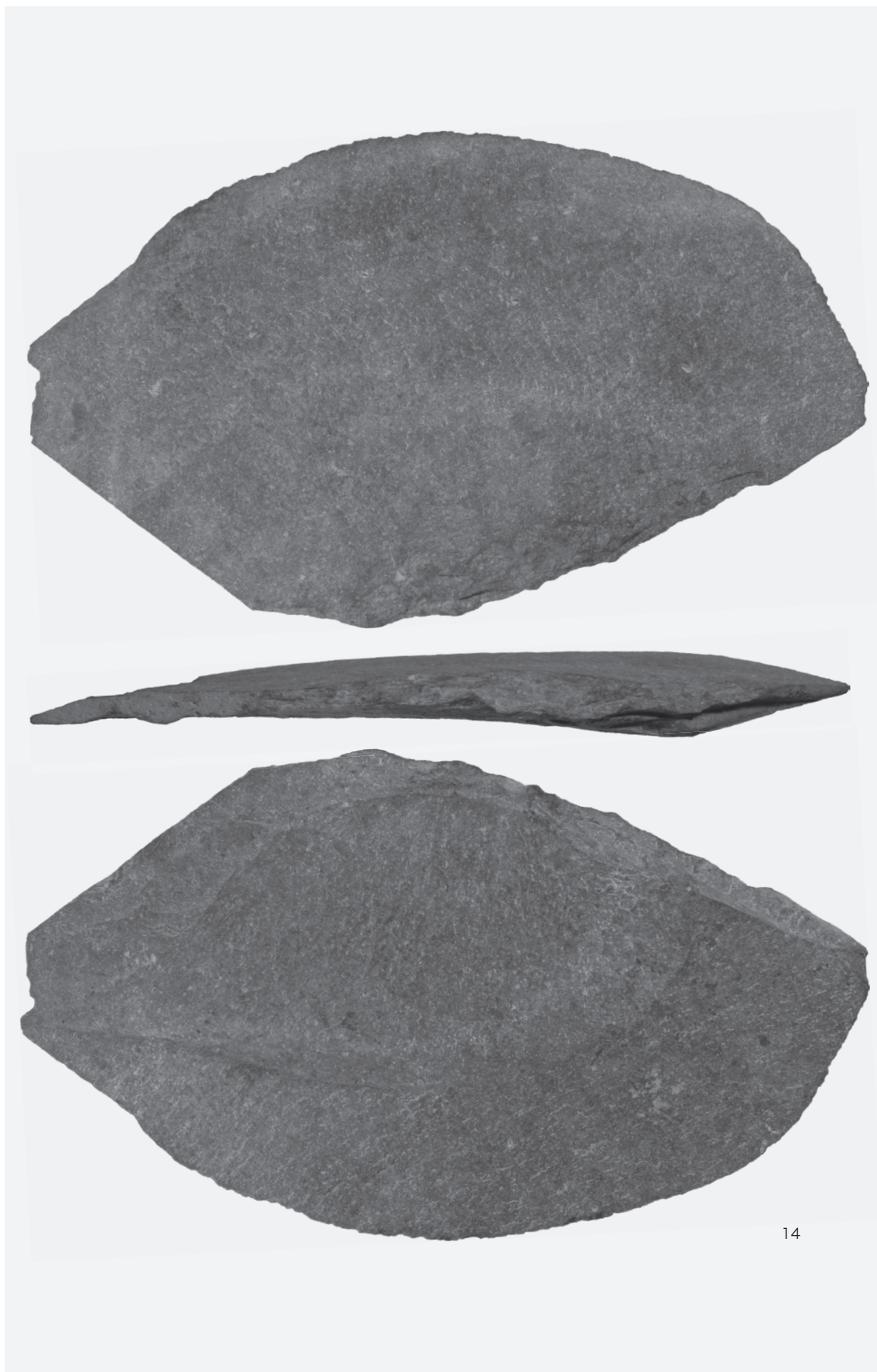
(2) 石匙-1



(1) 石匙-2

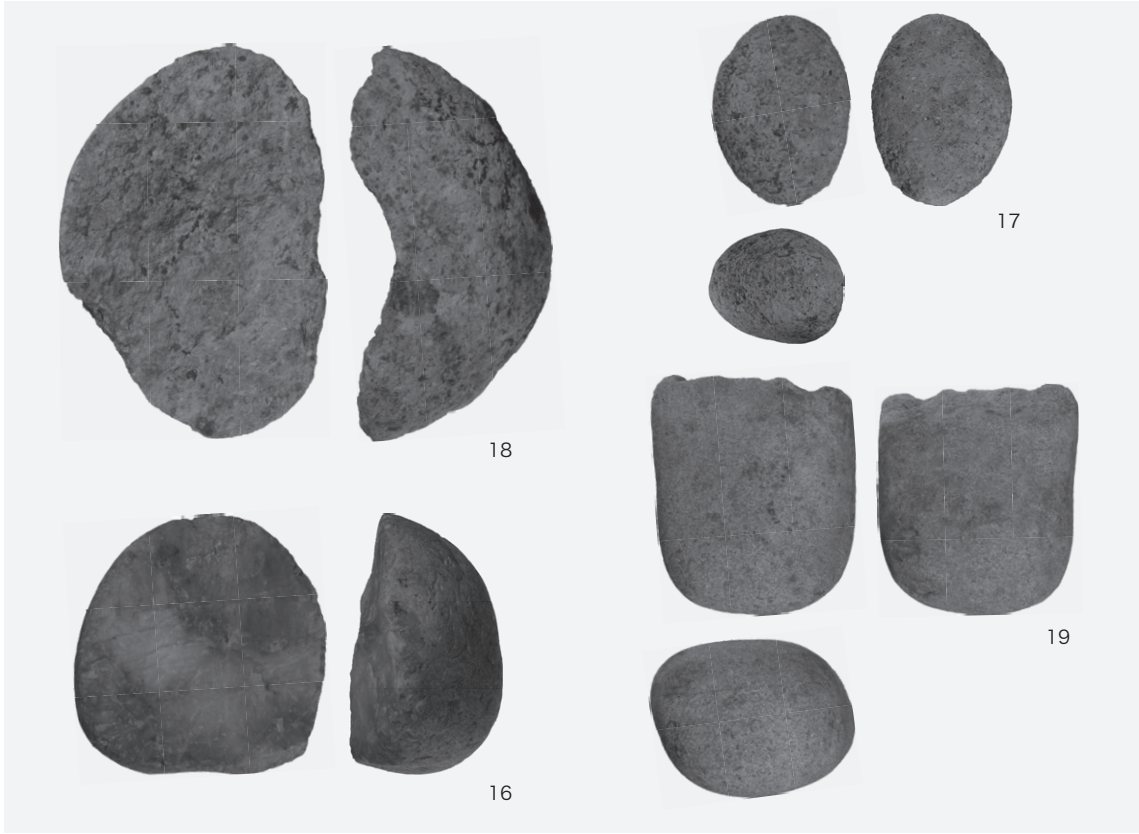


(2) 剥片・石核



14

削器



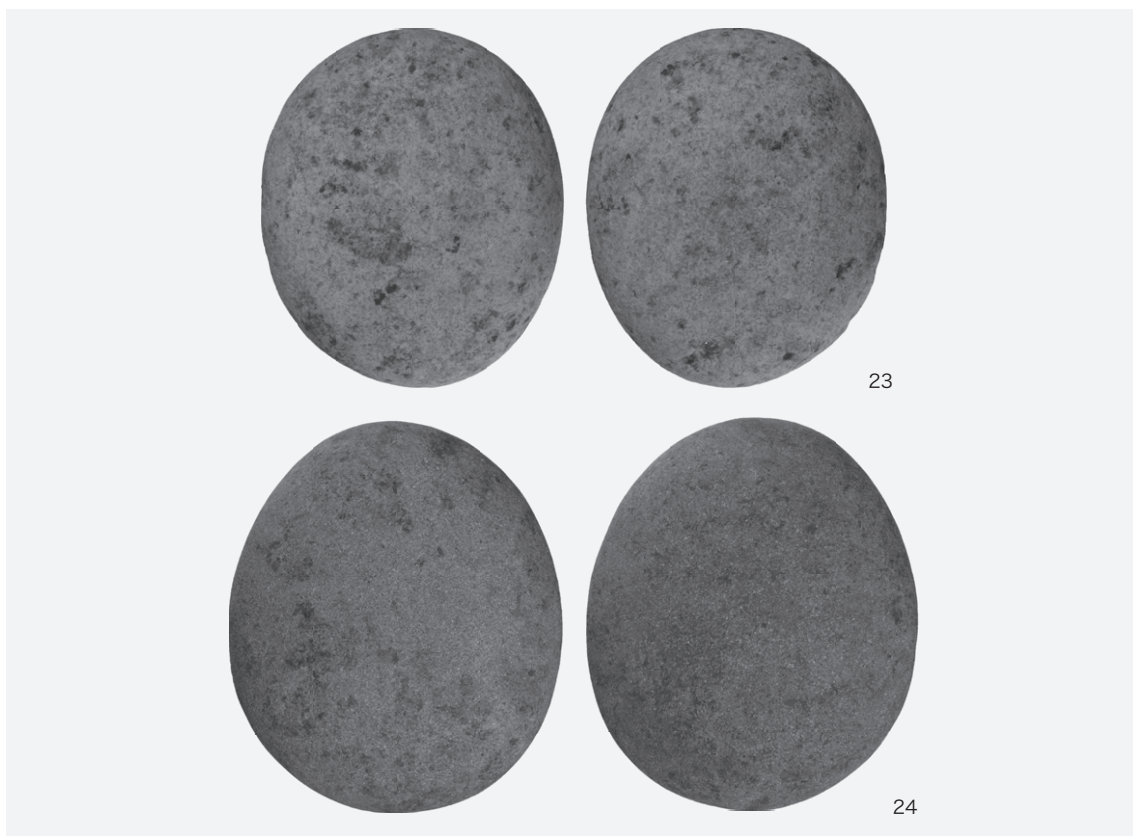
(1) 凹石・敲石



(2) 磨石・台石



(1) 磨石-1



(2) 磨石-2



(1) 磨石-3



(2) 磨製石斧

長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第 57 集

平成 28 年 10 月 31 日 発行

編集発行 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒 617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

電 話 075 - 955 - 3622

F A X 075 - 951 - 0427

印 刷 山代印刷株式会社

〒 602 - 0062 京都府京都市上京区寺之内通小川西入

宝鏡院東町 588 番地

電 話 075 - 441 - 8177

F A X 075 - 441 - 8179